

東京外かく環状道路 埋蔵文化財調査報告書 8

— 市川市平田遺跡(1)～(12) —

平成27年3月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人 千葉県教育振興財団

東京外かく環状道路 埋蔵文化財調査報告書 8

いちかわ ひらた
— 市川市平田遺跡(1)～(12) —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第740集として、東日本高速道路株式会社の東京外かく環状道路建設事業に伴って実施した市川市平田遺跡(1)～(12)の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、東京湾の北辺に沿って発達した砂州上に築かれた古墳の周溝や古代の住居跡等がみつき、また埴輪や土器・陶磁器等もみつかるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成27年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団

理 事 長 堀 田 弘 文

凡 例

- 1 本書は、東日本高速道路株式会社による東京外かく環状道路（市川区間）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市川市平田二丁目184-2ほかに所在する平田遺跡（遺跡コード203-011(1)～(12)）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東日本高速道路株式会社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団（平成24年4月1日公益財団法人に移行）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、主任主事大久保奈奈が担当した。なお、第3章第2節の中近世陶磁器類の鑑定については、上席文化財主事小高春雄、第3章第6節の貝製品・貝類の同定については、文化財主事服部智至の協力を得た。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁教育振興部文化財課、市川市教育委員会、市立市川考古博物館、加藤貴之、松本太郎、山路直充ほか多くの機関、多くの方々から御指導、御協力を得た（敬称略）。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院 平成11年発行 25,000分の1地形図「船橋」を原寸で使用した。これに別記参考文献等により周辺地域の遺跡情報を加筆した。
 - 第2図 国土地理院 平成7年発行 10,000分の1地形図「市川」（東京2-2-3）を20,000分の1に縮小しモノクロに変換して使用した。遺跡範囲を加筆したほか、等高線の一部を赤色でトレースし、標高を加筆した。また河川部分に彩色を加えた。
 - 第3図 柏書房 1989『明治前期 関東平野地誌図集成』「127船橋」を原寸で使用した。これに遺跡範囲を加筆したほか、河川部分に彩色を加えた。
 - 第5図・第6図 市川市 平成19年発行 2,500分の1地形図「都市計画図16」を、第5図は原寸で、第6図は2,000分の1に拡大して使用し、調査区情報を加筆した。
- 8 本書で使用した座標はすべて日本測地系に基づく平面直角座標である。図面の方位はすべて座標北を示す。
- 9 土層の色調、遺物類の色調等の表記に当たっては、小山忠・竹原秀雄 1999『新版標準土色帖』（財）日本色彩研究所を参考にした。
- 10 同一調査次において、離れた複数地点の調査を実施したことがある。逆に同一地点の調査であっても、確認調査と本調査では調査次数が異なる場合がある。そのため、調査次数と区域は対応しないことが多い。なお、調査地点と調査次を識別し、また煩瑣をさけるために、調査次を示す数字は、かっこを付して、1次調査であれば（1）、あるいは（1）次などと表記する。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯	1
第2節	遺跡の位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	8
第3節	調査の概要	10
1	調査区の設定	10
2	調査地点の呼称	10
3	調査次別調査成果	14
4	遺構配置と遺構番号	20
5	基本層序	25
第2章	遺構	27
第1節	古墳	27
第2節	古代の遺構	30
1	竪穴住居	30
2	溝	33
3	土坑	33
第3章	遺物	34
第1節	出土遺物の種類	34
第2節	土器類	34
1	縄文土器・土錘	34
2	弥生土器	34
3	古墳時代の土器	35
4	古代の土器・灰釉陶器	35
5	中近世陶磁器類	37
第3節	埴輪	40
第4節	土製品・石製品	43
1	土製品	43
2	石製品・軽石	44
第5節	銭貨・金属製品	45
1	銭貨	45
2	金属製品	46
第6節	木製品・貝製品・貝類	46
1	木製品	46

2	貝製品	47
3	貝類	48
第4章	まとめ	50

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	平田遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第2図	遺跡の立地	6
第3図	遺跡周辺の旧地形	7
第4図	市川砂州出土朝顔形埴輪	9
第5図	調査区全体図	11
第6図	確認調査トレンチ配置図	12
第7図	遺跡南部（4）次調査区の遺物出土地点	15
第8図	遺跡南部（4）次調査区土層柱状図1	16
第9図	遺跡南部（4）次調査区土層柱状図2	17
第10図	遺跡南部（4）次調査区土層柱状図3	18
第11図	遺跡南部（12）次調査区の遺物出土地点	20
第12図	遺跡南部（12）次調査区の土層	21
第13図	遺跡中央部遺構群周辺の土層	23
第14図	遺跡中央部・北部の土層柱状図	24
第15図	SM001・SD027	28
第16図	SM001周溝内土層・SD027断面図	29
第17図	SI001	30
第18図	SI002・SD015・SD024・SD026・SK023	31
第19図	SI003	32
第20図	SI004	32
第21図	縄文土器・弥生土器	34
第22図	土錘	34
第23図	古墳時代の土師器	35
第24図	古代の土器類	36
第25図	中近世陶磁器類	38
第26図	埴輪（1）	40
第27図	埴輪（2）	41
第28図	埴輪（3）	43
第29図	土製品・石製品	44

第30図	錢貨	45
第31図	金属製品	45
第32図	木製品	47
第33図	貝製品	47
第34図	遺構の配置（中央部北半）	51
第35図	遺構配置と遺物集中地点（中央部南半）	52

表 目 次

第1表	周辺の遺跡	5	第5表	陶磁器類の分布	38
第2表	調査次別調査地点名と調査区域	13	第6表	埴輪観察表	42
第3表	調査区域別調査地点名	13	第7表	錢貨計測表	45
第4表	遺構一覧表	22	第8表	貝類個体数集計表	49

図 版 目 次

図版1	遺跡中央部・南部調査前風景 / 遺跡北端部・南部の土層
図版2	遺跡中央部の土層と軽石出土状況
図版3	SM001 / SD027 / SI004
図版4	SM001 / SI001
図版5	SI003 / SI002・SD015・SD026
図版6	遺跡北部・中央部
図版7	遺跡南部
図版8	土器類
図版9	中近世陶磁器類
図版10	埴輪
図版11	土製品・石製品 / 錢貨・金属製品 / 木製品・植物遺体 / 軽石
図版12	貝類

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

国土交通省は、首都圏の道路交通網の整備を目的として、東京外かく環状道路（外かん道）の建設を計画し、実施にあたり、事業地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて、千葉県教育委員会へ照会した。これに対し千葉県教育委員会は、事業地内に平田遺跡ほか複数の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨の回答をおこなった。これを受け、それらの取扱いについて関係諸機関で慎重な協議を重ねた結果、事業計画の変更が不可能な部分については、やむをえず記録保存の措置を講ずることとなり、調査を財団法人千葉県教育振興財団（平成24年4月1日公益財団法人に移行）が実施することとなった。

本報告書は、平成15年度から平成26年度までの間、断続的に確認調査・本調査を実施し、平成25・26年度に整理作業を行った平田遺跡（1次～12次）の調査成果を報告するものである。なお、平成16年度に実施した2次調査では、トレンチの設定をした段階で地下の埋設物（薬品）による刺激臭が発生したため、発掘調査は中止となった。

発掘調査から報告書刊行に至るまでの調査組織および担当者は以下のとおりである。

（発掘調査）

平成15年度

期 間 平成16年1月26日～平成16年2月27日
組 織 調査部長 斎木 勝、西部調査事務所長 田坂 浩
担当職員 研究員 山田貴久
内 容 上層確認調査700㎡／対象面積5,400㎡ …（1）

平成18年度

期 間 ①平成18年5月8日～平成18年5月31日
②平成18年11月1日～平成18年12月5日
組 織 調査部長 矢戸三男、西部調査事務所長 田坂 浩
担当職員 ①上席研究員 柴田龍司
②上席研究員 榊原弘二
内 容 ①上層確認調査432㎡／対象面積4,311.97㎡ …（3）
②上層確認調査311㎡／対象面積4,235.22㎡ …（4）

平成19年度

期 間 ①平成19年7月9日～平成19年8月30日
②平成19年12月3日～平成19年12月14日
組 織 調査部長 矢戸三男、西部調査事務所長 及川淳一
担当職員 ①上席研究員 柴田龍司
②上席研究員 郷堀英司
内 容 ①上層確認調査89㎡／対象面積2,858㎡、本調査1,970㎡ …（5）
②上層確認調査132㎡／対象面積1,490㎡ …（6）

平成20年度

期 間 平成20年 5 月 1 日～平成20年 5 月12日
組 織 調査研究部長 大原正義、西部調査事務所長 及川淳一
担当職員 上席研究員 柴田龍司
内 容 上層確認調査193㎡／対象面積1,347㎡ … (7)

平成23年度

期 間 ①平成23年 5 月16日～平成19年 5 月31日
②平成23年10月11日～平成23年10月31日
組 織 調査研究部長 及川淳一、西部調査事務所長 橋本勝雄
担当職員 ①上席研究員 薮 淳一
②上席研究員 田井知二
内 容 ①上層確認調査163㎡／対象面積862㎡ 本調査45㎡ … (8)
②上層確認調査482㎡／対象面積766㎡ 本調査211㎡ … (9)

平成24年度

期 間 ①平成24年 7 月17日～平成24年 7 月31日
②平成24年12月14日
組 織 調査研究部長 関口達彦、調査 1 課長 白井久美子
担当職員 ①主任上席文化財主事 池田大助
②主任上席文化財主事 池田大助
内 容 ①上層確認調査800㎡／対象面積800㎡ … (10)
②上層確認調査20㎡／対象面積61㎡ … (11)

平成26年度

期 間 平成26年 9 月 8 日～平成26年 9 月25日
組 織 調査研究部長 伊藤智樹、調査課長 白井久美子
担当職員 上席文化財主事 宮 重行
内 容 上層確認調査274㎡／対象面積2,748㎡ … (12)

(整理作業)

平成25年度

期 間 平成25年 8 月 1 日～平成25年 9 月30日
組 織 調査研究部長 伊藤智樹、調査課長 白井久美子
担当職員 主任主事 大久保奈奈
内 容 記録整理から水洗・注記・分類・実測・撮影・原稿執筆の一部 … (1) ～ (8)

平成26年度

期 間 平成26年 4 月 1 日～平成26年 5 月15日
組 織 調査研究部長 伊藤智樹、調査課長 白井久美子
担当職員 主任主事 大久保奈奈
内 容 写真撮影・トレース・挿図・図版・原稿執筆・編集から刊行まで … (1) ～ (12)

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

市川市平田二丁目に所在する平田遺跡は、下総台地の南西端部分から800mほど南方、東京湾最奥部に発達した市川砂州上に立地する（第1図～第3図）。砂州の標高は標高4m～7mと捉えられるが、ごく限られた範囲において8mに達する地点がある（第2図）。なお、市川市史によれば、かつては標高11mに達していた地点もあった（市川市史編纂委員会1971 45頁）。

東京湾の北辺に沿って横たわっている市川砂州は、おおむね東西方向に発達しており、周辺低地部分との比高は2m～5m、幅0.5km～1.5km、長さ4kmの規模をもつ。砂州の海側は直線的であるが、台地を望む北側縁辺は、弧状の曲線が連なり、曾谷台付近でもっとも幅広くなっている。市川砂州の範囲を現在の地名で記すならば、東端は、柏井台南端部の中山台・印内台・海神台に接する高石神付近にあり、西端は、江戸川（古利根川）に接する市川二丁目である。

砂州の北方には、下総台地（標高20m～25m）が控えている。下総台地の基盤は砂層（下総層群成田層約13万年前）で、その上部に、箱根火山や富士火山を主たる供給源とする火山灰が順次降下し、これらが土壌化して関東ローム層が形成された。ローム層は、下末吉ローム層・武蔵野ローム層・立川ローム層と堆積し、下総台地を形作っている。市川市域の下総台地は、北から南へ張り出す舌状台地に分かれていて、西から国府台・曾谷台・柏井台と呼ばれているが、曾谷台におけるローム層の厚さは約7mである。なお、火山灰は、陸化した場所ではローム層となったが、沼や湿原では粘土層となった（堀越2006）。

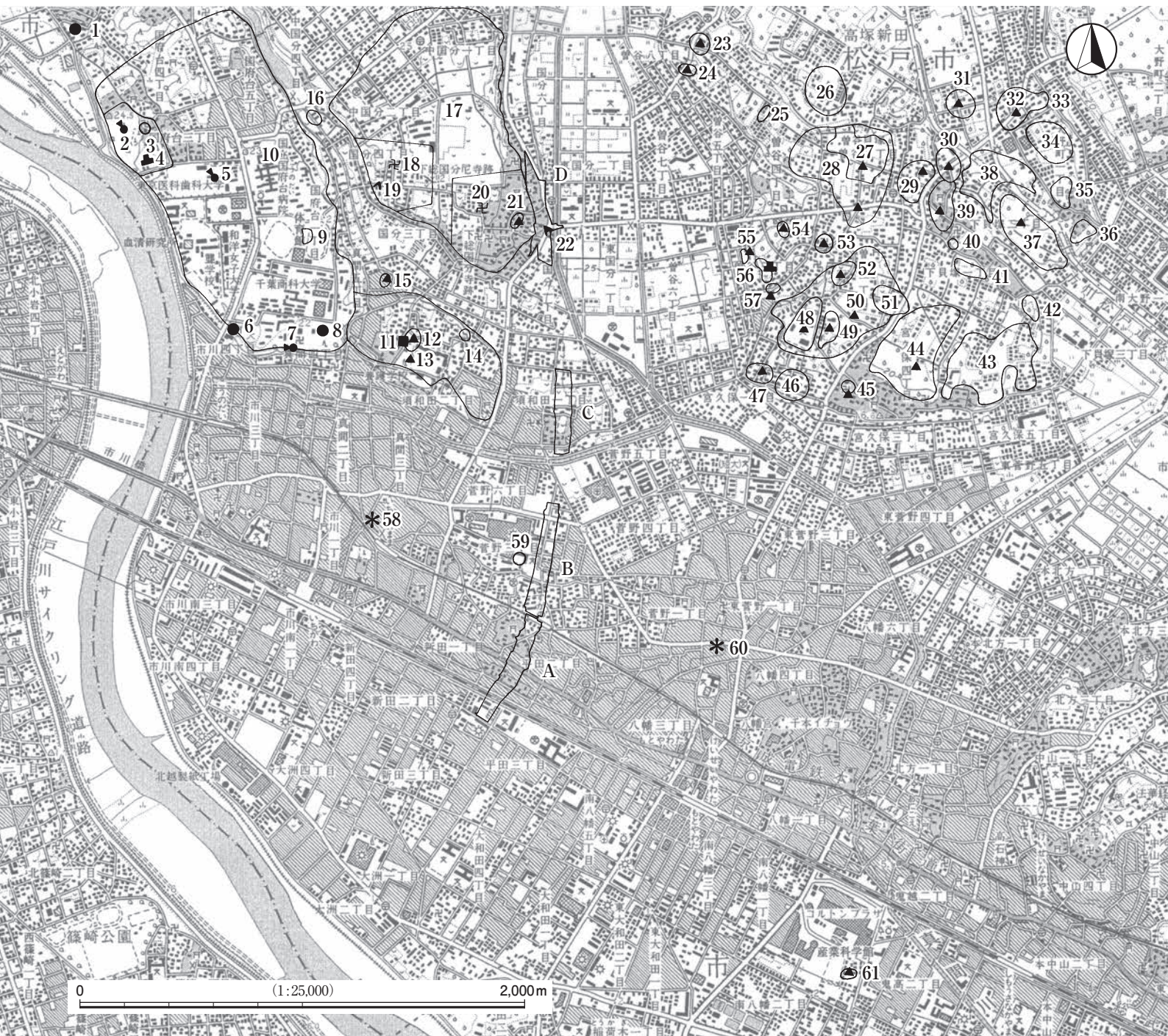
約10万年前の海進で、成田層（砂層）の南方（武蔵野湾）側の浸食が進み、南部に砂が堆積して市川砂層が形成された。この市川砂層は、その後の海面低下により陸化し、海岸段丘となって上部にローム層を堆積させている（下総下位面）。さらに、約8万年前と約5万年前の2回の海進と海面低下により、台地の縁辺に二つの段丘（千葉第一段丘・千葉第二段丘）が形成された（堀越2006）。

市川市の北部地域にある舌状台地（国府台・曾谷台・柏井台）に挟まれた低地部分は、西方を国分谷、東方を大柏谷と呼んでいるが、これらの谷部には、氷期が終わり気候の急激な温暖化が進んだ8,000BP以降になると、海水準の上昇により内湾（古市川湾）が形成された。そしておよそ7,000BP頃まで内湾性の泥が堆積した後、海水準は低下に転じ、5,000～4,000BP頃に砂州（市川砂州）が形成された（杉原ほか2014）。縄文海進期の海底の深い部分には、沖積中部泥層と呼ばれる青灰色粘土層が堆積している（堀越2006）。

平田遺跡が立地する市川砂州は、縄文海進期に台地の縁辺部が波に浸食され成田層群から運び出された砂等が、東京湾北辺の沿岸流の影響の下、沿岸部（古市川湾湾口部）に堆積した地形で、形成時期は約5,000年前から約3,500年前頃（縄文時代後半期）と考えられている。なお、市川砂州の下には、市川貝層と呼ばれる縄文貝塚を構成する貝種と一致する貝殻を多量に含む砂層がある。かつて平田地区においてビル建設工事が行われた際、この貝殻を多く含む砂層中からコククジラの化石が発見された。地下4m（海拔0m）付近でみつかったコククジラの化石の年代測定結果は約5,000年前であった。

市川砂州北側の古市川湾が消滅したのは、縄文時代晩期頃と想定されている（堀越2006）。市川市域の北部に展開した縄文貝塚群形成の要因となった古市川湾が縮小・消滅したことにより、真間川や低湿地が現れ、弥生時代以降の景観が形成された（杉原ほか2014）。

かつて古市川湾であった市川砂州北方の低地部分には、下総台地上の分水嶺（標高30m付近）を源とす



図中番号：第1表参照

(主要遺跡)

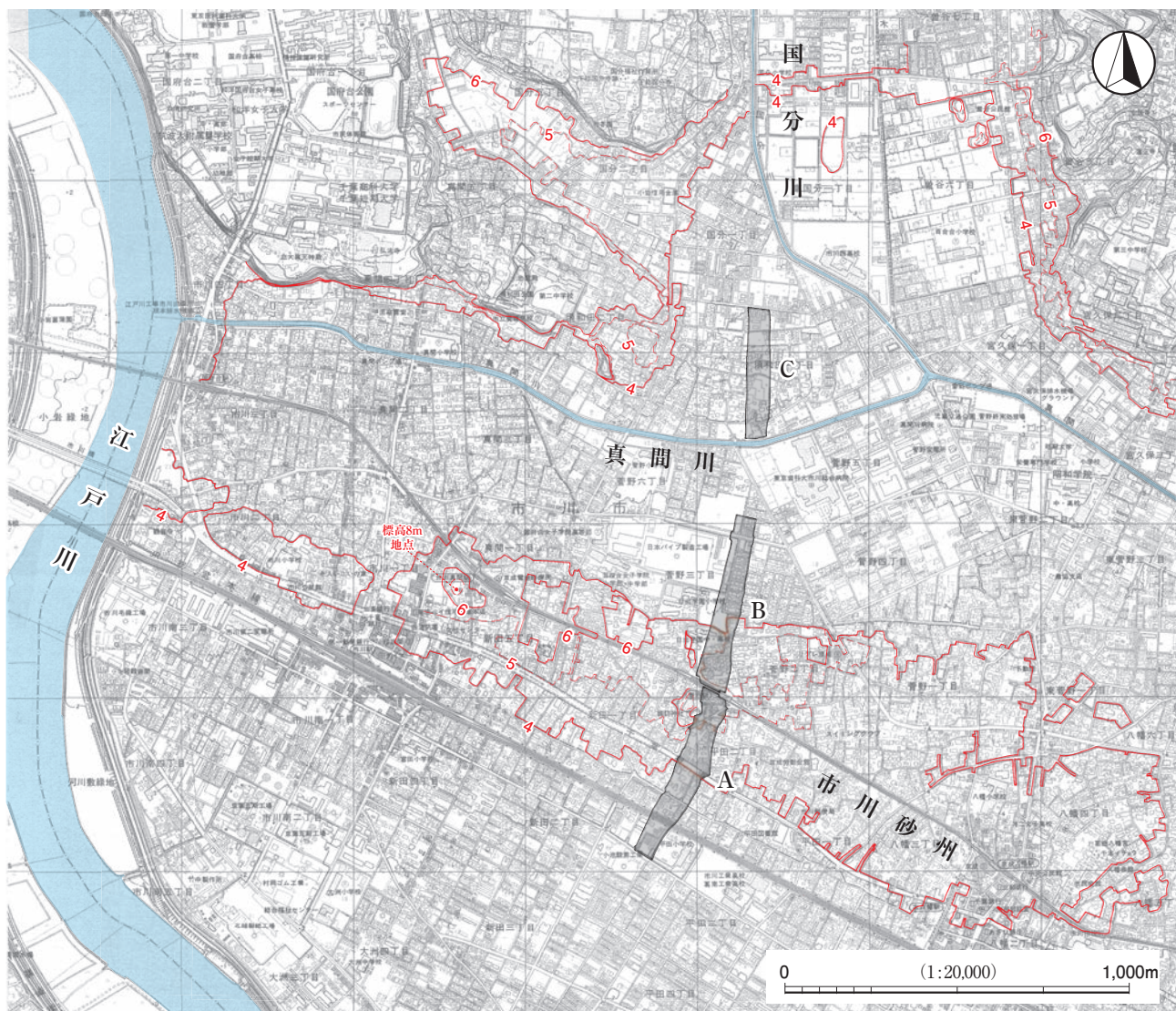
A 平田遺跡 B 菅野遺跡 C 後通遺跡 D 北下遺跡

- 1 丸山古墳 2 明戸古墳 4 国府台城跡 5 法皇塚古墳 6 国府台遺跡第29地点 7 弘法寺古墳
 8 真間山古墳 9 下総社跡遺跡 10 国府台遺跡 11 太鼓塚古墳 13 須和田遺跡 18 下総国分尼寺跡
 20 下総国分寺跡(僧寺跡) 27 曾谷貝塚 28 曾谷遺跡 44 山ノ後遺跡 48 三中校庭遺跡 50 曾谷南遺跡
 58 真間一丁目(伝) 59 日出学園遺跡 60 東菅野一丁目 61 鬼高遺跡

第1図 平田遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

第1図 番号	遺跡名	所在地	種別	時代(時期)等	備考
1	丸山古墳	松戸市栗山	(推定)円墳	古墳(後)	墳丘消滅。推定径約15m。伝埴輪出土。県立栗山浄水場付近採集埴輪(円筒・形象)あり
2	明戸古墳	市川市国府台3丁目67-6他	前方後円墳 箱式石棺2基	古墳(後)	墳丘遺存。黒雲母片麻岩(いわゆる筑波石)製石棺2基露呈。約40m。埴輪(円筒・形象)
3	里見公園内遺跡	市川市国府台3丁目67-6他	集落跡	奈良・平安	
4	国府台城跡	市川市国府台3丁目3-1他	城館跡・古墳	古墳・中世	第2地点において古墳の周溝が確認されている
5	法皇塚古墳	市川市国府台2丁目1-31他	前方後円墳 横穴式石室	古墳(後)	墳丘遺存。58m。砂岩(いわゆる房州石)製石室。埴輪(円筒・朝顔形円筒・家形・器財・動物・人物)
6	国府台遺跡第29地点	市川市国府台	円墳	古墳(後)	円墳周溝確認、埴輪出土
7	弘法寺古墳	市川市真間4丁目360他	前方後円墳	古墳(後)	墳丘遺存。約43m。埴輪は確認されていない
8	真間山古墳	市川市真間4丁目360他	円墳	古墳	墳丘遺存。径約20m
9	下総総社跡遺跡	市川市国府台1丁目2-26他	集落跡、神社跡	古墳(後)、奈良・平安	市川市指定史跡、S61年調査
10	国府台遺跡	市川市国府台1丁目2-47他	集落跡	縄文(後)、弥生(後)、古墳(後)、奈良・平安、中世	第4-1地点と第61地点において埴輪出土
11	太鼓塚古墳	市川市須和田2丁目418他	古墳	古墳	周溝確認。塚か
12	諸貝塚	市川市須和田2丁目402-2他	貝塚、集落跡	縄文(前)	
13	須和田遺跡	市川市須和田2丁目418他	貝塚、集落跡	縄文(前)、弥生(中)、古墳(前・中・後)、奈良・平安	一部県・市指定史跡、S56.57.59~63.H1~7年調査。第20地点において埴輪出土
14	根郷留見遺跡	市川市須和田2丁目381他	貝塚	縄文(前・中)	
15	久保上遺跡	市川市真間5丁目89-1他	貝塚	縄文(前・中)	
16	不入斗遺跡	市川市国分4丁目471	包蔵地	奈良・平安、中世	低地。木製品出土
17	国分(下総国分)遺跡	市川市国分5丁目172-1他	集落跡、包蔵地	縄文(後)、古墳(中)、奈良・平安	S56.58.59.60.62.63.H3.6年調査
18	下総国分尼寺跡	市川市国分4丁目1972-1他	寺院跡、集落跡	奈良・平安、中世	国指定史跡、S57~60年ほか調査
19	(伝)下総国分寺西瓦窯跡	市川市国分4丁目1913付近	窯跡	奈良・平安	この付近で瓦が検出されたと伝えられる。消滅
20	下総国分寺跡(僧寺跡)	市川市国分3丁目1786番1他	寺院跡、集落跡	古墳(後)、奈良・平安	国指定史跡、S55.56.57.58、H元~5.7年調査、遺跡番号140国分5丁目1739番地所在遺跡を統合
21	国分平川遺跡	市川市国分5丁目1738-1他	貝塚、集落跡	縄文(後)、古墳(中)	S61年調査
22	下総国分寺東瓦窯跡	市川市国分5丁目1723-2他	窯跡	奈良・平安	自然崩壊
23	東山王(管谷貝殻塚)遺跡	市川市曾谷4丁目813-1他	貝塚	縄文(前・中・後)	一部消滅
24	イコ塚遺跡	市川市曾谷8丁目825-1他	貝塚	縄文(後)	一部消滅
25	東山王東遺跡	市川市曾谷4丁目679他	集落跡	古墳(中)、奈良・平安	H5年調査、一部消滅
26	池ノ台遺跡	松戸市高塚新田字池ノ台	集落跡	縄文、古墳(後)	H3.5年調査
27	曾谷貝塚	市川市曾谷2丁目451他	貝塚、集落跡	縄文(早・前・中・後・晩)	国指定史跡
28	曾谷遺跡	市川市曾谷4丁目555他	集落跡、貝塚	縄文(早・前・中・後・晩)、奈良・平安、中世	遺跡番号139.142.144.145.146.147.148の番地所在遺跡を統合。S55.56.58.59.60.61.62.H2.7年調査。第23地点で埴輪出土
29	庚塚遺跡	市川市曾谷2丁目378-1他	貝塚、集落跡	縄文(前)	
30	木戸前Ⅱ遺跡	松戸市高塚新田字木戸前	貝塚、集落跡	縄文(前・中・後)	H4.6年調査
31	木戸前遺跡	松戸市高塚新田字木戸前	貝塚、集落跡	縄文(中・後)、古墳(中)	H8年調査
32	一の谷西遺跡	松戸市高塚新田字一の谷	貝塚、集落跡	縄文(中・後)	柄鏡形住居跡、S58年調査、市川市No.82
33	大野新田(一ノ矢)遺跡	市川市大野町1丁目436他	貝塚	縄文(中・後)	松戸市No.175
34	西畑遺跡	市川市大野町1丁目412-1他	包蔵地	縄文(中・後)、奈良・平安	
35	後畑遺跡	市川市大野町1丁目77-1他	集落跡	縄文(後)、弥生、奈良・平安	S62年調査
36	前畑遺跡	市川市大野町1丁目89-1他	包蔵地	縄文(中・後)、奈良・平安	
37	木戸口遺跡	市川市下貝塚2丁目435-1他	貝塚、集落跡	縄文(中・後)、弥生(中)	
38	山王台遺跡	市川市大野町1丁目5-1他	集落跡	縄文(前・中・後)、奈良・平安	S55.56年調査
39	下貝塚	市川市下貝塚2丁目28-1他	貝塚、集落跡	縄文(中・後)	
40	新坂A遺跡	市川市下貝塚1丁目50他	包蔵地	縄文、奈良・平安	
41	新坂B遺跡	市川市下貝塚1丁目94-1他	包蔵地	縄文(中・後)、奈良・平安	
42	新坂C遺跡	市川市下貝塚1丁目178-1他	包蔵地	縄文(前・後)、奈良・平安	
43	小田山遺跡	市川市宮久保6丁目823他	包蔵地	縄文(前)、古墳(中)、奈良・平安	S56.H7年調査
44	山ノ後遺跡	市川市宮久保4丁目693他	貝塚、集落跡	縄文(前・中・後)、奈良・平安	H7年調査
45	宮久保所願寺遺跡	市川市宮久保4丁目374-1他	貝塚	縄文(前)	
46	宮久保B遺跡	市川市宮久保2丁目13-7他	包蔵地	弥生(後)	消滅
47	宮久保A遺跡	市川市宮久保2丁目20-22他	貝塚	縄文(早・前)	消滅
48	三中校庭遺跡	市川市曾谷3丁目4他	貝塚、集落跡	縄文、古墳(後)	
49	高德保(高德穂)遺跡	市川市曾谷1丁目147-1他	貝塚	縄文(前・後)	
50	曾谷南遺跡	市川市曾谷1丁目248番他	集落跡、貝塚	縄文(早・前・中・後)、古墳(後)、奈良・平安	遺跡番号141向台東遺跡を統合。S57.61.62.H2年調査。三中校庭地点で古墳の周溝を確認
51	平作遺跡	市川市曾谷1丁目200-1他	包蔵地	縄文(中)、奈良・平安	
52	向台遺跡	市川市曾谷1丁目121-3他	貝塚、集落跡	縄文(前・中)	H5年調査
53	安国寺境内遺跡	市川市曾谷1丁目287他	貝塚	縄文(前・中・後)	
54	馬坂遺跡	市川市曾谷3丁目1019他	貝塚	縄文(中・後)	一部消滅
55	弥平田遺跡	市川市曾谷3丁目1081-1他	貝塚	縄文(中・後)	消滅
56	曾谷城跡	市川市曾谷3丁目1083-1他	城館跡	中世	一部消滅
57	根古屋遺跡	市川市曾谷3丁目1083-5他	貝塚	縄文(早・前・中・後)	
58	真間一丁目(伝)	市川市真間	(推定)古墳	古墳(後)	旧字「小砂原」。砂州上に立地。朝顔形埴輪出土
59	日出学園遺跡	市川市菅野2丁目170-8他	包蔵地	弥生(後)	消滅
60	東菅野一丁目	市川市東菅野	(伝)円墳	古墳(後)	旧字「東割」。砂州上に立地。埴輪出土
61	鬼高遺跡	市川市鬼高1丁目95-1他	包蔵地、貝塚	古墳(前・中・後)	市指定史跡。東京湾北辺に立地。基底の標高は約2.7m



第2図 遺跡の立地

る真間川水系（真間川・国分川・大柏川）が流れている。現在、真間川は、下総台地の西辺を南流する江戸川からの分岐点を最上流点として東流し、途中で国分川と大柏川を合わせたのち、東南へ流下して東京湾に注ぐ一級河川であるが、近現代の河川改修により現在のような姿に整備される以前は、曾谷台付近から西流し、須和田付近で国分川を合わせた後、江戸川に注いでいた。河川改修による流下方向の逆転が示しているように、真間川沿いの低地の標高は2mほどで標高差がきわめて少なく、大雨の時などは、河川が逆流し、氾濫することが多くあった。

市川砂州の北方、国分川と真間川の合流地点西側には、須和田砂州と呼ばれている長さ500m程度の小規模な砂州がある。市川砂州よりも谷奥側に位置する須和田砂州は、市川砂州形成後、3,600～2,400BP頃の海退期に、真間川と国分川の影響により形成された砂堆であると考えられている（杉原ほか2014）。

今日、市川砂州頂部付近には、千葉街道（国道14号線）、京成本線、JR総武線が平行して敷設され、東京と千葉を繋ぐ幹線交通路となっているが、近代化以前においても、江戸と房総を結ぶ陸上交通路として機能していた。また、明治前期に作成された地形図（第3図）には、平田遺跡西隣、千葉街道に南面する



A 平田遺跡 B 菅野遺跡 C 後通遺跡 D 北下遺跡

1 真間一丁目 (伝)〔第1表58〕 2 東菅野一丁目〔第1表60〕

* 砂州上の埴輪出土地点

第3図 遺跡周辺の旧地形

神社の社前で、北東へ向かって千葉街道から分岐し、平田村と菅野村を最短距離で結ぶ細い道があり、今日まで踏襲されているが、この千葉街道から分岐した砂州を斜めに横断する細い道は、平田遺跡の北部を斜めに貫いている。なお、当時の土地利用に関して、明治前期測量フランス式彩色地図（財団法人日本地図センター 平成8年発行）には、台地上は畑、砂州北方の低地は田と萱自生地、砂州上は梨畑、砂州南方の低地は水田であったことが示されている。今日でもクロマツの大木が多く自生している砂州(図版1)上の宅地開発は、大正年間に始まった。

2 歴史的環境

平田遺跡（第1図～第3図A）は、砂州に立地する遺跡として古くから注目を集めてきた日出学園遺跡（第1図59）の南方約350m地点にある。日出学園遺跡は、標高6m前後に立地する遺跡で、昭和38年、校舎建設工事中に、旧地表下約1.5mからハケメのある壺・器台各1点と手づくね土器3点が出土した。出土土器の器種構成と海岸線近くに発達した市川砂州上に立地することから、台地上の集落遺跡のような日常の生活が継続的に営まれた場所ではなく、祭祀の場所の可能性が強いと考えられている（『市川市史』第1巻323頁～324頁）。なお、市川市内における低地の遺跡は、不入斗遺跡（第1図16）をはじめ、本書で報告する平田遺跡等、道路建設に先だって発掘調査を実施した外環道建設事業地内において確認されている（第1図～第3図A～D）。

日出学園遺跡の東に位置する菅野遺跡（第1図～第3図B）の北方、真間川の対岸にある後通遺跡（第1図～第3図C）は、南流してきた国分川と真間川が合流する地点の西方、須和田砂州上に立地する遺跡である。縄文時代の漆塗堅櫛をはじめ、縄文時代から中近世までの遺物が多数出土した。また、平安時代の井戸が検出され、井戸枠が良好な状態で遺存していた点は特筆される。

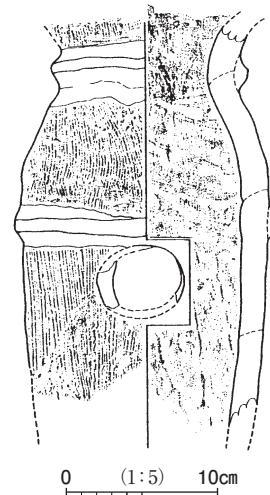
後通遺跡から北方へ1kmほど国分川を遡った地点には北下遺跡（第1図・第3図D）がある（栗田2007、今泉ほか2011、今泉・大久保2013）。下総国分寺の東方約300m地点に位置し、台地および段丘斜面部から低地にかけて立地する遺跡内には、国分寺創建期の瓦を焼成した窯（「下総国分寺跡附北下瓦窯跡」の名称で国指定史跡「下総国分寺跡」に追加指定）をはじめ、梵鐘鑄造遺構、古代の国分川旧河道、河岸整形遺構や湧水を呼ぶ旧河道内土坑など、立地を反映した多様な遺構があった。遺物は縄文時代から中近世の多種類が多数出土したが、主体は奈良・平安時代にある。古代の旧河道から出土した遺物のなかには、人面墨画土器、仏像・仏面墨画土器、下総国内の郡郷地名ないしその略記と理解できる墨書をもつ土器、「神門朝臣 奉」刻字白木弓、斎串や人形などの形代類、松明の燃えさし、供物台とみられる板などがあり、国分寺に近接する旧国分川周辺の低地域が、8世紀後半頃から10世紀頃にかけての間、下総国府あるいは国分寺と深いかわりをもった儀式・行事の場として維持管理された区域であったことがわかる。

後通遺跡の西方、国府台の南東に連なる段丘（須和田台）上には、南関東の弥生中期中頃の土器型式「須和田式」の標識遺跡として著名な須和田遺跡（第1図13）がある。近年の調査では須和田式土器と同時期の資料の出土を見ないものの、弥生中期後半頃（宮ノ台式）から弥生後期前半（久ヶ原式）の環濠集落とみられる断面V字状の溝と竪穴住居の存在が確認され、さらに、その西北に位置する国府台遺跡とともに、古墳時代後期から平安時代までの当該地域の中核となる遺跡であることが明らかとなった（松本1998・2003・2006、渡辺2003）。また、古くに出土した資料の中に「博士館」「右京」と記した墨書土器があり、国府関連遺跡として位置づけられている（山路2006）。

須和田遺跡の西北方の台地上には、国府台遺跡（第1図10）がある。地名および遺跡名に示されているように、下総国府推定地である。また、台地南端付近において、弥生中期の環濠と方形周溝墓、弥生後期の環濠がみつかり、古墳時代後期には国府台古墳群が営まれた。国府台古墳群で墳丘が遺存するのは、法皇塚古墳（第1図5）・明戸古墳（第1図2）・弘法寺古墳（第1図7）・真間山古墳（第1図8）の4基のみであるが、100基以上の円墳を主体とする群集墳が存在していた可能性が示されている（松本2006、曾根ほか2008）。

古墳群中最大規模の法皇塚古墳は復元長54.5mの規模を持つ前方後円墳である（小林三郎ほか1976、堀越ほ

か1981)。墳丘には埴輪が樹立され、後円部の南西側に開口する砂岩（磯石）製の横穴式石室がある。金銅装の馬具や大刀、鉄鏃、甲冑、玉類などが副葬されていた。家形埴輪・人物埴輪を含む埴輪の生産地について、地元下総のほか、埼玉県生田塚窯など、武蔵東部から北部地域および上野の可能性のあるものまで含まれていることが山崎武氏により指摘されている（山路・山崎2002）。明戸古墳は全長約40mの前方後円墳で、後円部に2基の箱式石棺があり、埴輪が採集されている。弘法寺古墳は全長約43mの前方後円墳、真間山古墳は直径約20mの円墳で、ともに埴輪は確認されていない。なお、真間山古墳については、改変が著しく、後世の盛土との見解もある。墳丘は遺存しないが埴輪を出土した古墳としては、



伝真間一丁目出土埴輪
（市立市川考古博2002 図22を転載）

第4図 市川砂州出土朝顔形埴輪

丸山古墳、国府台遺跡第29地点・第4-1地点・第61地点、国府台城跡第2地点、須和田遺跡第20地点が知られており、国分谷を挟んだ東方の曾谷台においても曾谷遺跡第23地点で埴輪が出土している（山路・山崎2002、松本2006、曾根ほか2008）。

台地上に立地する上記8遺跡（地点）のほか、市川砂州上において埴輪が出土した事例が2地点あることも古くから注目されていた。伝真間一丁目（旧字「小砂原」 第1図58・第3図1、第4図）と、東菅野一丁目（旧字「東割」 第1図60・第3図2）である。今回調査した平田遺跡（旧字「宮前」）は、両者の中間地点に位置している。また、市川砂州南方、標高2.7mの低地には、海辺に営まれた古墳時代中頃の集落遺跡として著名な鬼高遺跡がある（第1図61）（市川市史編纂委員会 1971）。

参考文献

- 市川市史編纂委員会 1971『市川市史』第1巻 市川市
- 今泉 潔 2013『市川市国府台遺跡第13地点（4）—独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財調査報告書2—』千葉県教育振興財団調査報告第702集 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院公益財団法人千葉県教育振興財団
- 今泉 潔・大久保奈奈 2014『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書6—市川市北下遺跡（9）～（12）—』千葉県教育振興財団調査報告第730集 東日本高速道路株式会社 財団法人千葉県教育振興財団
- 今泉 潔・西野雅人・大久保奈奈 2011『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書3—市川市北下遺跡（1）～（8）—』千葉県教育振興財団調査報告第664集 東日本高速道路株式会社 財団法人千葉県教育振興財団
- 菊池 真ほか 2002『国府台遺跡—第29地点発掘調査報告書—』国府台遺跡第29地点調査会
- 栗田則久 2007『市川市北下遺跡瓦窯跡発掘調査概報』千葉県教育委員会
- 小林三郎ほか 1976『法皇塚古墳』市立市川博物館研究調査報告第3冊 市立市川博物館
- 財団法人千葉県文化財センター 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）—東葛飾・印旛地区（改訂版）—』千葉県文化財センター調査報告第316集
- 杉原重雄・千葉 崇・領塚正浩 2014「後通遺跡・菅野遺跡・平田遺跡における珪藻化石群集の変遷と古沿岸環境の復元」『市史研究いちかわ』第5号 市川市
- 曾根俊雄ほか 2008「国府台」『平成12-15年度市内遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会
- 滝口 宏 1974「国分寺造立の発詔」『市川市史』第2巻 市川市
- 堀越正行ほか 1981『図録法皇塚古墳』市立市川博物館

- 堀越正行 2006「市川の地形のなりたち」『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 松本太郎 1998「須和田遺跡」『千葉県の歴史』資料編考古3（奈良・平安時代）千葉県 372～375頁
- 松本太郎 2003「須和田遺跡」『千葉県の歴史』資料編考古2（弥生・古墳時代）千葉県 220～221頁
- 松本太郎・松田礼子 2001『千葉県市川市下総国府跡—国府台遺跡緊急確認調査報告書—』市川市教育委員会
- 松本太郎 2006「卑弥呼の頃の市川」『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 山路直充 1995『下総国分寺—いま見つめなおす下総の天平文化』市立市川考古博物館図録17 市立市川考古博物館
- 山路直充 1998a「下総国分僧寺跡」『千葉県の歴史』資料編考古3（奈良・平安時代）千葉県 376～387頁
- 山路直充 1998b「下総国分尼寺跡」『千葉県の歴史』資料編考古3（奈良・平安時代）千葉県 388～395頁
- 山路直充 1998c「下総国府関連遺跡」『千葉県の歴史』資料編考古3（奈良・平安時代）千葉県 360～367頁
- 山路直充 2006「手児奈の風景」『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 山路直充 2010「ヤマトタケルの江戸川渡河伝説」『市史研究いちかわ』創刊号 市川市
- 山路直充・山崎 武 2002『市川市出土の埴輪』市立市川考古博物館研究調査報告第8冊 市立市川考古博物館
- 渡辺修一 2003「須和田遺跡」『千葉県の歴史』資料編考古2（弥生・古墳時代）千葉県 218～219頁

第3節 調査の概要

1 調査区の設定

東京外かく環状道路（市川区間）建設予定地内に所在する遺跡群の調査は、日本測地系（平面直角座標第IX系）に基づく方眼網から、北西隅に基点を置く40m区画（大グリッド）を、さらに各大グリッド内を4m単位の小区画（小グリッド）に分割して方格区割を設定し、発掘調査を実施した（第5図）。

大グリッドの呼称は、基点から東へA・B・C…、基点から南へ1・2・3…とした記号と番号を組み合わせ、C3グリッド等と示した。小グリッドについては、基点から東へ4mごとに00・01・02…、基点から南へ4mごとに00・10・20…と番号を付し、東西方向の一桁目と南北方向の2桁目を組み合わせて方格番号とした。

なお、平田遺跡のグリッド設定に際しては、北方に隣接する菅野遺跡と一括して設定した。そのため、大グリッド南北方向の番号1～12は菅野遺跡に対応しており、平田遺跡に対応する大グリッド南北方向の番号は13～26となっている。

2 調査地点の呼称

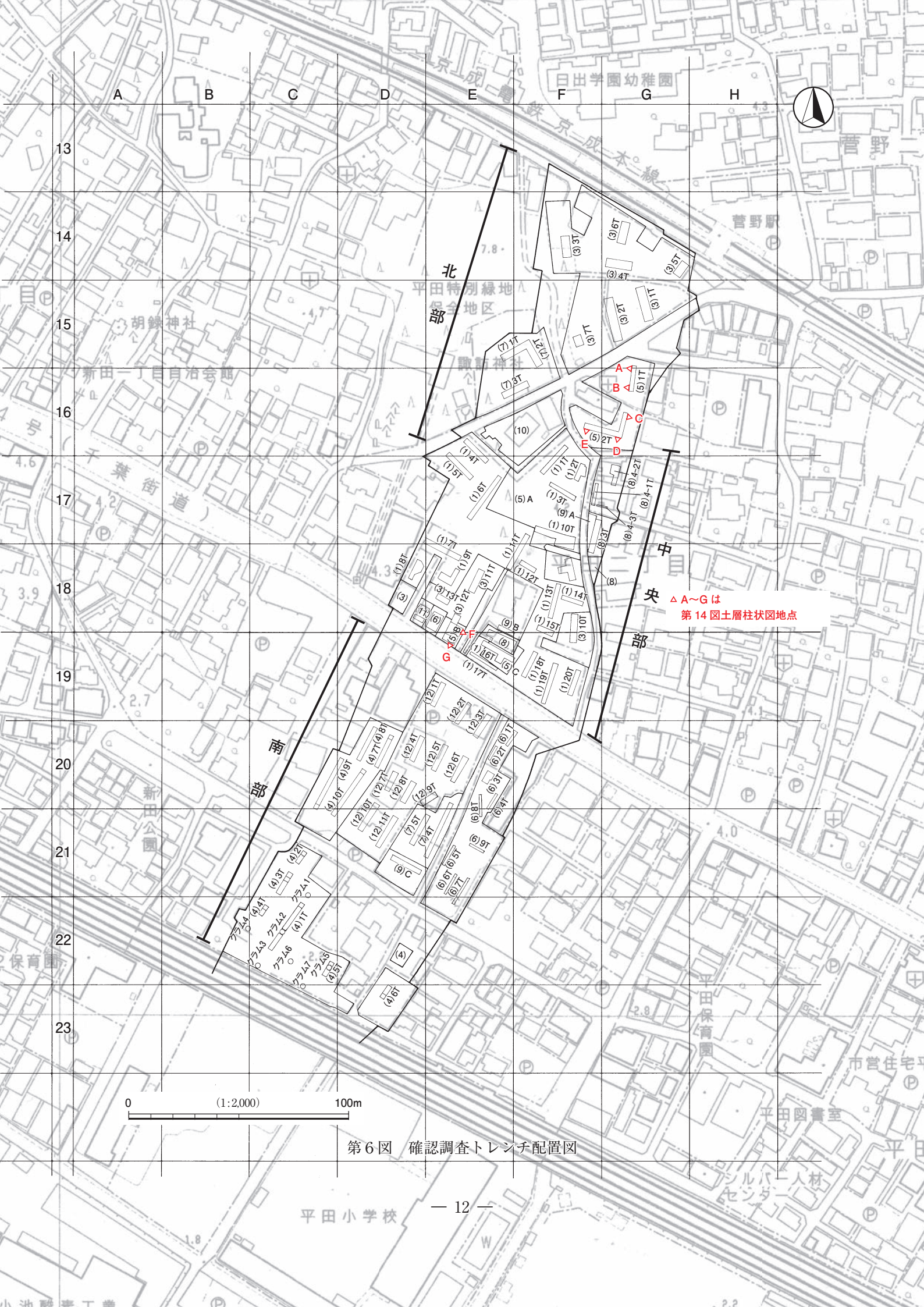
平田遺跡において、確認調査のトレンチ番号は調査次ごとに1から付与されている。そのため、報告に際しては「(1) 1トレンチ」「(3) 1トレンチ」というように、調査次を示す() 囲み数字を併記して、地点を明示する（第2表）。なお、(4) 次調査区域で実施したクラムシェル等の重機を用いた深掘り地点を示す際には、現地調査時に用いた「クラム1」という略称をそのまま用いる。

長期間にわたり断続的に調査が実施された平田遺跡では、小面積の調査成果が積み上げられてきた。そのため、調査地点の名称では、遺跡内における地点間の相互の平面的な位置関係を把握するのが困難となっている。そこで報告に際しては、南北に長い調査区全体を「北部」「中央部」「南部」に3区分して地区呼称とし、調査地点名に併記して、平面的な位置把握の便宜をはかることとした（第6図）。なお、遺構が検出されたのは「中央部」に限られる。

「北部」は、京成本線の南側から、砂州を斜めに横断する道の周辺部にあたる区域である。市川砂州の北辺側に位置している。遺構は検出されず、遺物の出土点数もごく少量であった。



第5図 調査区全体図



△A~Gは
第14図土層柱状図地点

第6図 確認調査トレンチ配置図

第2表 調査次別調査地点名と調査区域

調査次数	調査地点名	調査地点の位置 (地区呼称の区分)			備考
(1)次	(1)1~3トレンチ	中央部	北半	北方区域	確認調査
	(1)4~6トレンチ			西方区域	
	(1)7~9トレンチ		南半	西方区域	
	(1)10~12トレンチ		北半	南方区域	
	(1)13~15トレンチ		南半	東方区域	
	(1)16~17トレンチ			中央区域	
	(1)18~20トレンチ			東方区域	
(3)次	(3)1~7トレンチ	北部	北半	中央区域	確認調査
	(3)8・9トレンチ	中央部	北半	東方区域	
	(3)10トレンチ		南半	東方区域	
	(3)11~13トレンチ		西方区域		
(4)次	(4)1~5トレンチ	南部	南半	西方区域	確認調査
	(4)6トレンチ			東方区域	
	(4)7~10トレンチ		北半	西方区域	
	コラム1~4・6		南半	西方区域	
	コラム5・7			東方区域	
(5)次	(5)A区	中央部	北半	中央区域	(1)10トレンチ・1~3トレンチ周辺本調査
	(5)B区		南半	西方区域	(3)12トレンチ周辺本調査
	(5)C区	北部	南半	中央区域	(1)16トレンチ周辺本調査
	(5)D区			東方区域	確認調査
	(5)1・2トレンチ				
(6)次	(6)1~8トレンチ	南部	北半	東方区域	確認調査
(7)次	1区	北部	南半	西方区域	確認調査
	(7)1~3トレンチ	南部	北半	中央区域	
	2区				
(7)4・5トレンチ					
(8)次	1区	中央部	南半	中央区域	(1)16トレンチ・(5)C区北側本調査
	(8)3トレンチ		北半	東方区域	確認調査
	(8)4-1~4-3トレンチ				
(9)次	(9)A区	中央部	北半	東方区域	(8)3トレンチ西側本調査
	(9)B区		南半	中央区域	(1)16トレンチ・(5)C区北側・(8)1区北側本調査
	(9)C区	南部	北半	中央区域	確認調査
(10)次		中央部	北半	西方区域	確認調査
(11)次		中央部	南半	西方区域	確認調査
(12)次	(12)1~11トレンチ	南部	北半	中央区域	確認調査

第3表 調査区域別調査地点名

調査地点の位置 (地区呼称の区分)		調査次数	調査地点名
北部	北半	中央区域	(3)次 (3)1~7トレンチ
		東方区域	(5)次 (5)D区
	南半	西方区域	(7)次 (5)1・2トレンチ
中央部	北半	北方区域	(1)次 (7)1区
		中央区域	(5)次 (7)1~3トレンチ
		東方区域	(1)次 (5)A区
			(3)次 (3)8・9トレンチ
			(8)次 (8)3トレンチ
		西方区域	(8)次 (8)4-1~4-3トレンチ
			(9)次 (9)A区
(1)次 (1)4~6トレンチ			
(10)次			
中央部	南半	南方区域	(1)次 (1)10~12トレンチ
		中央区域	(1)次 (1)16~17トレンチ
			(5)次 (5)C区
			(8)次 1区
			(10)次 (9)B区
		東方区域	(1)次 (1)13~15トレンチ
			(3)次 (1)18~20トレンチ
		西方区域	(3)次 (3)10トレンチ
			(1)次 (1)7~9トレンチ
			(3)次 (3)11~13トレンチ
(5)次 (5)B区			
(11)次			
南部	北半	東方区域	(6)次 (6)1~8トレンチ
		中央区域	(7)次 2区
			(7)次 (7)4・5トレンチ
			(9)次 (9)C区
		西方区域	(12)次 (12)1~11トレンチ
南部	南半	東方区域	(4)次 (4)7~10トレンチ
		西方区域	(4)次 (4)6トレンチ
			コラム5・7
(4)次 (4)1~5トレンチ			
コラム1~4・6			

「中央部」は、千葉街道の北側、砂州の頂部付近にあたる区域である。遺構分布区域であり（第13図、第4表）、遺物も多く出土した。明治時代に作成された迅速図に書かれている市川砂州を南西から北東へ斜めに横断する千葉街道から分岐した道は、今日でもほぼ同じ経路を保っているが、「中央部」の遺構群は、この砂州を斜めに横断する道と千葉街道に挟まれた範囲におさまっている。

「南部」は、千葉街道の南側、JR総武線の北側に位置する区域である。市川砂州の南辺にあたる。多種多様な遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。

なお、「中央部」と「南部」については、南北に長いそれぞれの区域をさらに「北半」と「南半」に細分し、また、必要に応じて、「東方区域」「西方区域」等の呼称を併記した（第2表・第3表）。

3 調査次別調査成果

(1) 次調査 国道14号線の北側、標高約5mの遺跡中央部において、トレンチを20か所設定し、確認調査を実施した。その結果、円墳と推測される古墳の周溝の一部（SM001）と、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒（SI001）のほか、土坑12基および溝状遺構3条の存在を確認した。また、畑に関わる溝と捉えられる溝状遺構（図版6下段右）が27条あった。明確に遺構に伴う遺物は少ないが、弥生土器1点、埴輪2点のほか、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器、中近世の陶磁器やかわらけが出土した。なお、土坑と溝状遺構は、覆土の堆積状況と出土遺物の年代を精査した結果、近世以降に下ると判断した。

(2) 次調査 平田遺跡の南端、JR総武線の南側区域（市川市新田二丁目）において、平成16年9月、確認調査のためのトレンチを設定したところ、地下の埋設物（薬品）による刺激臭が発生したため、発掘調査は中止となった。

(3) 次調査 遺跡北部の1地点（トレンチ7か所）と、遺跡中央部の3地点（トレンチ6か所）で確認調査を行った。2地点とも攪乱箇所が多くあり、遺構は検出されなかった。

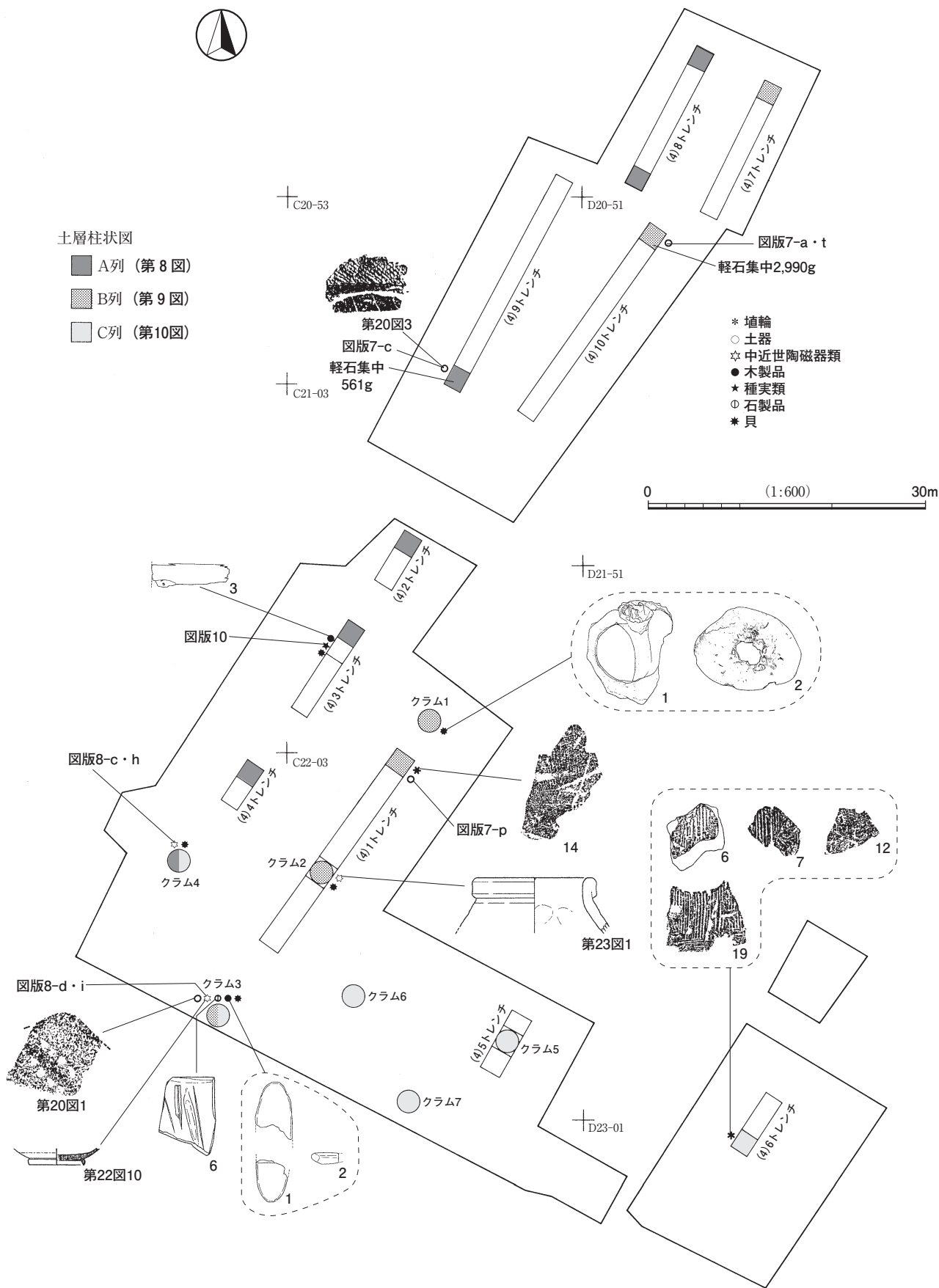
遺跡北部地点は、砂州を斜めに横断する道の北側で、平田遺跡の最北端部分にあたる（図版1下段左）。出土遺物は少なかったが、(3) 4トレンチ砂層中から、土師器の破片2点が出土し、遺跡の広がりをおさえることができた。

遺跡中央部南半西方区域においては、(3) 12トレンチから奈良・平安時代の土師器・須恵器が集中して出土した（第35図）。

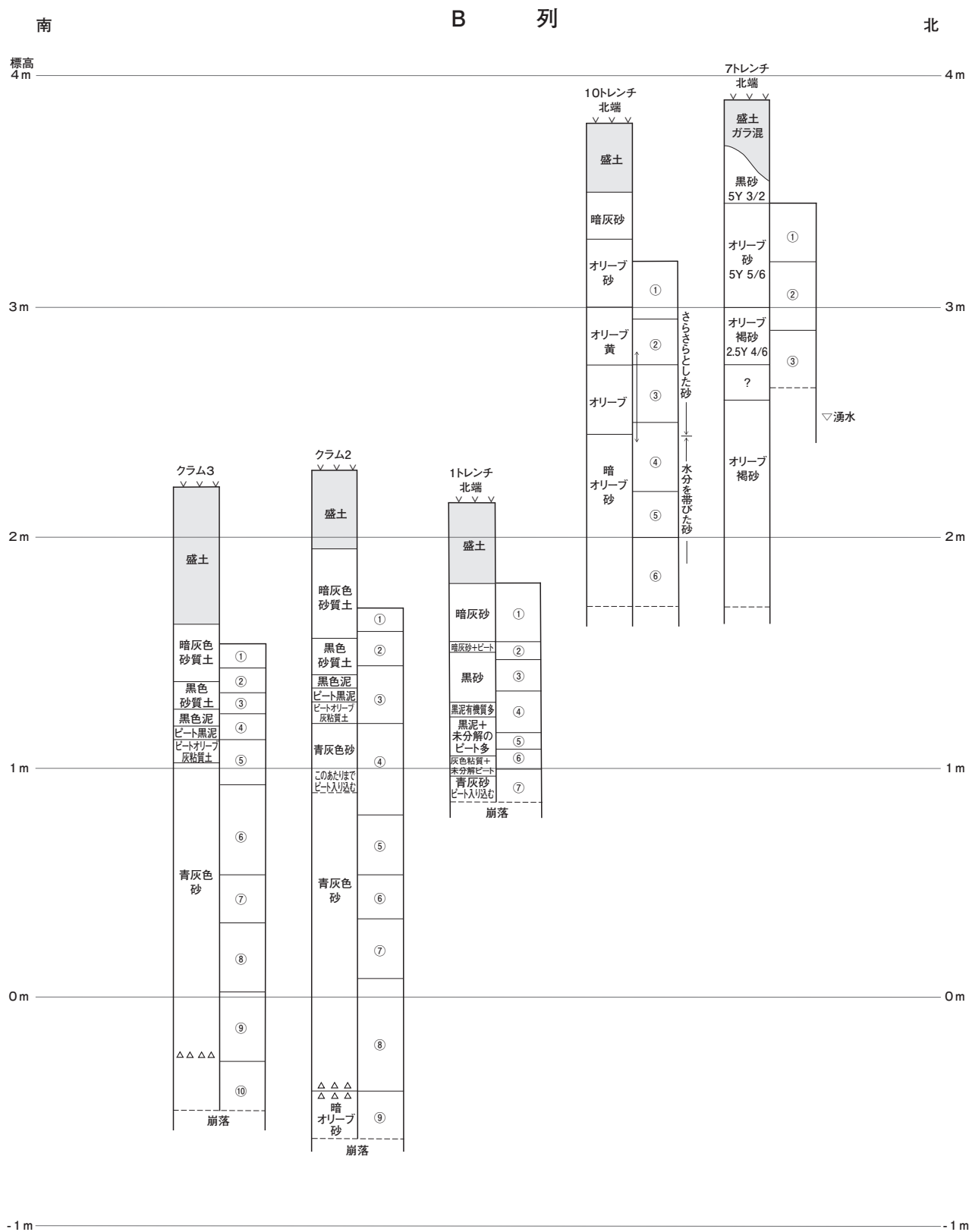
(4) 次調査 遺跡南部の西南側の区域において、トレンチ10か所と、クラムシェル等を用いた深掘り竪坑17地点の調査を行った（第7図）。その結果、遺構は検出されなかったものの、縄文土器1点のほか、奈良・平安時代の土師器・須恵器、中世陶器が出土し、砂州上の堆積状況と遺物が包含されている層位の対応を把握できた（第8図～第10図）。また、深掘り地点の貝層から貝サンプルを採取し、貝製品の可能性をのこす遺物を見出したほか、貝類の組成に関わる基礎資料を得た（第8表・図版12）。

(5) 次調査 (1)・(3) 次確認調査の成果を受け、遺跡中央部の3地点（A区～C区）において本調査を実施したほか、遺跡北部（D区）において、確認調査（トレンチ2か所）を実施した。

A区は、遺跡中央部北半において、(1) 10トレンチおよび(1) 1～3トレンチ周辺で本調査を実施した。その結果、周溝の一部を検出していた古墳（SM001）の遺存状況を確認し、また、新たに平安時代の竪穴住居跡1軒（SI003）を検出した。このほか、土坑、溝状遺構の存在を確認したが（第4表）、これらは中世以前に遡るという時期を特定する明確な根拠を伴わないことを確認した。



第7図 遺跡南部 (4) 次調査区の遺物出土地点



第9図 遺跡南部（4）次調査区土層柱状図2

西

C 列

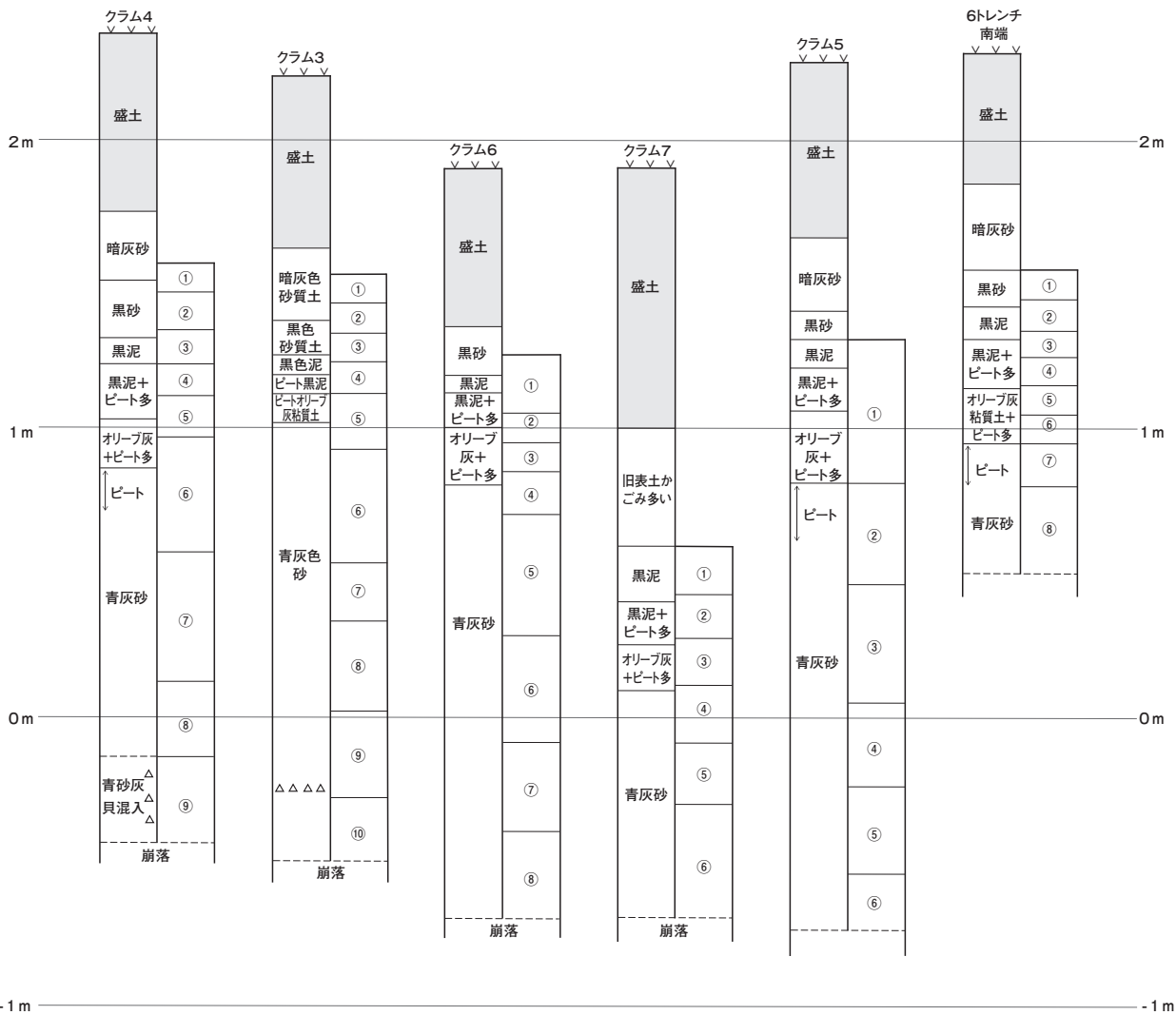
東

標高
4 m

4 m

3 m

3 m



第10図 遺跡南部 (4) 次調査区土層柱状図3

B区は、遺跡中央部南半、やや西方に位置する地点で実施した。古代の土器が集中的に出土した（3）12トレンチ（図版6上段）の周囲を拡張し、住居跡等の検出につとめたが、古代の土師器が数点出土したのみで、遺構は検出されなかった。

C区は、遺跡中央部南半、中央付近に位置する（1）16トレンチ周辺で本調査を実施した。その結果、平安時代の竪穴住居跡1軒（SI002）と溝状遺構2条（SD015・SD026）を検出した（図版5中段・下段）。

D区は、遺跡北部東方区域において、確認調査トレンチを2か所に設定した。遺構は検出されず、出土遺物もなかったが、遺構群の北側にあたる区域での砂州の堆積状況を確認できた（第14図A～E）。

（6）次調査 遺跡南部北半、東方区域において、トレンチを8か所設定し確認調査を実施した。その結果、対象地の大半は近現代の攪乱を受けていて、遺構確認面となる黄褐色砂層面の遺存範囲はごくわずかであることが判明した。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

（7）次調査 2地点で確認調査を実施した。1区は、遺跡北部、砂州を斜めに横断する道の北側の西方区域において、トレンチを3か所に設定し実施した。その結果、遺構は検出されなかったが、奈良・平安時代の土師器・須恵器が若干出土した。2区は、遺跡南部北半（6）次調査区の西側地点に、南北に長いトレンチを2か所設定して実施した。その結果、全域が近現代の攪乱および盛土であることを確認した。

（8）次調査 遺跡中央部の南半1地点と、北半の2地点（トレンチ4か所）を調査した。遺跡中央部南半では、（1）16トレンチ周辺および（5）C区本調査範囲の北側区域を調査し、平安時代の溝状遺構2条（SD021・SD024）と平安時代の可能性がある土坑1基（SK023）を検出した。

遺跡中央部北半では、（5）A区本調査範囲の東方区域において、トレンチを4か所設定し調査を実施した。その結果、（8）3トレンチ内において、溝（SD027）と竪穴住居の一部と判断できる遺構（SI004）を検出した（図版3下段）。一方、存在が推測されていた（5）A区で検出した古墳の周溝の延伸部分については、遺存していないことを確認した。

（9）次調査 遺跡中央部2地点と南部1地点について調査した。中央部南半区域で埴輪等が出土したが、各地点とも攪乱が及んでおり、遺構は検出されなかった。

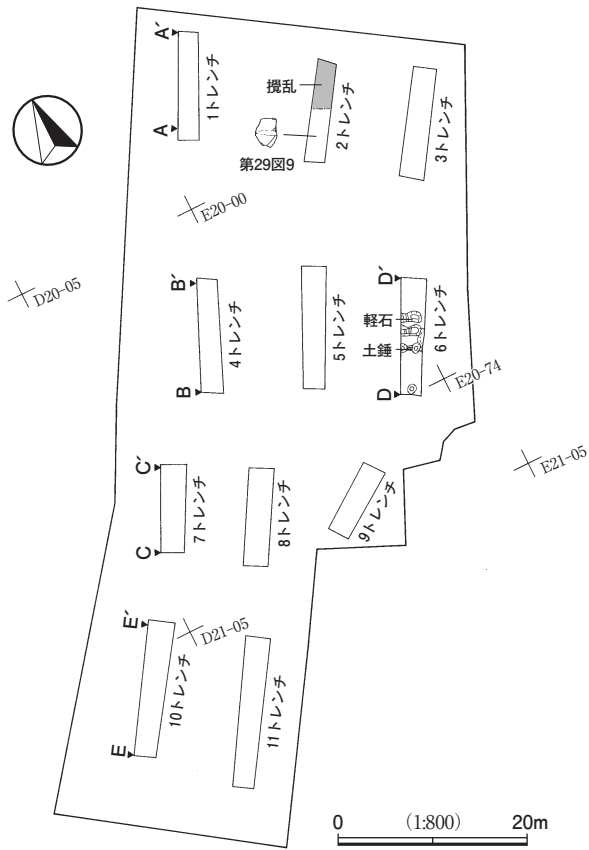
（10）次調査 遺跡中央部の北半、もっとも北側の地点において、（5）次調査A区の溝に連続する溝1条（図版6中段左）と土坑が2基みつき、包含層中から近世陶磁器のほかに、古墳時代土師器、平安時代土師器、中近世陶磁器が出土した。溝と土坑の年代については、いずれも近世以降と判断された。

（11）次調査 遺跡中央部の南半西方区域においてトレンチを2か所設定し確認調査を実施した。その結果、遺構分布の広がりには確認されず、遺物も出土しなかった。

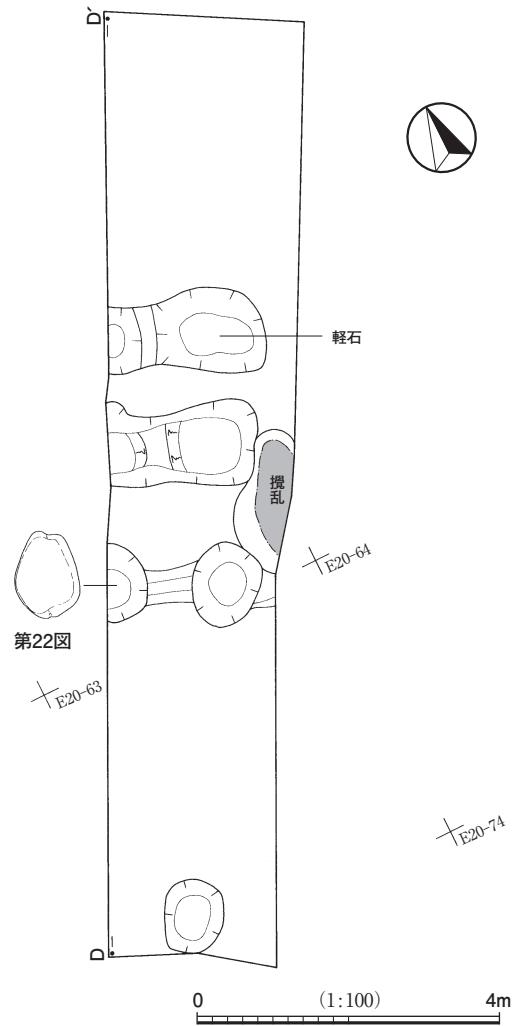
（12）次調査 遺跡南部の北半中央区域においてトレンチを11か所設定し確認調査を実施した（第11図・第12図）。その結果、中世以前に遡る遺構は確認されなかったが、近世以降の土坑・溝・畑跡があった（図版7）。包含層からは、近世陶磁器とともに縄文時代の土錘、奈良・平安時代の土師器および中世陶器の小片、軽石が出土した。

4 遺構配置と遺構番号

東京湾北辺沿いに発達した市川砂州の頂部付近、現在の国道14号線の北側に接する南北約120mの範囲（遺跡中央部）において確認した遺構の番号は、発掘調査時に付与された通し番号を踏襲する。ただし、調査の進展にともない欠番となった遺構番号があり、あるいは一部について新規に番号を付与した場合は

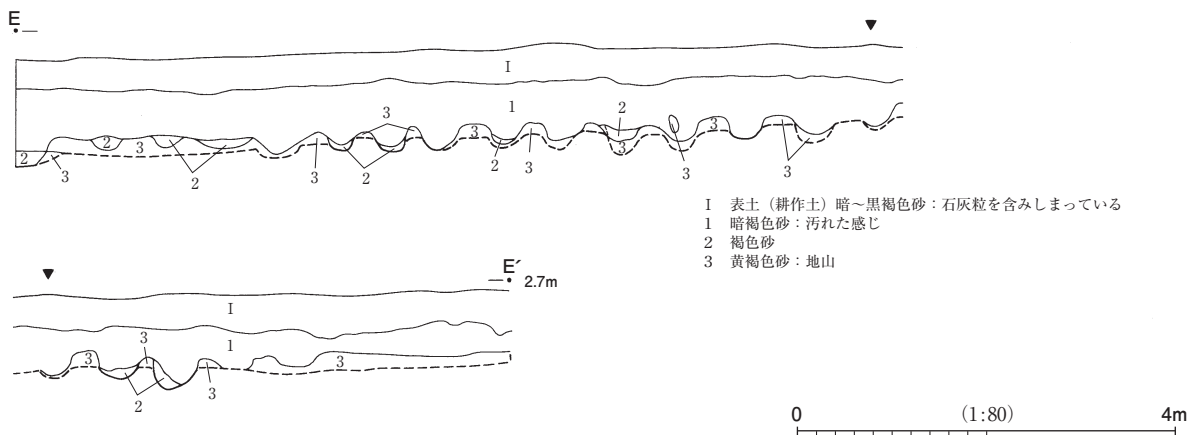
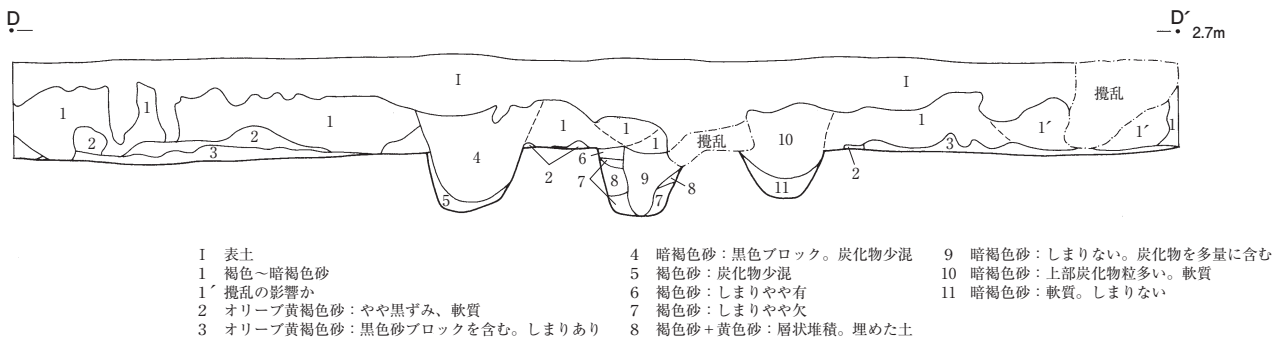
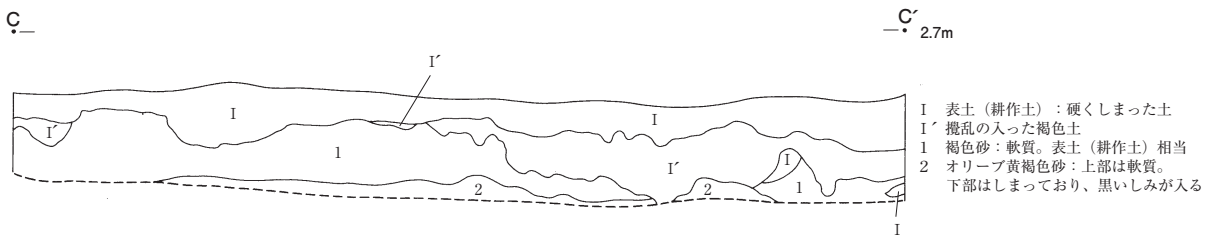
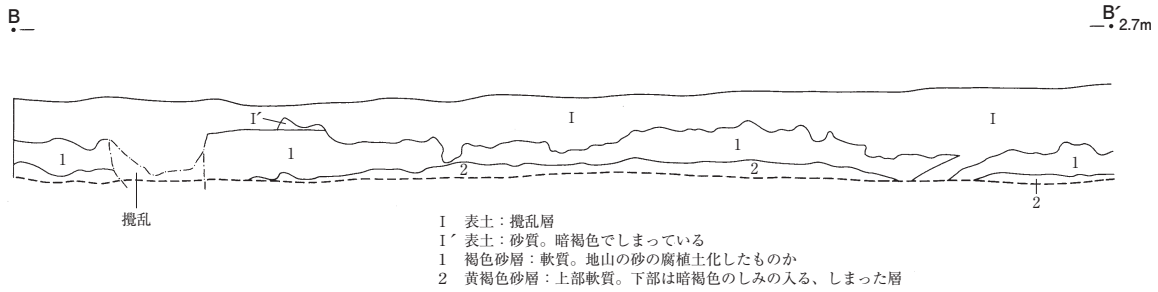
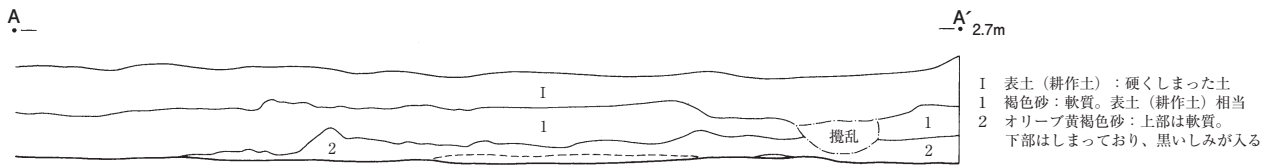


(12) トレンチ配置図・遺物出土地点



(12) 6トレンチ遺物出土地点

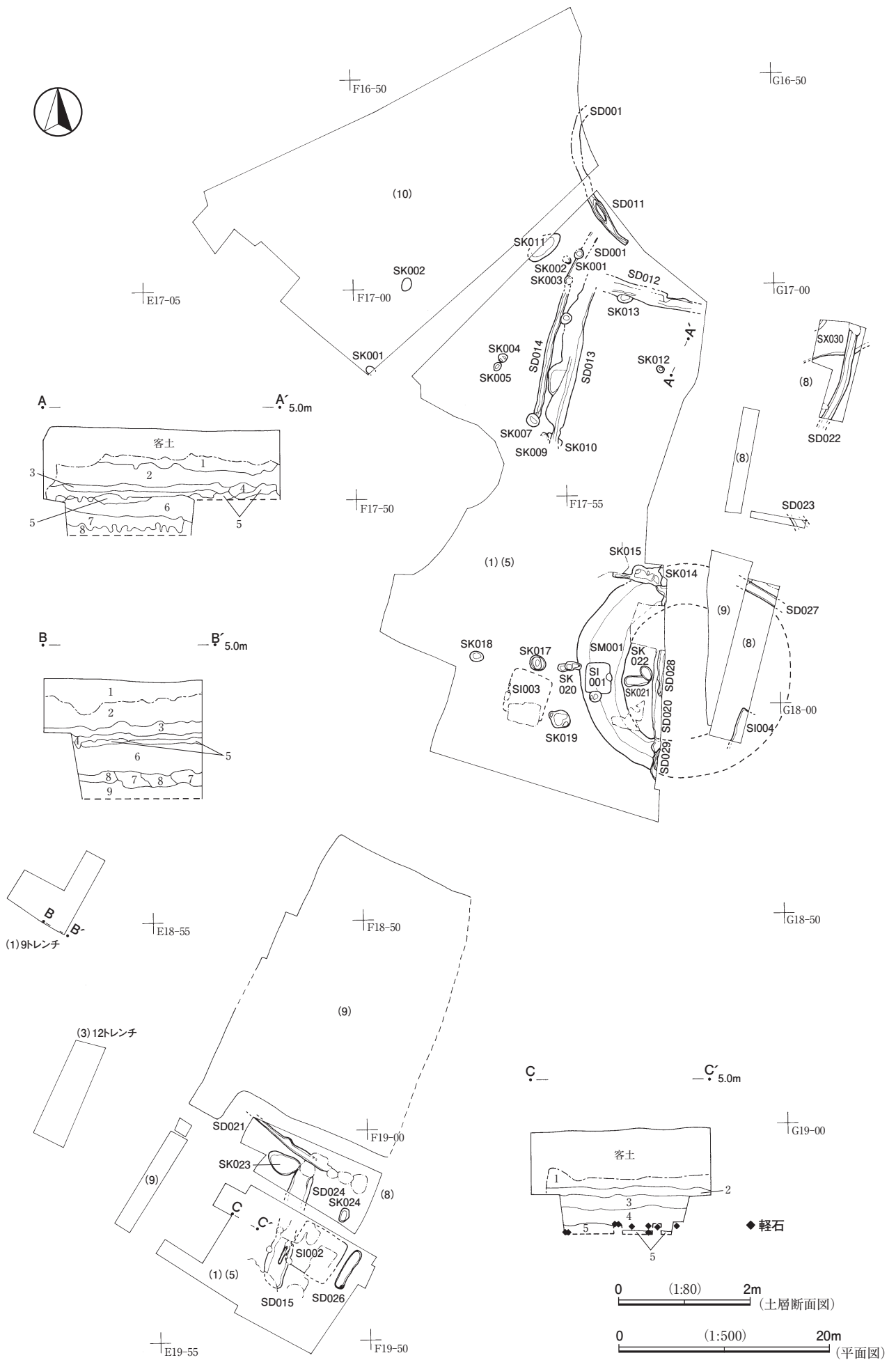
第11図 遺跡南部 (12) 次調査区の遺物出土地点



第12図 遺跡南部(12)次調査区の土層

第4表 遺構一覧表

区域	遺構番号	種類	時代	備考	代表グリッド	
中央部 北半	北方区域	(10)SK001	土坑	近世	(10)次調査区	F16-91・F17-01
		(10)SK002	土坑	近世	(10)次調査区	F17-10
		SD011	溝	近世	(5)A区SD011と(10)SD001を同一遺構として統合	F16-74・75・85・86
		SK011	土坑	近世	(5)A区	F16-94
		SK001	土坑	近世	(1)1トレンチ内	F16-95
		SK002	土坑	近世	(1)1トレンチ内	F16-95
		SK003	土坑	近世	(1)1トレンチ内	F16-95
		SK004	土坑	近世	(1)1トレンチ内	F17-13
		SK005	土坑	近世	(1)1トレンチ内	F17-13
		SK007	土坑	近世	(1)3トレンチ内	F17-34
		SK009	土坑	近世	(1)3トレンチ内	F17-34
		SK010	土坑	近世	(1)3トレンチ内	F17-34
		SD012	溝	近世	(5)A区	F17-06・07
		SD013	溝	近世	(5)A区	F17-05・15・25・34
		SD014	溝	近世	(5)A区。SD014とSD001を同一遺構として統合	F16-85、F17-04・14・24
	SK012	土坑	近世	(1)2トレンチ内	F17-27	
	SK013	土坑	近世	(5)A区	F17-06	
	東方区域	SD022	溝	近世	(8)4-2トレンチ内	G17-21・31
		SX030	段整形	近世	(8)4-2トレンチ内。北へ向かって下がる2段。遺構番号新規付与	G17-11・12
		SD023	溝	近世	(8)4-3トレンチ内	G17-60
		SI004	竪穴住居	平安時代	(8)3トレンチ内	F18-08・09
		SD027	溝	中世以降	(8)3トレンチ確認調査時点ではSM001周溝の可能性が考えられた溝。遺構番号新規付与	F17-79
	南方区域	SM001	古墳	古墳時代後期	(1)10トレンチ内で、周溝を検出。円墳か。(5)A区	F17-76・85・86・95・96、F18-05・06・15・16
		SI001	竪穴住居	平安時代	(1)10トレンチ内。SM001周溝上	F17-95・F18-05
		SI003	竪穴住居	平安時代	(5)A区。「人」墨書土師器杯出土	F18-03・04
		SD020	溝	近世	(5)A区。SM001周溝内側部分	F17-96・F18-06・16・26
		SD028	溝	近世	(5)A区。SD020に重複	F17-97・F18-07
		SD029	溝	近世	(5)A区。SD020に重複	F18-16
		SK014	土坑	近世	(5)A区。SM001周溝上	F17-76
		SK015	土坑	近世	(5)A区。SM001周溝上	F17-76
		SK016	土坑	古代以降	(5)A区	F18-05
		SK017	土坑	古代以降	(5)A区	F17-94
		SK018	土坑	古代以降	(5)A区	F17-92
		SK019	土坑	古代以降	(5)A区	F18-04
		SK020a	土坑	古代以降	(5)A区	F17-95
		SK020b	土坑	古代以降	(5)A区	F17-95
SK021		土坑	古代以降	(5)A区。当初遺構番号なし。欠番となったSK021を付与	F18-06	
SK022		土坑	古代以降	(5)A区	F17-96	
中央部 南半	中央区域	SD021	溝	平安時代	(8)1区。(1)16トレンチ北方	E19-07・18
		SK023	土坑	平安時代以降	(8)1区。(1)16トレンチ北方	E19-18
		SD024	溝	平安時代	(8)1区。(1)16トレンチ北方	E19-28
		SK024	土坑	近世	(8)1区。(1)16トレンチ北方	E19-29
		SD015	溝	平安時代	(5)C区。(1)16トレンチ周辺拡張	E19-27・28・37・38
		SI002	竪穴住居	平安時代	(5)C区。(1)16トレンチ周辺拡張	E19-38・39・48・49
		SD026	溝	平安時代	(5)C区。(1)16トレンチ周辺拡張。旧SD014。遺構番号重複のため報告に際し変更	E19-38・39

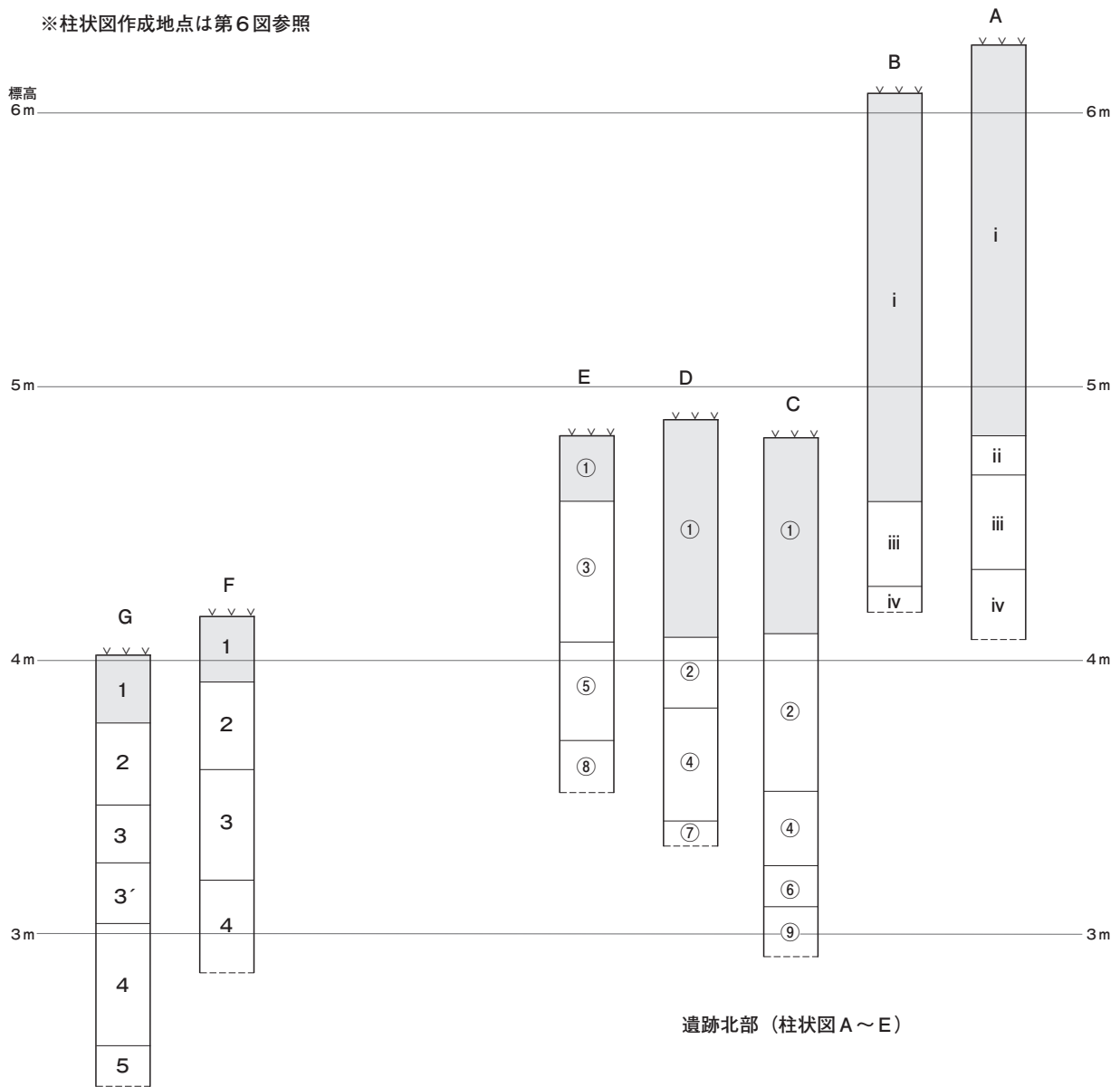


第13図 遺跡中央部遺構群周辺の土層

南

北

※柱状図作成地点は第6図参照



遺跡中央部
(柱状図F・G)

遺跡北部 (柱状図A～E)

2m ————— 2m

第6図		遺跡中央部	
		G	F
第14図	1	盛土	
	2	暗灰褐色砂	
	3	明灰褐色砂	
	3'	灰白褐色砂	—
	4	灰白色砂+茶褐色砂	
	5	灰白色砂	

第6図		遺跡北部					
		E	D	C	第14図	B	A
第14図	①	盛土			第14図	i	盛土
	②	—	灰黒褐色砂			ii	— 暗灰褐色砂
	③	灰色砂				iii	灰褐色砂
	④	—	暗灰褐色砂			iv	黒灰色砂
	⑤	黒灰色砂(主) 灰色砂(従)	—	黒灰色砂(主) 灰色砂(従)			
	⑥	—	—	灰黒色砂			
	⑦	—	黒灰色砂				
	⑧	黄褐色砂	—	黄褐色砂			
	⑨	—	—	黄灰色砂			

第14図 遺跡中央部・北部の土層柱状図

ある（第4表）。なお、遺構検出区域に隣接する調査地であっても、想定される遺構検出面を超える深さに攪乱が及んでいて、遺構の広がりを確認できない地点が多くあった。

中世以前に遡ることを確認できた遺構は、古墳時代後期の円墳と推測される古墳の周溝1基（SM001）、平安時代の竪穴住居跡4軒（SI001～SI004）、平安時代の溝4条（SD015・SD021・SD024・SD026）、平安時代と推測される土坑1基（SK023）である。これら古墳時代と奈良・平安時代以前に遡る遺構10基の配置をみると、遺跡中央部北半の南方区域と、遺跡中央部南半中央部の2か所に分かれていることが分かる。なお、第4表に掲示した中央部遺構群の構成要素のうち、上記以外の溝10条・土坑24基は、近世以降であり、中世以前に遡る遺物が出土した遺跡南部北半中央区域（12）次調査区の土坑と溝についても、出土品の組成と覆土の状況から、近世以降と位置づけられることを確認した。また、遺跡中央部北半と中央部南半の中間区域、および遺跡南部にある遺構の空白地帯には、土層と遺物の散布状況から近世以降の畑地と想定できる平行に走る溝群（図版6・7）もあった。

なお、中央部南半遺構群の周辺において、遺構は検出されなかったものの、埴輪および古代の遺物がまわって出土した地点があり（第35図）、砂州上により多くの遺構があった可能性を推測できる。

5 基本層序

市川砂州上に立地する平田遺跡では、調査時の地表面から深さ1m～2mの範囲では、色調を異にする砂がおおむね水平に堆積していた。遺構外堆積砂の色調は、細部においては調査地点により差があったが、全体的には、上部が黒味を帯びて暗い色調であるのに対し、下部が明るい色調を呈する傾向にある。

遺構が検出されなかった遺跡北部の砂層の色調は、上部では暗灰褐色あるいは灰黒褐色砂、中間部では灰色砂と黒灰色砂が混在、下部では黄褐色ないし黄灰色であった（第14図A～E）。同じく遺構が検出されなかった遺跡南部の様相は、第12図および深掘り地点の土層柱状図に掲示した（第8図～第10図）。

遺構が検出された遺跡中央部における遺構外堆積砂の土層の特徴は下記のとおりである。遺構は黄褐色砂層面において検出された（第13図）。

遺跡中央部 北半 北方区域

- （第13図A - A'）
- 1 褐色砂（黄褐色砂斑）
 - 2 褐色砂
 - 3 暗褐色砂
 - 4 暗褐色砂・黄褐色砂（淡褐色砂斑）
 - 5 黄褐色砂（暗褐色砂斑）
 - 6 黄褐色砂
 - 7 オリーブ淡褐色砂
 - 8 暗鉄銹褐色砂・オリーブ淡褐色砂

遺跡中央部 南半 西方区域

- （第13図B - B'）
- 1 黒色砂質土（表土）
 - 2 褐色砂（層下半部に径10mm大以下の淡褐色砂を斑状に少量含む）
 - 3 淡黄褐色砂（径10mm大以下の暗褐色砂を斑状に少量含む）

- 4 淡褐色砂（3層より白っぽい）
- 5 褐色砂（わずかに鉄錆色の赤みをおびる）
- 6 淡黄褐色砂（3層に似るが層下半部はわずかに赤みを帯びる）
- 7 橙褐色砂（5層・7層の赤みがより強く発色し集中した部分で、雨水・地下水中の鉄分の影響か、総じて硬く金属質感がある）
- 8 オリーブ暗褐色砂（7層の赤みの少ない部分）
- 9 淡褐色砂（いわゆる白っぽい砂。若干オリーブがかかる。しまり良）

遺跡中央部 南半 中央区域

- （第13図C - C'）
- 1 暗褐色砂（径10mm大の褐色砂ブロックをごく少量含む）
 - 2 暗黄褐色砂（黄褐色砂混）
 - 3 黄褐色砂（層下半部は白っぽい。褐色砂斑状に混じる）
 - 4 黄褐色砂・鉄錆色砂（径20mm大淡褐色砂ブロック多く混じる）
 - 5 淡褐色砂・黄褐色砂

第2章 遺 構

第1節 古墳

SM001（第15図・第16図、図版3・4）

SM001は、発掘調査において周溝が確認される以前には、全く存在を知られていなかった古墳である。墳丘は削平されており、埋葬施設もみつからなかった。

遺跡中央部北半の南方区域、F17-76・85・86・95・96、F18-05・06・15・16グリッドに位置しており、市川砂州の頂部付近に立地する。なお、周溝内西部に、周溝が埋まった後に掘り込まれた古代の竪穴住居跡（SI001）が検出された。その他のSM001と重複している土坑や溝は近世以降のものである。

周溝は、黄褐色砂の地山面、標高3.4m付近において弧状に検出された。正円に近い平面形を復元すると、周溝外径は20m、遺存度は1周の42.5%となる。検出面における周溝幅は4m前後、検出面から周溝底面までの深さは最大で30cmほどであった。下端幅2m～3mを測る底面からの立ち上がりはなだらかで、周溝遺存部の横断面は皿状に近い。

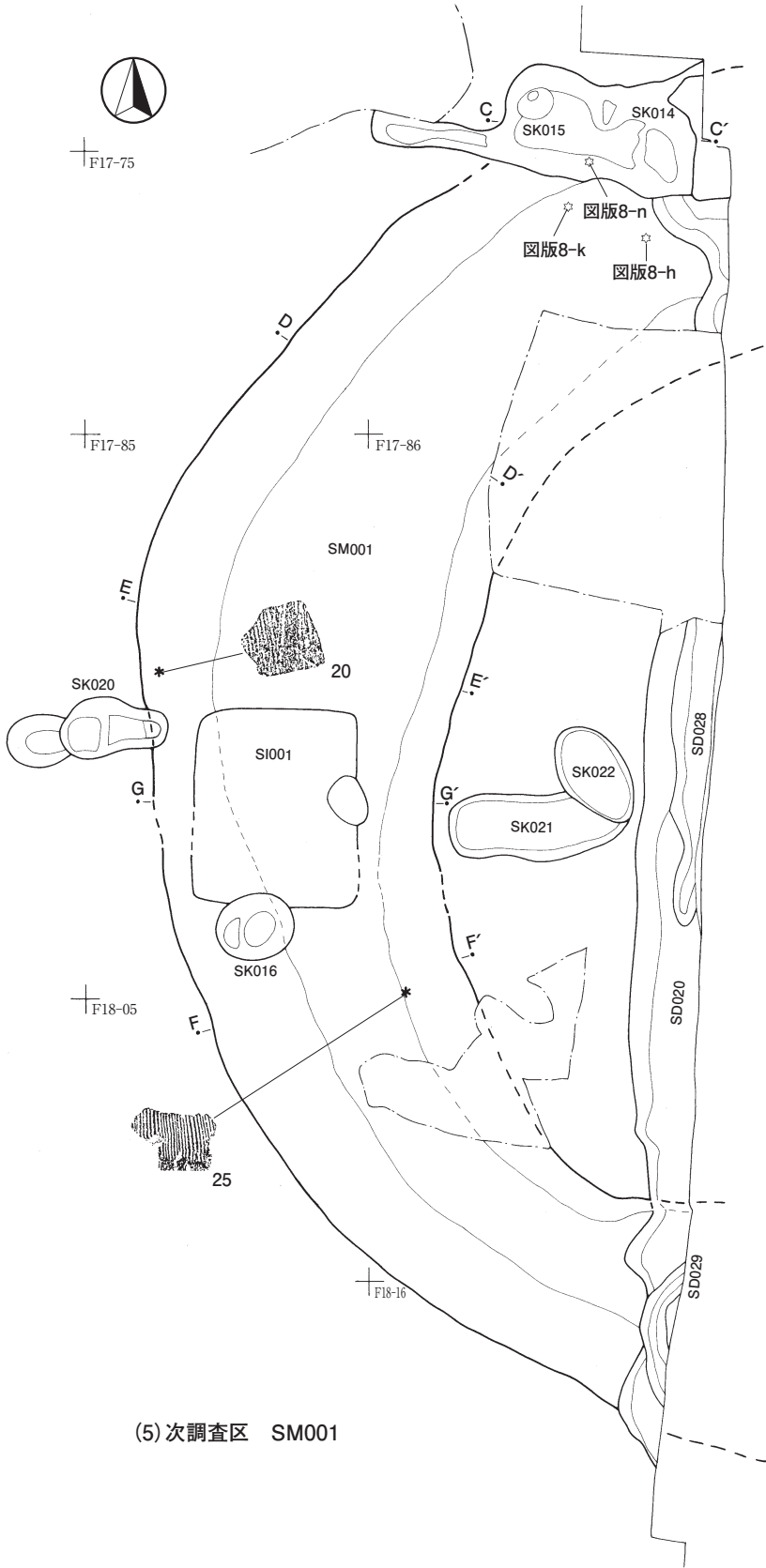
周溝覆土は、下層底面付近に暗灰黄色砂があり、その上部には黒色砂が堆積する状況を広範囲で確認した。最上層は地点により色調が異なるが、遺構等のない区域においては、おおむね自然堆積により埋没した様相を捉えることができる。

検出面での周溝内縁を墳裾とみなし、墳形を円墳と想定して、復元すると、墳丘径は12.5mとなる。なお、SM001の東方3m～10mの区域に位置する（9）A区と（8）3トレンチの調査では、SM001周溝の延伸部検出の可能性が推測された（第13図）。しかし、よりSM001に近い（9）A区では、ほぼ全面に攪乱が及んでいて遺構は検出されなかったほか、（8）3トレンチにおいてもSM001は遺存していなかった。なお、（8）3トレンチ北辺で溝が検出され、位置と方向性からSM001の周溝の一部である可能性があったため、注意深く観察をおこない記録を作成したが、検出された溝は、断面形状が（5）区内の周溝断面と全く異なっており、また、暗灰色砂が斑状に混じる黄色砂層の上層から掘り込まれたものであることから、中世以降の溝（SD027）と判断するに至った。

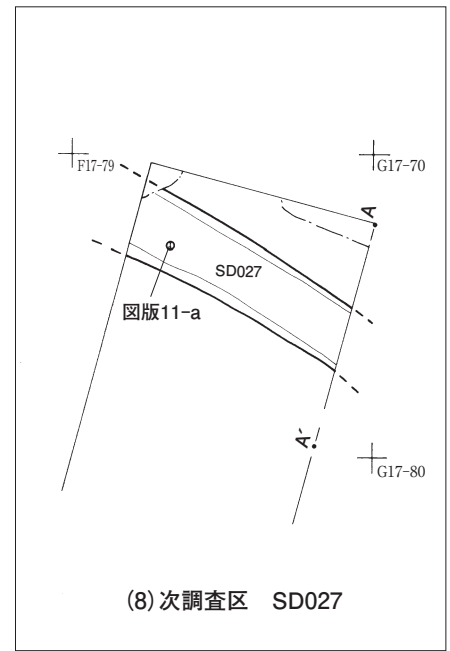
SM001から出土した遺物は、周溝埋土に包含されていた埴輪3点（第28図20・25、第6表d）、須恵器壺1点、灰釉陶器壺3点（図版8h・k・n）、18世紀代の瀬戸美濃丸皿1点（図版9k）のみである。いずれも断片化しており、埴輪を含め、原位置と認定できる状態で出土した遺物はなかった。

しかしながら、埴輪については、周溝内のほか、周辺区域（中央部北半）からも破片が出土していることを合わせ考えると、元来、SM001に埴輪が樹立されていたと考えることができる。

SM001周辺の中央部北半から出土した9点の埴輪には突帯部位がないが、外面タテハケ調整や胎土の特徴は、中央部南半から出土した22点、および南部南半から出土した5点と共通している。平田遺跡から出土した埴輪を総括的に見ると、断面形が低い山形の突帯をもつものがあることから、6世紀後半頃と推測することができ、埴輪を伴っていたと推測できるSM001についても、古墳時代後期に位置づけることができる。



(5) 次調査区 SM001

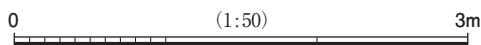
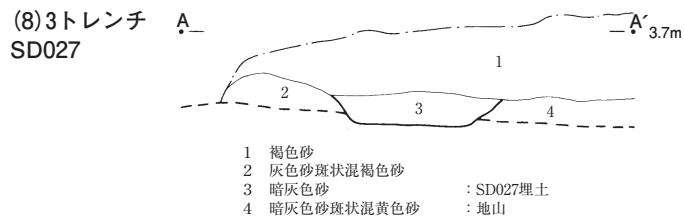
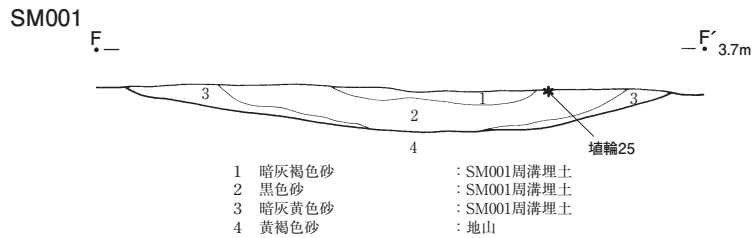
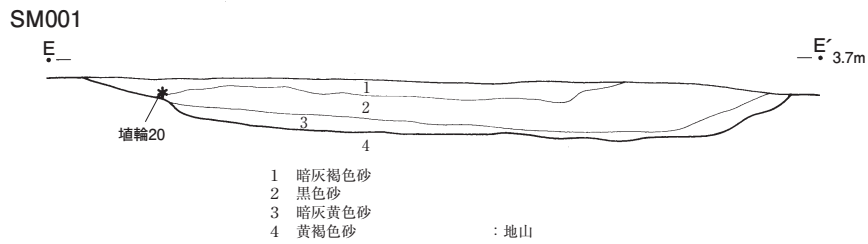
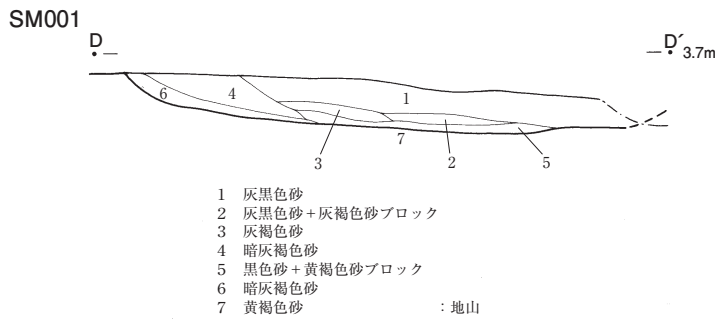
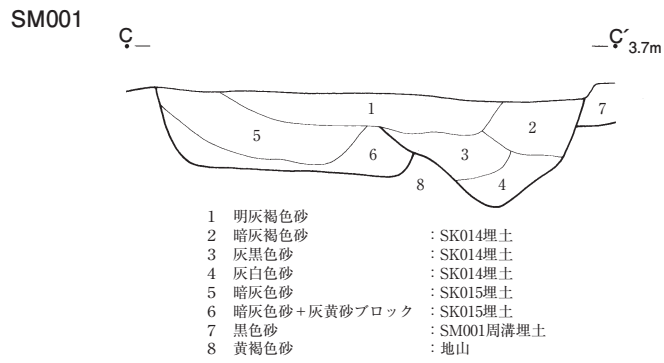


(8) 次調査区 SD027

- * 埴輪
- ☆ 灰釉陶器
- 緑色片岩



第15図 SM001・SD027



第16図 SM001周溝内土層・SD027断面図

第2節 古代の遺構

1 竪穴住居

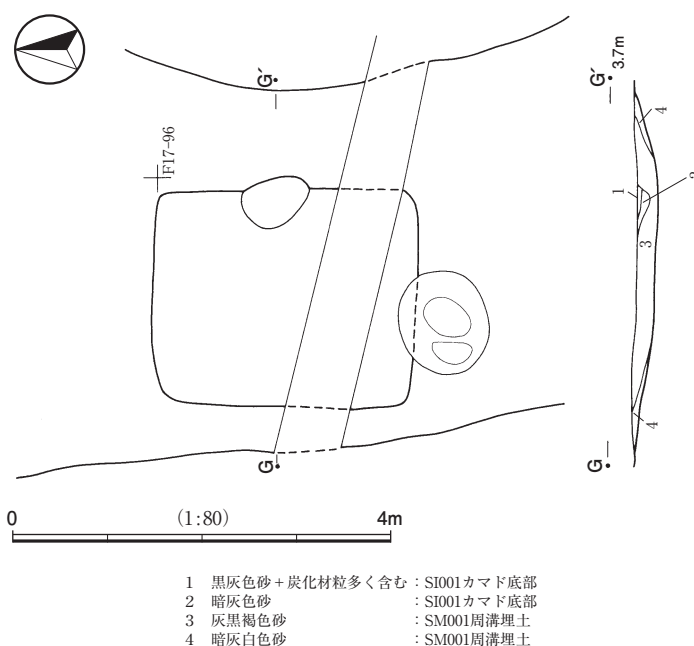
SI001 (第17図、図版4)

SI001は、遺跡中央部北半の南方区域、F17-95、F18-05グリッドに位置している。SM001周溝の埋土である灰黒褐色砂層上において検出された。カマドの底部がわずかに遺存している以外は、遺存状態が極めて悪く、床面および柱穴はみつからなかった。

平面形は、東西に主軸を置く方形と推測され、規模は、東西2.3m、南北2.8m前後と推測される。東壁部分に残るカマド底部の土層は、下層が暗灰色砂、上層が炭化粒を多く含む黒灰色砂である。

SI001に伴う遺物はなく、かつ、南壁の一部を切るSK016にも遺物がないことから、古墳の周溝が埋まった後のどの時点で竪穴住居が構築されたのか、時期を絞り込むことは困難であるが、西方3m地点に後述するSI003があること等から、SI001の年代について平安時代と推測した。

なお、SI001は、古墳SM001周溝の輪郭に沿う外縁寄りに配されており、東壁と周溝内縁との間隔は1m前後、西壁と周溝外縁との間隔は0.5m前後である。カマドが東壁に配されていた状況から、SI001が構築された時点において、SI001の東、裏手にあたるにSM001の墳丘があり、西に開けた形で地にSI001が構築されていた可能性を推測する余地もある。



第17図 SI001

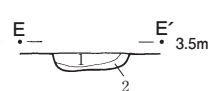
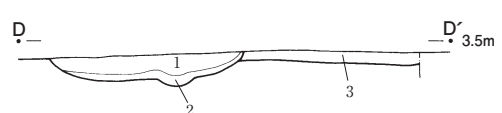
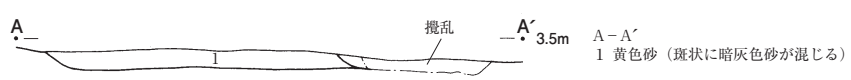
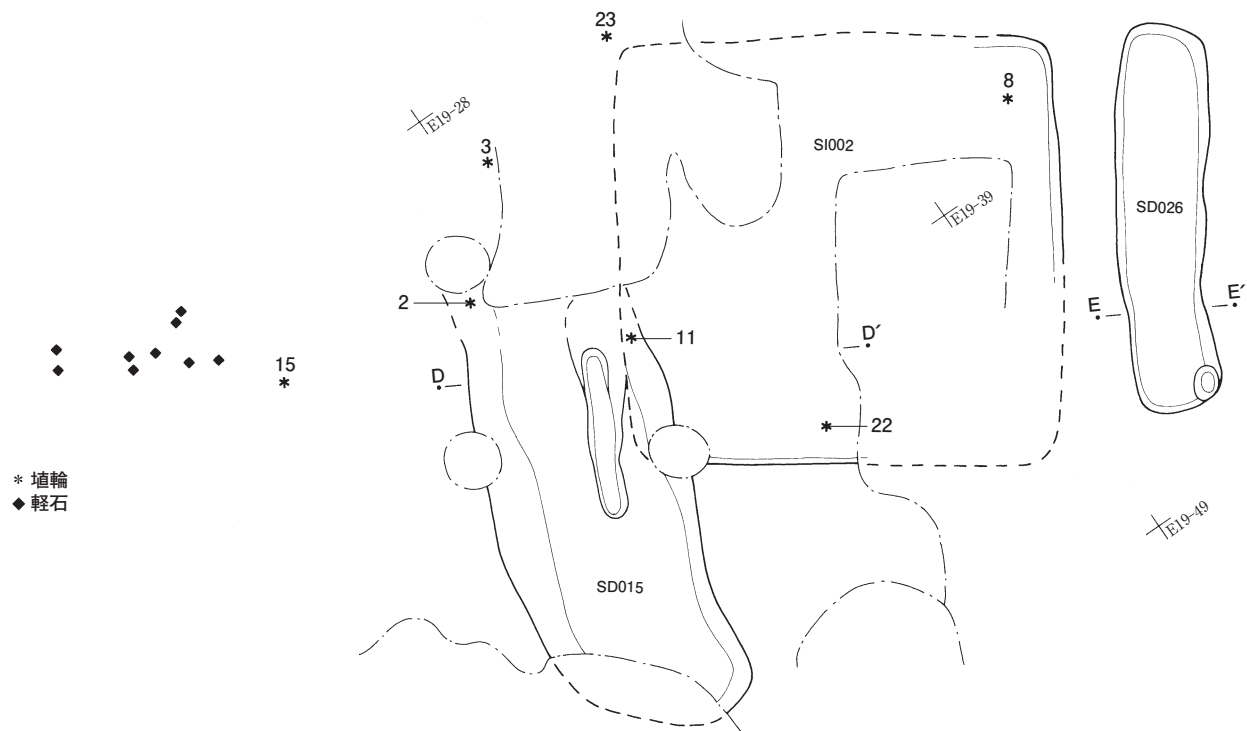
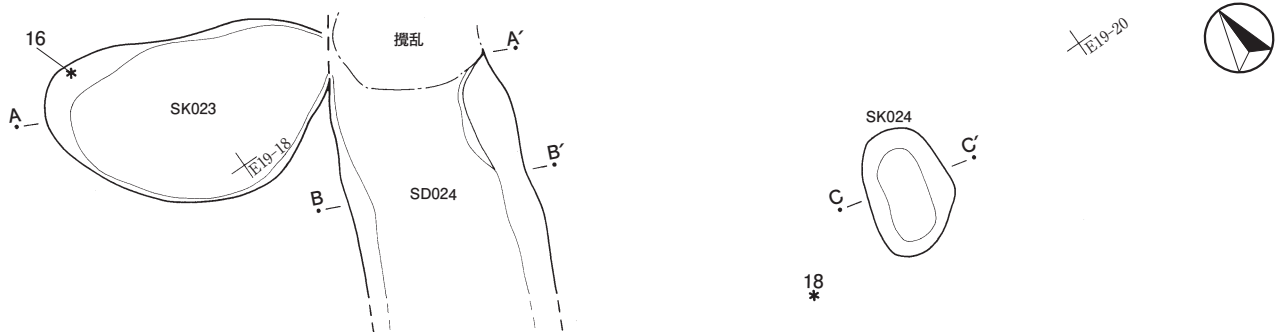
SI002 (第18図、図版5)

SI002は、遺跡中央部南半、千葉街道に近いE19-38・39・48・49において検出された。広範囲に攪乱を被っていたが、北東隅と南西辺の一部において、深さ5cmの掘り込みを確認した。南西隅はSD015に切られている。黒灰色砂の埋土が示す平面形は方形で、規模は一辺4.5mに復元できる。カマドや柱穴は遺存していなかった。

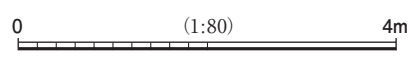
上層にあたる包含層から埴輪(8・11・22)等が出土しているものの、SI002に確実に伴う遺物はない。なお、SI002の東辺から0.6mの間隔を置いた地点に、平行に掘られた溝SD026があり、両者が複合して機能していた可能性を推測できる。SI001と同様土層の状況から、SI002はSD026とあわせて平安時代の遺構と推測される。

SI003 (第19図、図版5)

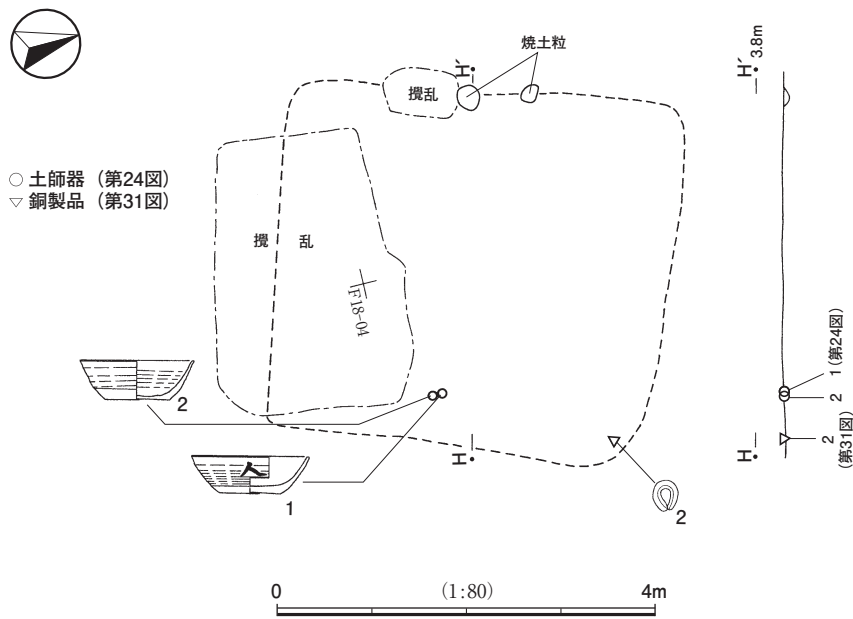
SI003は、遺跡中央部北半の南方区域、F18-03・04において検出された。東方3m地点にあるSI001と同様、遺存状態は悪く、明確な床面及び柱穴はみつからなかったが、西壁に焼土粒からなるカマドの底部がわずかに残る。平面形が方形の竪穴住居と推測され、主軸はN-70°-W付近にあったとみられる。規



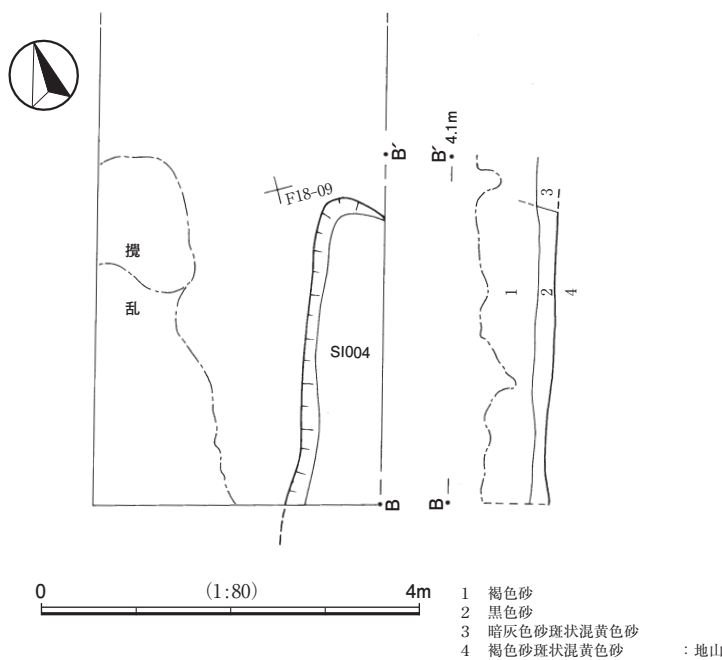
- C-C'
- D-D'
- E-E'
- 1 暗灰色砂
- 2 暗灰黄色砂
- 3 黒灰色砂



第18図 SI002・SD015・SD024・SD026・SK023



第19図 SI003



第20図 SI004

において、方形掘り込みの北西隅が検出された。検出範囲は南北3.2m、東西1.1mである。暗灰色砂が斑状に混ざる黄色砂層の検出面から、黒色砂に埋められた床面までの深さは15cmで、床面はきれいな面であり、褐色砂が斑状に混ざる黄色砂であった。なお、(9)次調査で周辺を拡張したが、攪乱が及んでいたので、遺構を検出できず、規模を把握できなかった。また、カマドや柱穴は遺存範囲内にはなく、遺物も出土しなかった。検出した西辺の方向が、SI001・SI002・SI003とおおむね一致していることから、平安時代の竪穴住居の可能性を推測した。

模の復元は困難であるが、主軸線上、カマドの対面東方に3.2mの地点から、完形もしくは完形に近い土師器杯2点(第24図1・2)が出土しており、これをもとにすれば、一辺4m前後かと推測される。なお、土師器杯の1点には「人」墨書がある。

北東隅にあたる地点から銅製品(第31図2)が出土しているが、帰属についてはやや不明瞭な点をのこす。

2点の土師器杯の年代は、9世紀前半代の特徴を持つものであり(松本・松田2001)、住居の年代についても同じ時代を考えることができる。

SI004(第20図、図版3)

SI004は、遺跡中央部北半の東方区域、F18-08・09にある。(8)3トレンチ内の褐色砂層の下部、南東隅部分に

2 溝

SD015・SD021・SD024・SD026（第13図・第18図）

SD015・SD021・SD024・SD026は、中央部南半中央区域において検出された平安時代と推測される溝群である。

SD015 E19-27・28・37・38において検出された。幅2m、長さ4.1m以上を測るが、両端が攪乱内にあるため全長は不明である。検出面から底面までの深さは20cmである。埋土の上層は暗灰色砂、下層は暗灰黄色砂で、これらはSI002の南西隅の埋土(黒灰色砂)を切っている。明確に伴う遺物はないが、上層グリッド出土遺物に、長頸壺を含む灰釉陶器や埴輪がある。

SD021 E19-07・18において検出された。幅30cm～60cm、長さは8.3m以上を測る。検出面から床面までの深さは10cm～15cmで、埋土は黄褐色砂である。ごく小さな土師器の破片が出土しているものの、年代の特定は難しい。攪乱のため遺存していない東方部分に、掘り込みがまっすぐ続く可能性を想定できるが、このように復元すると、SI002の北方4mのところ、SI002の北辺とほぼ平行に掘られた区画溝という状況を考えることができる。

SD024 E19-28において検出された。幅2m、長さ2.5m以上、検出面から床面までの深さは12cm前後である。ごく小さな土師器の破片が出土している。

SD026 E19-38・39において検出された。幅0.9m、長さ4.0mの長方形の溝状遺構である。検出面からの深さ22cmを測る底面は平坦で、東南隅に深さ最大8cmの浅い楕円形ピットがある。ピットの長径は35cm、短径は25cmを測る。埋土の上層は灰黒色砂、下層は暗灰黄砂である。SI002の東辺から0.6mの間隔を置いて平行に掘られていることから、SI002とSD026は関連をもっていたと考えることができる。遺物が出土しなかったため、SD026の時期を特定することは難しいが、位置関係からみて、SI002と同様に平安時代の遺構である可能性を推測できる。

3 土坑

SK023（第18図）

中央部南半中央区域において検出された平安時代と推測される土坑である。長径3m、短径1.7mのやや不整形な楕円形平面の土坑で、黄色砂層を掘り込んでいる。検出面から床面までの深さは、最も深い西側部分で16cm、東側では7cmを測る。埋土は黄色砂が斑状に混じる暗灰色砂である。ごく小さな土師器の破片と埴輪片が出土している。なお、SI002の北方に検出されたSK024は、覆土の状況等から近世以降の土坑であることが確認された。

第3章 遺物

第1節 出土遺物の種類

平田遺跡の発掘調査では、調査区域の広範囲から、土器類、埴輪、土製品、石製品、銭貨、金属製品、木製品、植物遺体、貝類が出土した。

土器類の主体は、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器と中近世の陶磁器類である。大半は破片資料であり、それら多くは遺物包含層から出土品した。完形及び口径等を復元できる資料はごく一部である。上記のほか、少数ながら縄文土器・土錘、弥生土器、古墳時代の土師器、中国陶磁（青磁）が出土した。

埴輪は、円形透かしのある円筒埴輪のほかに、形象埴輪の存在を確認できる。すべて破片資料であり、古墳に樹立した状態で出土したものはない。

他の土製品、石製品、銭貨、金属製品、木製品は中近世以降の遺物である。貝類については後述する。

第2節 土器類

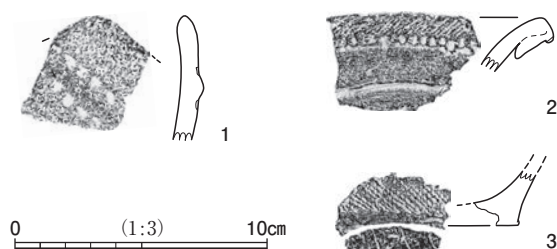
1 縄文土器・土錘（第21図1・第22図、図版8・11）

第21図1は、中期前半の阿玉台式土器の波状口縁部である。隆帯の両脇を竹管で連続的に刺突し施文する。白色砂粒と雲母微粒および少量の赤色スコリアを含む胎土の色調は、内外面とも褐灰色（10YR4/1）で、破断面内部は黒味がより強い。出土地点は、市川砂州の南縁に位置する（4）次調査区の深掘り部分（クラム3柱状図深度⑩ 青灰色砂層下部 標高-0.3m~0.5m付近）である（第9図・第10図）。なお、クラム3の柱状図深度④（黒色泥層~ピート黒泥層 標高1.2m付近）から、同類かとみえる土器片1点が出土しているが、表面の摩耗が著しく時期等は不明確である。

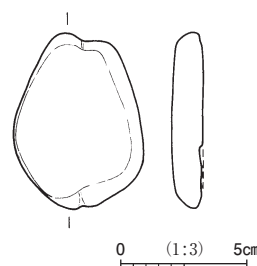
第22図は、阿玉台式土器を転用した土錘である。縦6.9cm、横5.0cm、厚1.2cm、重さ51.2g、外面は無文である。胎土表面の色調は黒褐色（10YR3/1~10YR3/2）であるが、破断面に見える内部の色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）で、白色砂粒と雲母を多く含む。内面側には粘土をなでつけた際に生じた段差がある。遺跡南部（12）次調査区の近世溝・土坑（第11図）覆土中に包含されていた。

2 弥生土器（第21図2・3、図版8）

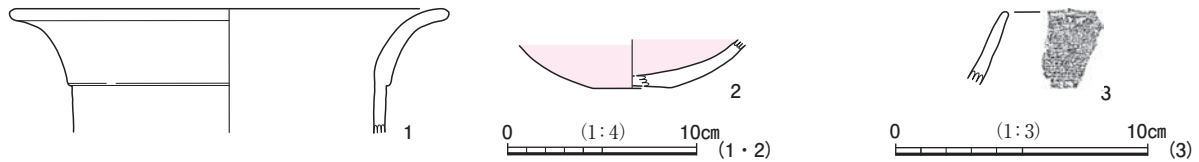
2は、弥生後期装飾壺の口縁部である。複合口縁の端部にLR単節縄文を施し、その下端部に刺突を加えて刻み文を巡らせている。器壁が荒れているため不明瞭だが、内面にはミガキの痕跡をわずかに見るこ



第21図 縄文土器・弥生土器



第22図 土錘



第23図 古墳時代の土師器

とができ、極小さな範囲であるが赤彩の可能性を推測できる部分がある。細砂粒を少量含む胎土の色調は外面が明赤褐色（2.5YR5/6）、内面がにぶい橙色（7.5YR6/4）である。遺跡中央部北半（1）2トレンチ内から出土した。

3は、弥生後期甕の底部である。体部外面に撚糸文を施す。木葉痕がある底部外面周縁部は、わずかにめくれ上がる。細砂粒をやや多く含む胎土の色調は、にぶい橙色（7.5YR6/4）で、内面の一部は明褐色（2.5YR5/6）である。遺跡南部北半（4）9トレンチから出土した。

3 古墳時代の土器（第23図1～3、図版8）

1は、古墳時代前期の土師器有段口縁壺の口縁部である。復元口径23.2cm、残存器高6.5cm、にぶい橙色（7.5YR7/4）の胎土は、1mm～2mm角大の不整形な白色粒（石英）を非常に多く含み、赤色粒が混じる。表面の摩耗が著しく、赤彩の痕跡は不明瞭である。遺跡中央部北半北方区域F16-65区から出土した。

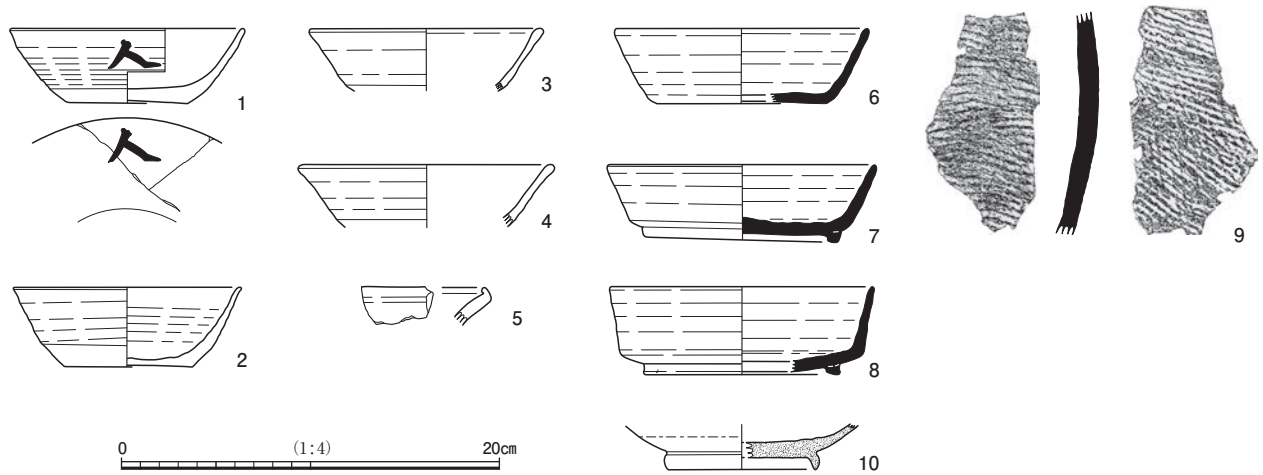
2は、古墳時代前期から中期と推測できる土師器鉢の体部下半から底部である。底部はわずかに窪むように整えられており底径4cmに復元できる。胎土中には砂粒を多く含み、赤色スコリアが混じる。摩耗が進行している表面の色調は、内面はにぶい黄橙色（10YR7/4）、外面はにぶい橙色（7.5YR7/4）であるが、底部外面以外の内外面に赤彩の痕跡を確認できる部位がある。遺跡北部（5）1トレンチから出土した。

3は、古墳時代前期の土師器甕口縁である。内面に横方向のハケメが残る。遺跡中央部北半東方区域（8）4-2トレンチから出土した。ハケメのある土師器甕は、ほかに遺跡中央部南半SM001（口縁片）、遺跡南部南半西部（4）クラム2（胴部）、遺跡中央部南半E18-99区（脚台頂部）からも出土している。

4 古代の土器・灰釉陶器（第24図1～10、図版8）

1は、墨書のある土師器杯である。口径12.4cm、底径6.3cm、器高4.0cm、約80%遺存する体部外面の一方所に「人」字が正位で墨書されている。墨はやや薄れているが、筆の運びは太く明確である。体部外面の中位から口縁にかけては、強いロクロ目の頂部をヨコナデで潰すように表面調整がなされている。内面はヨコナデの痕跡をとどめるものの摩耗が著しい。体部外面下端から底部周縁にかけては、回転ヘラケズリが施されている。回転ヘラケズリは丁寧で、幅は一定である。底部外面の中央には、わずかに回転糸切りの痕跡が残る。にぶい橙色（7.5YR7/4）の胎土には雲母微粒・細砂粒・赤色スコリア・白色針状物質を含む。遺跡中央部北半南方区域にあるSI003床面から、後述する2の東側に接して出土した（第19図、図版5）。

2は、完形の土師器杯である。口径12.0cm、底径6.8cm、器高4.2cm、内外面にロクロ目とヨコナデ痕が明瞭に残る。体部外面下半と底面は回転ヘラケズリで調整されているが、体部下半の回転ヘラケズリは幅



第24図 古代の土器類

が一定しておらず、先述1に比べて雑である。底部外面の中心に回転糸切痕跡がわずかに残る。にぶい橙色(7.5YR7/4)の胎土には、雲母微粒・細砂粒・赤色スコリア・白色針状物質を含む。遺跡中央部北半南方区域にあるSI003床面から、上記1の西側に接し、正位に近い形で出土した(第19図、図版5)。

3・4は、土師器杯の口縁部である。3は、復元口径12.4cm、残存器高3.3cm、ロクロ目の残る体部は薄手のつくりで、外反気味の口縁端がわずかに肥厚する。体部下端にヘラケズリの一部が残る。にぶい黄橙色(10YR7/4)の胎土中には砂粒が多く、部分的に焼土粒が混在している。遺跡中央部北半(1)1トレンチから出土した。4は、復元口径は13.6cm、残存器高3.3cm、表面全体が摩耗しているが、体部外面につよいロクロ目が残る。体部下端に回転ヘラケズリを施す。橙色(2.5YR6/6)～にぶい橙色(7.5YR7/4)の胎土中には砂粒と雲母微粒を含む。遺跡中央部南半東方区域(1)20トレンチから出土した。

5は、土師器甕の口縁部である。ヨコナデが施された口唇部は内湾し強く屈曲する。にぶい橙色(7.5YR6/4)の胎土中には、砂粒を多く含み、赤色スコリア・白色針状物質を少量含む。遺跡中央部南半西方区域(3)11トレンチから出土した。

6は、須恵器杯である。復元口径13.5cm、復元底径9.0cm、器高4.0cm、遺存度30%で、口唇部はわずかにつまみ上げるようにおさめられている。やや青みをおびた灰色(10Y6/1)の胎土中には、細砂粒・白色砂粒・白色針状物質を含む。焼成は堅い。ロクロ目の残る体部は内外面にヨコナデ痕が残る。回転糸切り痕が明瞭に残る底部の周縁部には、回転ヘラケズリが施されているが、底部調整は体部下端には及んでいない。遺跡北部(7)3トレンチから出土した。

7は、須恵器高台付杯である。口径14.2cm、高台径10.4cm、器高3.8cm～4.1cm、遺存度80%の内外面ほぼ全面にヨコナデが施されている。内面底部には強いロクロ目が残る。底部全面に回転ヘラケズリを施したのち、断面台形状の低い高台を貼り付けている。底部切り離し技法は不明である。灰色(10Y6/1)の胎土中には、細砂粒と白色砂粒を含む。遺跡中央部南半西方区域から出土した。

8は、復元口径14.0cm、復元底径10.4cm、器高4.7cmに図上復元した須恵器高台付杯である。相互に接合できない破片が多いが、胎土・色調・焼成の特徴の共通性から同一個体と判断した。破片の総遺存度は30%である。表面は摩耗しているが、細砂粒を含む灰白色(5Y8/1)の胎土は精良で、一部に灰色(N6/0)

を呈する部分がある。口唇部は薄くシャープにつまみあげられている。回転ヘラケズリ調整した底部に、外側にむかってつまみ上げられた低い高台を貼りつける。遺跡中央部南半西方区域（3）12トレンチから出土した。

9は、須恵器大甕の体部である。外面と内面の全面に、叩き板と当て具の痕跡が残る。灰色（N5/0）の胎土には白色砂粒をやや多く含む。遺跡中央部北半（5）1トレンチから出土した。

図版8uは、須恵器横瓶の胴部である。胎土は、灰白色（2.5Y7/1）～黄灰色（2.5Y6/1）で、内面に強いロクロ目を残す。内面には、器壁の発泡および発泡部剥離面が多くみられる。外面にはオリーブ灰色（10Y6/2）の自然釉が付着している（（1）次調査採集資料）。

10は、灰釉陶器皿の体部下半から底部である。復元高台径7.8cm、残存器高2.3cm、遺存度は10%、外面にのこる施釉部分の色調はオリーブ灰色（5GY6/1）である。白色及び黒色の細砂粒を含む胎土は須恵質で、無釉部分は内外面ともに灰白色（N8/0）であるが、破断面に見える器壁内部は灰色（N4/0）である。強く内湾する高台端部はつまみ上げられて薄く、断面に見える接地面は小さい。遺跡南部南半西方区域（4）クラム3から出土した。

上記のほか図版8（a～t）に掲げた灰釉陶器が出土している。胎土はいずれも須恵質である。a・c・tは碗の体部で、遺跡南部北半西方区域（4）9・10トレンチから出土した。b・d～sは長頸壺で、gは頸部下端と肩部の接合部分、sは高台付底部、他は胴部である。h・k・n・pはやや厚手である。pは遺跡南部南半西方区域（4）1トレンチから、h・k・nは遺跡中央部北半のSM001から、他は遺跡中央部南半東方区域（1）16トレンチ周辺およびE19-27～29区から出土した。

5 中近世陶磁器類（第25図1～8、第5表、図版9）

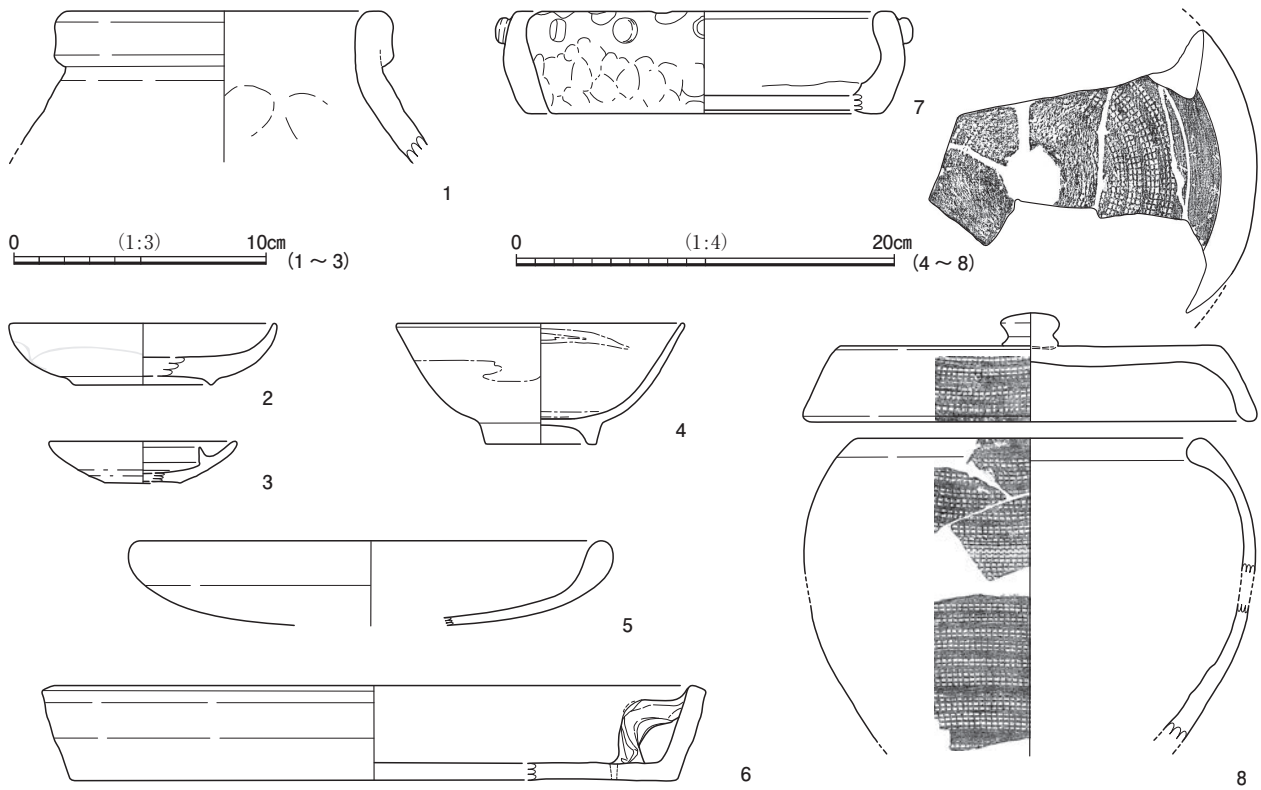
中近世の陶磁器類は、遺跡の広範囲から出土した（第5表）。分布は調査範囲のほぼ全域におよぶが、遺構に伴うものはなく、包含層についても中世と近世を区分できる出土状況ではなかった。1および図版9a～fは中世、2～8および図版9g～tは近世の陶磁器類・土製品である。

1は、常滑玉縁状口縁壺（13世紀後半）である。復元口径13.4cm、残存器高6.0cm、灰色（N6/0）の胎土中には白色砂粒を多く含む。表面摩耗のため調整は不明瞭だが、内面には当て具痕跡の凹凸が残る。遺跡南部（4）クラム2柱状図深度②から出土した。

図版9a～cは、中国陶磁である。aは、青磁割花文皿（13世紀）の体部で、灰色（7.5Y6/1）の胎土に灰白色（10Y7/2）～オリーブ灰色（10Y6/2）の釉がかかる。遺跡中央部（1）13トレンチ内の近世の畑跡から出土した。bは、青磁皿（13世紀）の口縁で、灰色（7.5Y6/1）の胎土にオリーブ灰色（5GY6/1）の釉がかかる。遺跡中央部北半SD013から出土した。cは、青磁蓮弁文碗（13世紀）の体部で、灰白色（N7/0）の胎土にオリーブ灰色（2.5GY6/1）の釉がかかる。遺跡南部（4）クラム4柱状図深度①から出土した。

図版9dは瀬戸折縁深皿（古瀬戸後期 15世紀）である。灰オリーブ色（5Y6/2）の釉がかかる。胎土は、破断面が灰黄色（2.5Y7/2）、無釉部外面はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。遺跡南部（4）クラム3柱状図深度③から出土した。図版9e・fは、接合しないが同一個体とみられる常滑の甕（13～14世紀）である。胎土は、破断面がにぶい黄橙色（10YR6/3）、無釉の内面は灰黄色（2.5Y5/1）を呈し、外面に暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）の釉がかかる。2点とも遺跡中央部南半E19-29区から出土した。

中世陶器には、上記のほかに古瀬戸後Ⅱ期頃（14世紀末～15世紀前半）の片口の体部とみられる資料が



第25図 中近世陶磁器類

第5表 陶磁器類の分布

出土区域			調査次	出土地点名	種類	備考	
北部	南半	西方区域	(5)次	1トレンチ	瀬戸	片口鉢	図版9 j
			(5)次	1トレンチ	瀬戸	播鉢	図版9 n
			(5)次	1トレンチ	瀬戸	碗	図版9 p
			(5)次	1トレンチ	瀬戸か肥前	碗	図版9 q
中央部	北半	北方区域	(1)次	3トレンチ	瓦質	火鉢	図版9 r
			(5)次	SD012	唐津	鉢	図版9 g
			(5)次	SD012	瓦質	焙烙	第25図6
			(5)次	SD013	青磁	皿	図版9 b
			(5)次	SD013	肥前	染付皿	第25図2
			(5)次	SD013	瀬戸	小杉茶碗	図版9 m
			(5)次	SD013	土製	火鉢	第25図7
			(5)次	SD013	土人形	頭部のみ	図版9 t
			(8)次	4-2トレンチ	土人形	腹前に帯を垂らす人	図版9 t
			(5)次	SM001	瀬戸美濃	丸皿	図版9 k
	南半	東方区域	(1)次	(1)13トレンチ	青磁	割花文皿	図版9 a
			(1)次	(1)13トレンチ	土人形	頭部～胸部上縁のみ	図版9 t
			(1)次	(1)16トレンチ	土製	焙烙	第25図5
			(1)次	(1)16トレンチ	瓦質	火鉢	第25図8
(1)次			(1)20トレンチ	瓦質	火鉢	図版9 s	
(5)次			E19-29	常滑	甕	図版9 e・f	
中央区域		(9)次	E18-59	土人形	亀を抱く人(上半欠損)	図版9 t	
		(9)次	E18-78	古瀬戸	片口か	38頁	
西方区域	(9)次	F18-80	古瀬戸	片口か	38頁		
	(1)次	(1)8トレンチ	瀬戸	播鉢	図版9 o		
	(1)次	(1)9トレンチ	志戸呂	灯明皿	第25図3		
	(1)次	(1)9トレンチ	瀬戸美濃	高田徳利	図版9 l		
	(4)次	(4)クラム2-②	常滑	玉縁状口縁壺	第25図1		
	(4)次	(4)クラム3-①	京・信楽系	茶碗	図版9 i		
南部	南半	西方区域	(4)次	(4)クラム3-③	古瀬戸	折縁深皿	図版9 d
			(4)次	(4)クラム4-①	青磁	蓮弁文碗	図版9 c
			(4)次	(4)クラム4-②	唐津	鉢	図版9 h
			採集資料		瀬戸美濃	茶碗	第25図4

遺跡中央部から2点出土している。E18-78区出土品の胎土の色調は均一で灰オリーブ色(5Y6/2)を呈する。F18-80区出土品の胎土の色調は、ごく表面は内外面とも灰黄色(2.5Y6/2)であるが、破断面に見える内部は、にぶい黄橙色(10YR7/3)である。

近世陶磁器類は、いずれも18世紀以降と鑑定された資料である。2は肥前磁器染付皿(透明釉)である。遺跡中央部北半SD013から出土した。3は志戸呂(遠州)の灯明皿(鉄釉)である。遺跡中央部(1)9トレンチから出土した。4は灰釉ハケ塗りの茶碗で、18世紀前半の瀬戸美濃かとみられる(採集資料)。お歯黒を染めたあとに用いたいわゆるうがい茶碗(漱茶碗)で、遊女が歯磨きに使用する例もある。5は在地産(江戸近郊か)の土製焙烙で、遺跡中央部南半(1)16トレンチから出土した。6は在地産(江戸近郊か)の瓦質焙烙(内耳)で、遺跡中央部北半SD012から出土した。7は在地産の土製火鉢で、遺跡中央部北半SD013から出土した。8は在地産(江戸近郊か)の軟質瓦質火鉢の蓋と身で、外面にタタキ目が施されている。遺跡中央部南半(1)16トレンチから出土した。

図版9 g・hは唐津の鉢(長石・灰釉)である。gは遺跡中央部北半SD012から、hは遺跡南部南端付近(4)クラム4柱状図深度②から出土した。図版9 iは、京・信楽系の茶碗(透明釉)である。遺跡南部南端(4)クラム3柱状図深度①から出土した。図版9 j・m~pは瀬戸である。jは内外面飴釉の片口鉢(18世紀後半)、mは内外面透明釉の小杉茶碗、nとoは錆釉の播鉢、pは外面鉄釉、内面灰釉の碗である。j・n・pは遺跡北部古い道沿いの(5)1トレンチから、mは遺跡中央部北半SD013から、oは遺跡中央部南半(1)8トレンチから出土した。図版9 k・lは瀬戸・美濃である。kは内外面長石釉の丸皿で、SM001から出土した。lは高田徳利の胴部で、遺跡中央部南半(1)9トレンチから出土した。図版9 qは瀬戸か肥前の染付碗で、遺跡北部古い道沿いの(5)1トレンチから出土した。図版9 r・sは瓦質火鉢である。rは遺跡中央部北半(1)3トレンチから、sは遺跡中央部南半(1)20トレンチから出土した。sと類似の破片は遺跡中央部北半(1)11トレンチからも出土している。

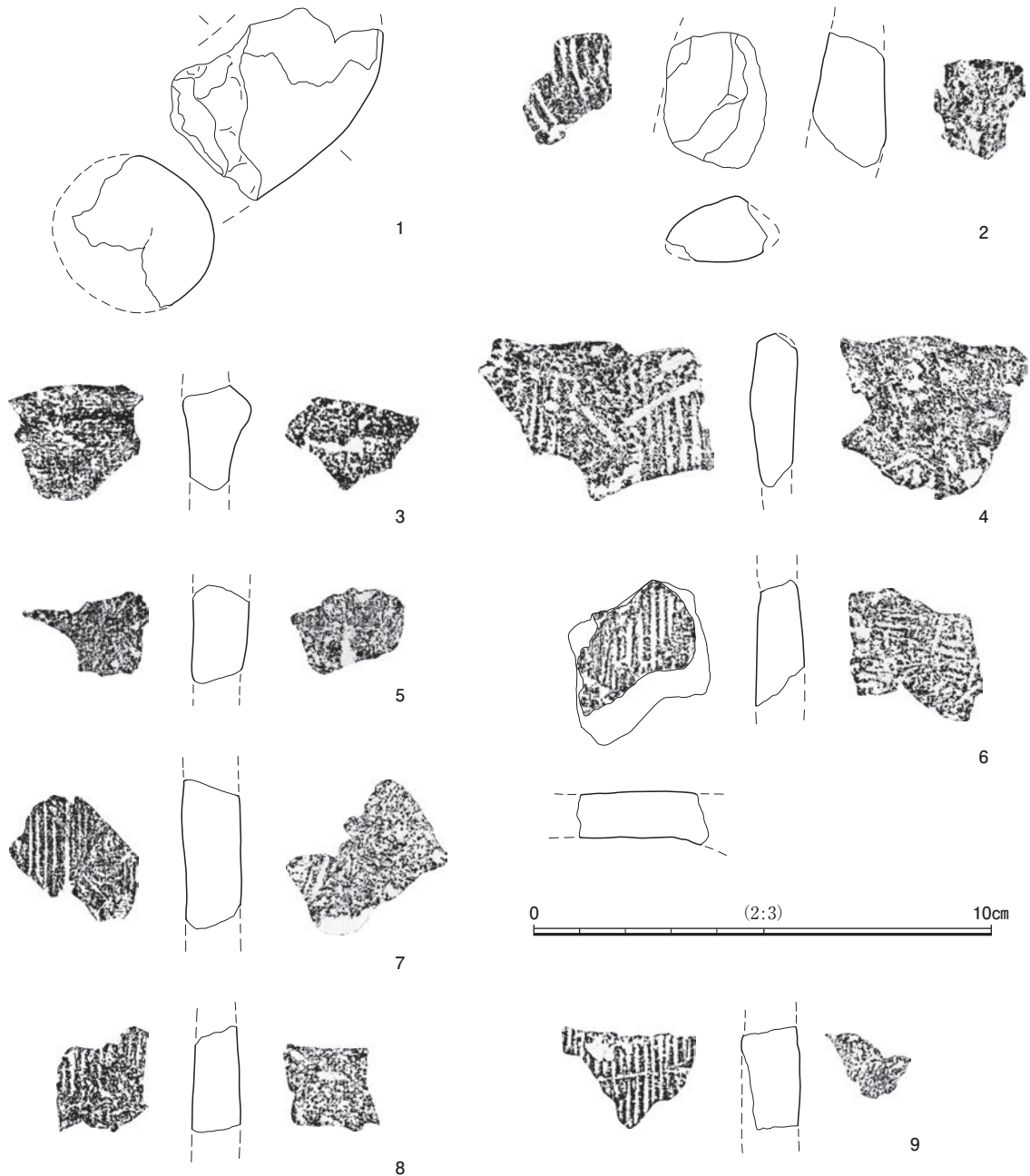
図版9 tに掲げた4点は、素焼きの土人形である。左端は遺跡中央部北半SD013から出土した唐子のような表情の頭部で、分割成形した顔面側と後頭部側を貼り合わせている。左右4.1cm、前後3.8cm、現存高4.5cm、継ぎ目が両耳と頭頂部を結ぶように通っている。左から2番目も頭部で、大黒天のような表情がみられる。分割成形した顔面から首元部分で、左右3.7cm、前後1.9cm、現存高3.9cm、頭頂部付近の厚みは6mmほどである。中空となる裏面は雑なナデ面である。遺跡中央部南半(1)13トレンチから出土した。左から3番目は、分割成形した小型全身像の半面である。現存高4.3cm、左右2.7cm、前後1.2cm、上部左方(人物の右肩付近)は直線的な平滑面となっていて、砥石として転用された可能性がある。また、顔面とみられる部分には傷が多い。着衣は貫頭衣のような衣服で、腹前で帯を蝶結びにし、体軀の左右に大きな袖を表す。右腕側は前方に張り出し気味に表現されている。中空となる裏面は雑なナデ面である。遺跡中央部北半(8)4-2トレンチから出土した。左から4番目は、分割成形された人物坐像の半面で、頭部・頸部から上半身の左肩周辺部を欠損するが、両手で亀を抱きかかえている様子が表されている。現存高3.9cm、左右3.5cm、前後2.4cm、出土した4点の土人形の中で、最も精良な胎土で、中空の内面のナデも丁寧である。遺跡中央部南半E18-59区から出土した。

上記のほか、在地産(江戸近郊か 18~19世紀)の土製植木鉢・瓦質植木鉢が、遺跡中央部SM001から各1点出土しているほか、破片(土製44点、瓦質7点)が遺跡中央部から出土している。

第3節 埴輪 (第26図～第28図1～26、第6表、図版10)

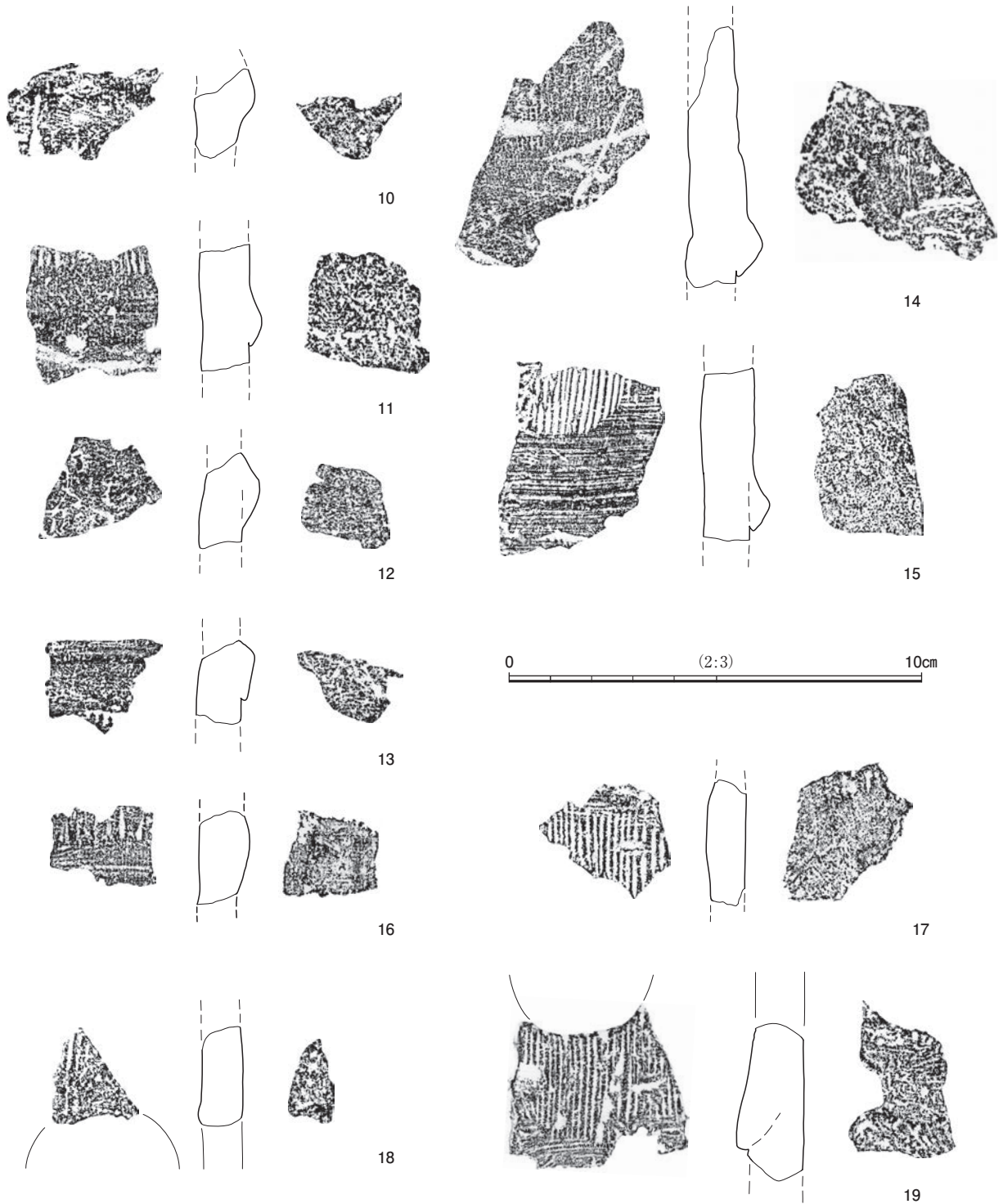
埴輪はごく小さな破片を含め計36点出土した。形象埴輪と円筒埴輪の存在を確認できる。比較的大きな26点を図示したが、円筒の径や総高など、原形を復元できる資料はない。個々の破片の調整・胎土については出土地点とあわせて観察表中に掲げたが、概観すると、外面調整はタテハケ1次調整のみ施されており、断面が三角形状を呈する低いタガをもつという特徴を示すことができる。なお、ハケメの密度には、7～8本/2cm・10～12本/2cm・16本/2cmの3種がある。

1は、人物埴輪の腕である。現存長5.1cm、復元される最大径は3.1cmで、強く湾曲する。一端は肩部への接合部で、被覆した肩部粘土の剥離痕がある。2は、断面形状から形象埴輪に貼りつけられた装飾的要素



第26図 埴輪 (1)

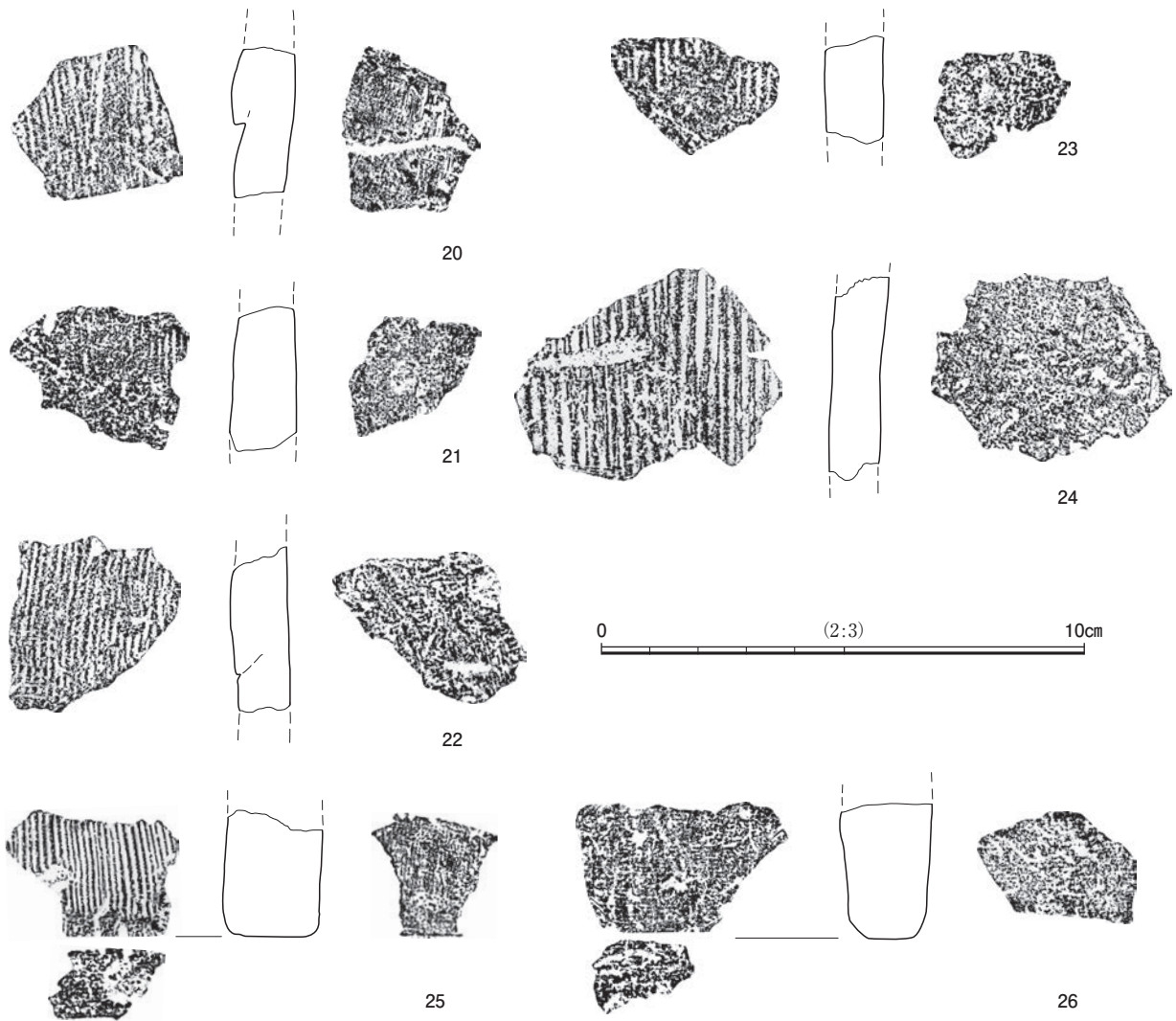
素の一部と考えられる。3～9は、断面形状と表面調整の特徴、および曲面とみるには不自然な要素があることから形象埴輪の可能性を考えることができる資料である。10～26は、円筒埴輪である。10～15は外面をタテハケ調整した体部に、低い突帯がヨコナデで貼りつけられている。18と19には円形透かし孔の一部がある。25・26は底部である。



第27図 埴輪 (2)

第6表 埴輪観察表

挿図番号 a~cは 図版10内 掲載資料	種別 部位	器壁厚 cm	調整痕等		胎 土	色 調		調査次	出土地点	遺物 番号
			外面(ハケ密度は概数)	内面		外面	内面			
1	形象埴輪	—	ナデ	—	酸化鉄粒(やや多)、 黑色粒、細砂粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(9)	E18-99	4
2	形象埴輪	1.7	ハケ 推定8本/2cm	ナデ	黑色粒(やや多)、 細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(5)	E19-37	2
3	形象埴輪か	1.2~ 1.6	丁寧なナデ	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(5)	E19-28	6
4	形象埴輪か	0.9~ 1.1	ハケ 推定10本/2cm	ナデ (指頭痕)	黑色粒(やや多)、 細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(9)	E18-78	2
5	形象埴輪か 人物か、馬形か	1.3	ナデ	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(5)	SD013	1
6	形象埴輪 家形か、器材か	1.0	ハケ ハケと同方 向のナデ 推定10本/2cm	ハケ	細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(4)	6トレンチ	1
a	形象埴輪か	1.5	ナデ	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(1)	2トレンチ	1
d	形象埴輪か	1.2	ナデ	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(5)	SM001	1
7	形象埴輪か 円筒埴輪か	1.3	ハケ 推定12本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	(4)	6トレンチ	2
8	形象埴輪か 円筒埴輪か	1.0	ハケ 推定10本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	(5)	E19-29	5
9	形象埴輪か 円筒埴輪か	1.3	ハケ 推定12本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(3)	9トレンチ	1
10	円筒埴輪 胴部 突帯	1.0~ 1.6	ナデ	ナデ	酸化鉄粒(やや多)、 黑色粒、細砂粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(9)	E18-98	2
11	円筒埴輪 胴部 突帯	1.2~ 1.5	タテハケ 推定10本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	(5)	E19-28	13
12	円筒埴輪 胴部 突帯	1.1~ 1.5	タテハケ 推定10本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	(4)	6トレンチ	1
13	円筒埴輪 胴部 突帯	1.1~ 1.4	タテハケ 推定10本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(3)	12トレンチ	2
14	円筒埴輪 胴部 突帯	1.2~ 1.8	タテハケ 推定12本/2cm	ナデ 輪積痕	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(4)	1トレンチ	1
15	円筒埴輪 胴部 突帯	1.2~ 1.6	タテハケ 13本/2cm	ナデ (指頭痕)	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	(5)	E19-27	5
16	円筒埴輪 胴部	1.3	タテハケ 推定8本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(8)	SK023	1
17	円筒埴輪 胴部	1.3	タテハケ 12本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	にぶい橙 (5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	(9)	E18-88	2
18	円筒埴輪 胴部 円形透孔	1.1	タテハケ 推定10本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(5)	E19-29	1
19	円筒埴輪 胴部 円形透孔	1.1~ 1.7	タテハケ 16本/2cm	ナデ 輪積痕	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	(4)	6トレンチ	1
20	円筒埴輪 胴部	1.3	タテハケ 12本/2cm	ナデ 輪積痕	細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(1)	SM001	1
21	円筒埴輪 胴部	1.4	タテハケ 推定12本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(8)	SD022	2
22	円筒埴輪 胴部	1.2	ハケ 11本/2cm	ナデ (指頭痕)	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	(5)	E19-38	1
23	円筒埴輪 胴部	1.3	タテハケ 推定10本/2cm	ナデ	黑色粒(やや多)、 細砂粒、酸化鉄粒	橙 (5YR6/6)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	(5)	E19-28	12
24	円筒埴輪 胴部	1.0	タテハケ 8本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	(9)	E18-98	1
b	円筒埴輪 胴部か	1.1	タテハケか 復元7~8本	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒、 黑色粒	橙 (5YR6/6)	橙(5YR6/6)	(5)	C区	1
c	円筒埴輪 胴部か	1.0	タテハケか 復元7~8本	ナデ	砂粒、酸化鉄粒	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	(1)	SK011	1
25	円筒埴輪か 底部	2.1	タテハケ 16本/2cm	ナデ	細砂粒、酸化鉄粒・ 小塊、黑色粒	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	(1)	SM001	2
26	円筒埴輪か 底部	1.8	ナデ	ナデ (指頭痕)	砂粒(多)、酸化鉄 粒	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (5YR6/6)	(3)	11トレンチ	1



第28図 埴輪（3）

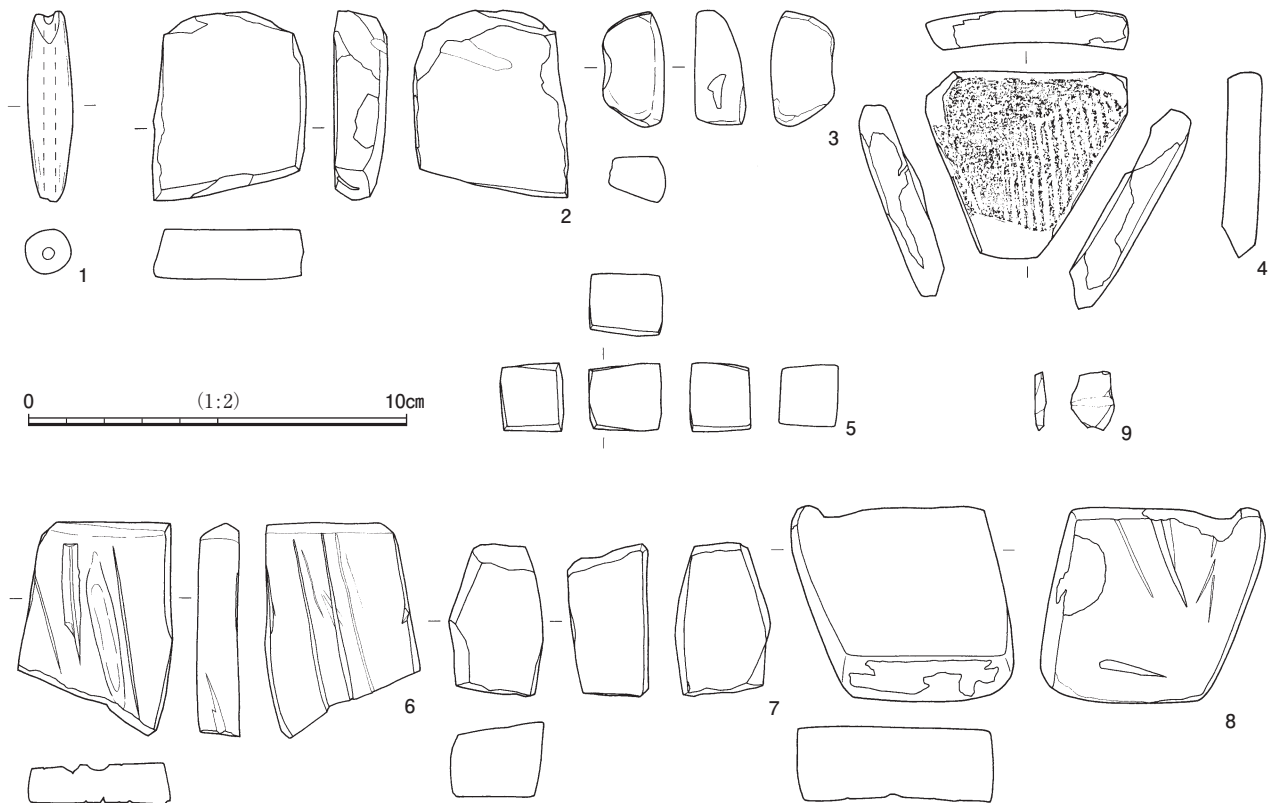
第4節 土製品・石製品

1 土製品（第29図1～4、図版11）

1は、管状の土錘である。長さ5.1cm、最大径1.2cm、細長い形につくられた両端部分はややすぼまり、径0.3cmの円孔が貫通する。細砂粒を含むきめ細かな胎土表面の色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）で、表面は平滑に仕上げられている。遺跡中央部南半（5）C区から出土した。

2・3は、瓦碇である。2は縦5.0cm、横4.0cm、厚1.4cm、灰白色（2.5Y7/2）を呈し、緩やかな湾曲をもつ凸面と凹面、および側面の2か所、計4面を用いている。現存重量は30.11g、遺跡中央部北半北方区域（1）1トレンチから出土した。3は縦3.1cm、横1.6cm、厚0.5cm～1.3cm、灰白色（2.5Y7/2）を呈する使用面は3面ある。三角形に近い断面形状を呈するほどに摩耗した部位もある。現存重量5.46g、遺跡中央部北半北方区域SD013内の小ピットから出土した。

4は、陶器転用砥石である。縦4.9cm、横5.0cm、厚0.9cm、三角形状を呈するもので、側面三か所と内面周縁の一か所を使用している。表面色調がにぶい橙色（7.5YR6/4）の瀬戸美濃（近世）の播鉢片を用い、



第29図 土製品・石製品

砥面と破損面は、にぶい黄橙色（10YR7/4）である。現存重量30.82g、遺跡中央部北半北方区域（5）1トレンチから出土した。

2 石製品・軽石（第29図5～9、図版11）

6は、灰白色（2.5Y8/2）の砥石である。縦5.6cm、横3.9cm、厚1.1cm、破損面1面を除きすべて研磨面で、小口面は面取状を呈している。きめ細かな仕上げ用と考えられる表裏両面に、刃の当たりが多数残されている。幅5mmの丸鑿の刃跡のような浅い溝状を呈する当たりもある。遺跡南部南端（4）クラム3柱状図深度①から出土した。

8は、ややきめが粗い灰白色（7.5Y7/1）の砥石である。縦4.8cm、横5.2cm、厚3.2cm～1.6cmで、最も薄い小口部には、破損面と研磨面がある。大型品が使い込まれて薄くなった部位で破損し、破損面を細部の加工に再利用したことがわかる。遺跡中央部南半（1）17トレンチから出土した。

5と7は、粒度が上記6と8の中間の様相を呈する砥石である。形状は異なるものの、石の質感とにぶい黄橙色（10YR7/3）の色調に共通性があり、5・7とも表面に鉄錆様の褐色（7.5YR5/4）の汚れが付着している。5は縦1.7×横1.8×厚1.9cmと立方体に近い形で、やや凸面気味の各研磨面の境界は稜が立っている。中央部中位西部（1）9トレンチから出土した。7は縦3.9cm、横2.5cm、厚2.1cm、両端と側面の一部を破損しているうえ、被熱し表面がやや荒れている。遺跡中央部北半南方区域SD020から出土した。

9は、縦1.5cm、横1.1cm、厚0.3cm、現存重量0.75g、暗灰色（N3/0）の板状石製品である。輪郭に意図した形状を見出すのは難しいが、剥離したとみられる表面は平滑ではないがすべすべしており、石製

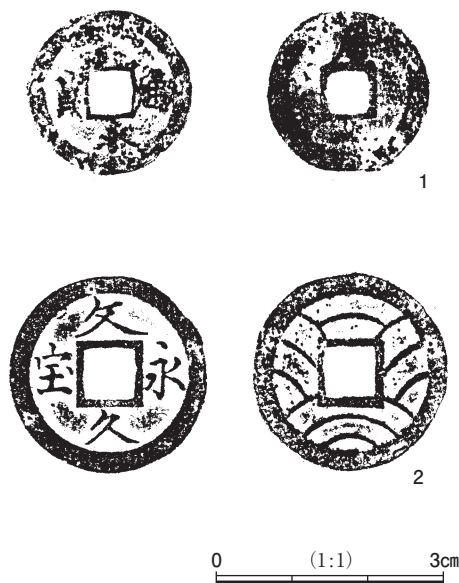
模造品の破片の可能性はある。遺跡南部北半E19-93区黄色砂層上面から出土した。図版11 aは、緑灰色(10GY6/1)を呈する片岩である。縦8.2cm、横4.6cm、厚1.4cmで、1mm角～2mm角の白色粒を非常に多く含んでいるため、ざらざらした質感をもっている。中央区北半東方区域SD027から出土した。

なお、製品としての加工痕は明瞭でないが、にぶい黄橙色(10YR7/3)の軽石が、遺物箱で1箱分出土した点に注意される。総重量3.6kgの97%以上にあたる3.5kgは、遺跡南部深掘り部分から出土した。(4)9トレンチ南端⑤層(オリーブ褐色砂上部)から561g、(4)10トレンチ北端②層(オリーブ黄色砂)から1,547g、③層(オリーブ色砂)から1,280g、④層(オリーブ色下部～暗オリーブ色砂上部)から163g出土しており、砂州の南辺側に集中する状況をもてとれる(第7図)。なお、遺跡南部(12)11トレンチ砂層内から出土した1点(17.16g)には一部に擦ったような面がある(図版11)。また、(12)6トレンチ内近世溝出土2点(1.00g、1.65g)には摩耗が顕著な面がある。

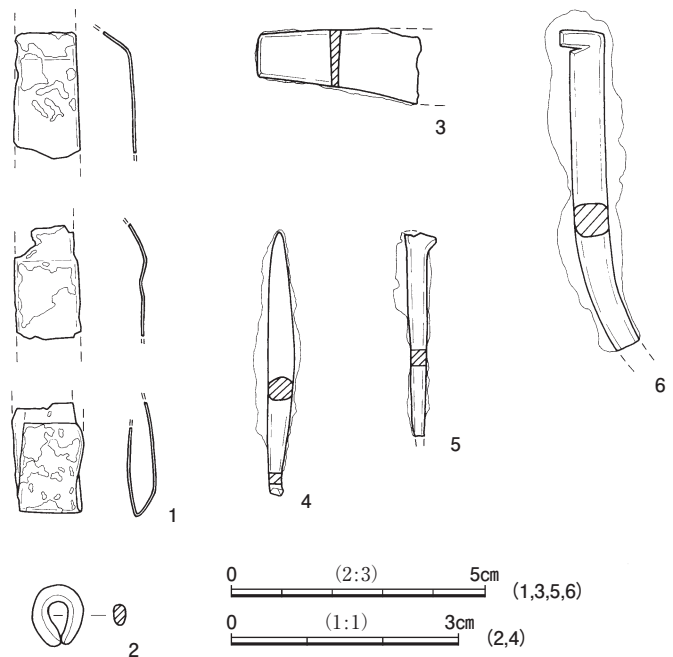
第5節 銭貨・金属製品

1 銭貨(第30図1・2、第7表、図版11)

1・2は銅銭である。1は寛永通寶で、裏面に「元」とみられる文字があるが不明瞭である。2は文久永宝で、裏面に青海波がある。図版11-3・4は鉄銭2枚銹着資料で、2枚とも銹化により銭文は読めない



第30図 銭貨



第31図 金属製品

第7表 銭貨計測表

番号	種類	計測値							備考	調査次出土地点	
		重量(g)	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内郭外径(mm)	内郭内径(mm)	外縁厚(mm)	文字面厚(mm)			
1	銅銭 寛永通寶	1.82	22.1	16.8	7.4	5.5	1.3	0.8	裏面「元」カ	(5) C区	中央部南半
2	銅銭 文久永宝	3.40	26.7	21.5	9.2	6.7	1.1	0.6	裏面青海波文	(9) E18-78	中央部南半
3	鉄銭(銭種不明) 破片	0.83	—	—	—	—	—	—	約1/4遺存	(1) 1トレンチ	中央部北半
	鉄銭(銭種不明)	3.97	25	—	—	—	—	—	銹化進む		
4	銅銭(銭種不明)	5.97	22.6	16.7	8.7	6.3	—	—	鉄銭銹着	(5) SD013	中央部北半
	鉄銭(銭種不明)	—	25	—	—	—	—	—	銹化進む。銅銭銹着		

い。1枚は遺存度四分の一ほどの破片である。5・6は鉄銭と銅銭各1枚の銹着資料であるが、ともに銭文は読めない。

2 金属製品（第31図1～6、図版11）

1・2は銅製品である。1は、接合しないが同一個体と判断できる帯状品3片で、幅1.3cm、厚0.7mm、現存重量3.02gである。潰れたように折れ曲がった破片があることから、元来は環状に近い形状であったと推測される。遺跡中央部南半E18-99区から出土した。2は、幅2.5mm、厚1.5mmのやや扁平な銅線を曲げたもので、長径8.0mm、短径6.5mm、現存重量は0.2gである。銅線の両端は接しているが、やや捩じれ気味で小口は密着していない。遺跡中央部北半SI003から出土した。

3～6は鉄製品である。3は、長さ3.2cm、最大厚0.2cm、幅0.9cm～1.5cm、現存重量4.3g、断面形の特徴から刀子の茎と考えられる。4は、長さ3.5cm、最大径0.3cm、現存重量1.15g、一端を尖らせ、もう一端をすぼませて茎状に整えた工具である。5は、長さ4.0cm、現存重量2.07g、断面方形の釘で、頭部側は幅広につくられているが、折り返しはなく、面としての頭部の有無は不明確ながらほぼ完形の小型品である。6は、長さ6.4cm、現存重量11.7g、折り返された頭部をもつ釘である。断面は方形で、幅・厚みはともに6mmである。木材などに打ち込まれた釘を引き抜いた際に生じたような湾曲があるほか、尖端側を欠損している。3～5は遺跡中央部（1）13トレンチから、6は遺跡中央部東端（9）次調査区内から出土した。

第6節 木製品・貝製品・貝類

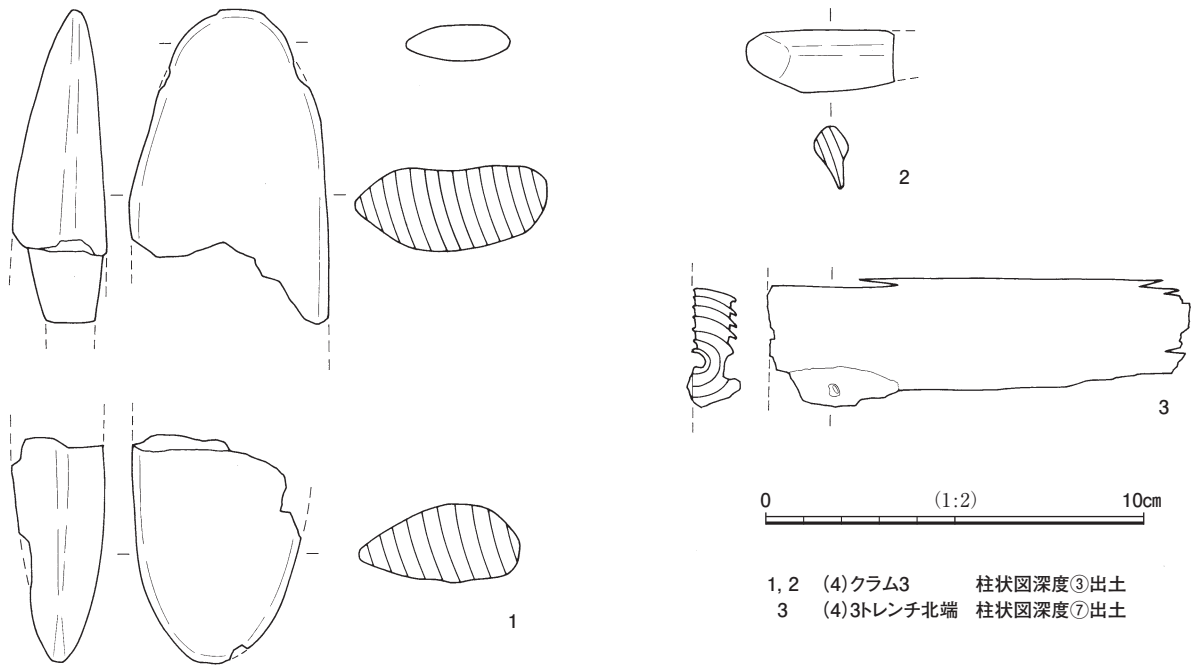
1 木製品（第32図1～3、図版11）

1は、割材加工品である。一部が破損した2片があるが、木取りや加工の特徴に共通性があること、破損面が古いことから、元来一個体であったと考えることができる。2片とも楕円形のような輪郭に整え、端部が薄くなるよう割材を削り出している。大きい破片は、長さ8.3cm、幅5.2cm、最大厚2.2cm、小さい破片は、長さ6.0cm、幅4.4cm、最大厚2.2cmである。木質は脆弱化しているが、加工は丁寧であり、本来は平滑な表面に仕上げられていた道具の類と推測される。1および下記2は、遺跡南部（4）クラム3（第9・10図 柱状図深度③ 黒色砂質土下部～黒色泥上部）から出土したもので、中世に帰属する遺物と捉えられる。

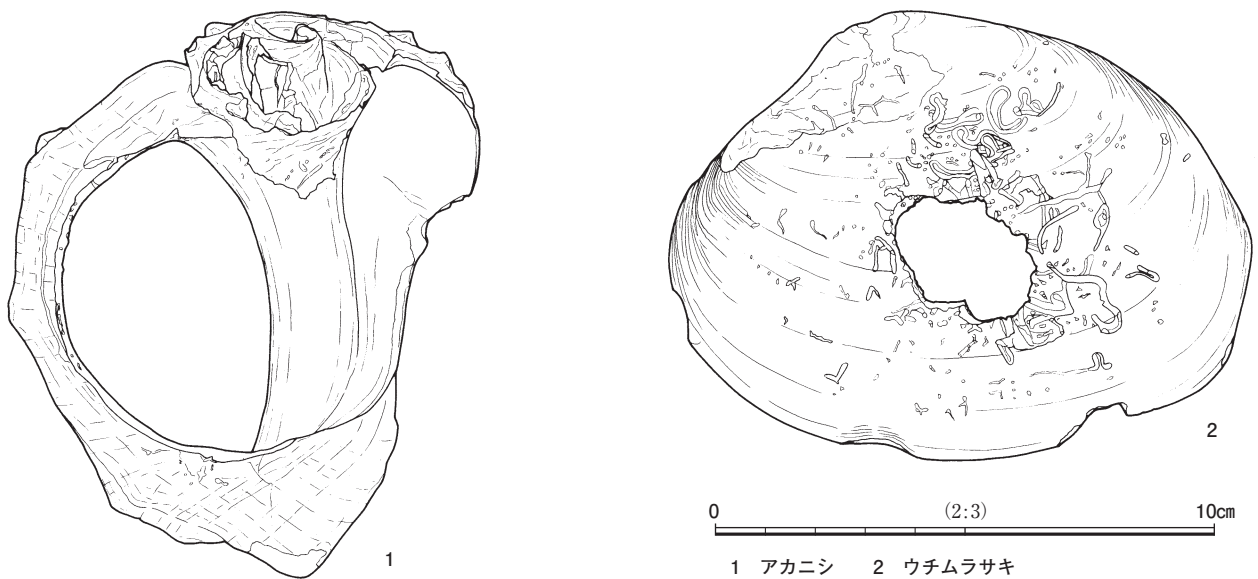
2は、割材加工品で、切先状に削り出した部位がある。現存長3.8cm、最大幅1.6cm、最大厚0.9cmである。

3は、割材加工品である。摩耗が著しく表面は荒れているが、半裁した丸木の木口面に切断痕を明確に残す。厚み方向の遺存状態から、板状に加工されたものとみられる。現存長11.2cm、最大幅3.1cm、最大厚2.0cmである。一部に鉄銹が付着したような褐色部分があるが、埋没環境に由来する染みとみる余地がある。遺跡南部（4）3トレンチ北端（第8図 柱状図深度⑦ 青灰色砂下部）から出土した。

なお、同じ層から動物食痕のあるクルミ核1点（長さ29.6mm、幅19mm以上、厚19.8mm、図版11）が出土している。



第32図 木製品



第33図 貝製品

2 貝製品（第33図1・2、図版12）

貝輪未製品（第33図1）と穿孔品の可能性がある遺物（第33図2）各1点が、遺跡南部（4）クラム1（第7図）深掘り地点、青灰色砂中から出土した。

1は、アカニシで、現存殻長115mm、一部に虫食い痕（捕食痕）がある。縁辺部は風化・水磨が著しく、また欠損部もあるため、研磨等の有無は判然としないが、貝輪未製品の可能性がある。欠損した螺塔部分にマガキの稚貝が付着していることから、廃棄された後に一時的に潮間帯に没していたものと推測される。虫食い痕についても廃棄後の環境下で生じた可能性が高い。

2は、ウチムラサキ左殻を用いたもので、殻長116mm、殻高90mm、研磨等の有無は判然としないが、剥

離痕の状態は明らかに古いことから、意図的に穿孔された貝製品の可能性がある。穿孔部は長軸30mm、短軸22mmの楕円状で、正位置に対して斜方向に穿たれている。水磨痕と虫食い痕（捕食痕）が著しいことから、海岸部で死貝を持ち込んで加工した可能性、あるいは加工された後に廃棄され水磨痕等が付加された可能性が考えられる。

3 貝類（第8表、図版12）

本稿で報告する貝サンプルは、遺跡南部（4）次調査区（第7図）から採取した資料である。採取資料のうち、4mm以上のメッシュから検出したものを対象として、当財団所有の貝類標本をもとに同定を行った。巻貝類は殻口部下端の付いた殻軸をもって1個体とし、二枚貝類は殻頂部を左右別に同定・集計した上で多い方を最少個体数とした。計測に関しては時間の制約上、今回は省略した。

採取地点とともに掲げた○囲み数字は、地点別土層柱状図（第8図～第10図）の右に添えた掘削単位を示すもので、対応する土層の特徴とおよその深度を知ることができる。貝サンプル中から縄文時代中期前半の阿玉台式土器片1点を検出したが、流れ込みなど後世の混入の可能性も考えられるため、貝サンプル自体の年代は現状では不明である。

貝種組成に関して、種まで特定できたものは13科22種（ただし「ウミニナ科」を含む）である。この他、4mmメッシュ上で複数種の稚貝を多数検出したが、今回は同定に至らなかった。なお、サンプル間の組成の違いも顕著であったが、これは、サンプル中の貝の含有量（混貝率）の差によるものと思われる。混貝率に関しては、水洗前の計量値が不明であるため、本稿では考慮していない。

主要種についてみると、まず、サンプル数の少ないクラム3（第9・10図 柱状図深度⑨）を除くすべてのサンプルで、イボキサゴが主体を占めていることを確認した。その他の主要種は、ハマグリやカガミガイ、オキアサリ、オキシジミ、アカニシ等、おおむね砂質～砂泥質の潮間帯付近に生息する貝種から成る。主要種以外では、クラム1にまとまった数のイタボガキとイワガキ1点があるほか、クラム4（第8・10図柱状図深度⑧）にイタボガキ1点がある。両種は湾口部砂礫底群集に位置付けられるものであり、主要種とは生息環境を異にする。

また、クラム2（第9図 柱状図深度⑧）にツノガイ、クラム2（第9図 柱状図深度⑨）にヤカドツノガイがある。両種は潮間帯下部～水深約500m（ヤカドツノガイは水深約100m）までの細砂底に生息するものであり、明らかに主要種の生息環境と乖離している。

各サンプルについて、遺存状態やサイズという視点から観察すると、主体となるイボキサゴおよび稚貝と、その他の貝種の遺存状態には、明らかな違いが認められた。クラム1のサンプルを例に挙げ、その様相を簡単に記す。

ハマグリやカガミガイ、アカニシ、イタボガキ等の貝殻は、水磨や虫食痕が顕著でチョーク化しているものが多数を占める。ハマグリは、大型個体（殻長50mm～90mm前後に集中）が多く、若年貝をほとんど含まない。上記の傾向は、カガミガイやアカニシ、イタボガキについても同様に認められる。

一方、主要種のなかでも主体となっているイボキサゴの殻径サイズは、10mm以下の小型個体に集中する。また、複数種が含まれる稚貝の遺存状態は、極めて良好である。

以上のように、遺跡南部（4）次調査区において、市川砂州の南側末端部にあたる標高0m付近の青灰色砂層中から採取された貝サンプルは、砂質～砂泥質の潮間帯付近に生息する貝種を中心に構成されてい

第8表 貝類個体数集計表

試料採取地点 柱状図深度	クラム1 (青灰砂層)	クラム2 柱状図深度⑧	クラム2 柱状図深度⑨	クラム3 柱状図深度⑨	クラム4 柱状図深度⑧	(4)3トレンチ北端 柱状図深度⑦	合計
イボキサゴ	341	8	21		20	78	468
ウミナナ科	18	1	6				25
ツメタガイ	8	2	3			2	15
アカニシ	8		1	1	3		13
バイ	0	4	7				11
アラムシロガイ	0						0
ツノガイ	0	1					1
ヤカドツノガイ	0		1				1
ハイガイ	2						2
サルボオ	2						2
マガキ	6	1	3	2			12
イタボガキ	11				1		13
イワガキ	1						1
シオフキ	0		4				4
バカガイ	2	1	1				4
イチョウシラトリ	2						2
フジナミガイ	2						2
マテガイ	3		1				4
カガミガイ	8			3	7		18
オキアサリ	10				3	6	19
ハマグリ	31	1	1	1	3	6	43
オキシジミ	0		2			1	3
ウチムラサキ	1						1
合計	456	19	51	7	37	93	663

ることが明らかとなった。これらの貝種は、市川砂州の下部、標高にして約1 m～-3 mの砂層中に包含される市川貝層の構成種と極めて近似しているが、別の海域とか化石層から人為的に持ち運ばれたと考えざるを得ないツノガイ科などが含まれている点にも注意を払う必要がある。また、遺存状態とサイズ構成を考慮すると、本サンプル中の貝種すべてが自然貝層に由来するのか、あるいは、縄文海進海退の影響によって、他所から移入してきた廃棄貝層の一部が混在している可能性がないのか、詳細な検討をおこなう必要がある。

第4章 まとめ

平田遺跡は、東京湾の北辺に形成された市川砂州上に立地する。調査地周辺の標高は4 m前後である。発掘調査は、東西に発達した砂州を横断するように、東西80m～100m、南北500mの範囲を対象として実施した。

その結果、砂州頂部付近にあたる千葉街道の北側の区域、南北約120mの範囲において、古墳時代後期と平安時代の遺構を検出した（第34図・第35図）。また、砂州上の広範囲から、埴輪や古代の土器類のほか、縄文土器・弥生土器・古墳時代前期の土器・中近世陶磁器類が出土した。なお、遺跡中央部北半北方区域や遺跡南部において、溝群や土坑が検出されたが、これらの多くは、土層の堆積状況、および包含層中の陶磁器類の年代等を検討した結果、近世後半、18世紀以降に帰属するものと判明した。古墳時代以前の集落跡や中世の遺構は検出されなかったが、多様な出土遺物は、砂州上における土地利用の変遷の一端を示す貴重な資料である。

時期的に最も遡る明確な遺構は、古墳の周溝である。中央部北半において1基みつかった（SM001）。墳丘や埋葬施設は全く残っておらず、円墳とみた場合約2分の1周分に相当する周溝が弧状に検出されたのみであるが、円墳とみて復元した場合の規模は、周溝外径20m、墳丘径12.5mである。副葬品はみつからないが、周溝覆土内遺物中に、埴輪の小片3点があった。市川砂州上では、これまでに埴輪の出土が知られている地点が2か所あり、古墳の存在が推測されていたが、今回の平田遺跡の発掘調査で、砂州上に造営された古墳の具体的様相を初めて確認することができた。

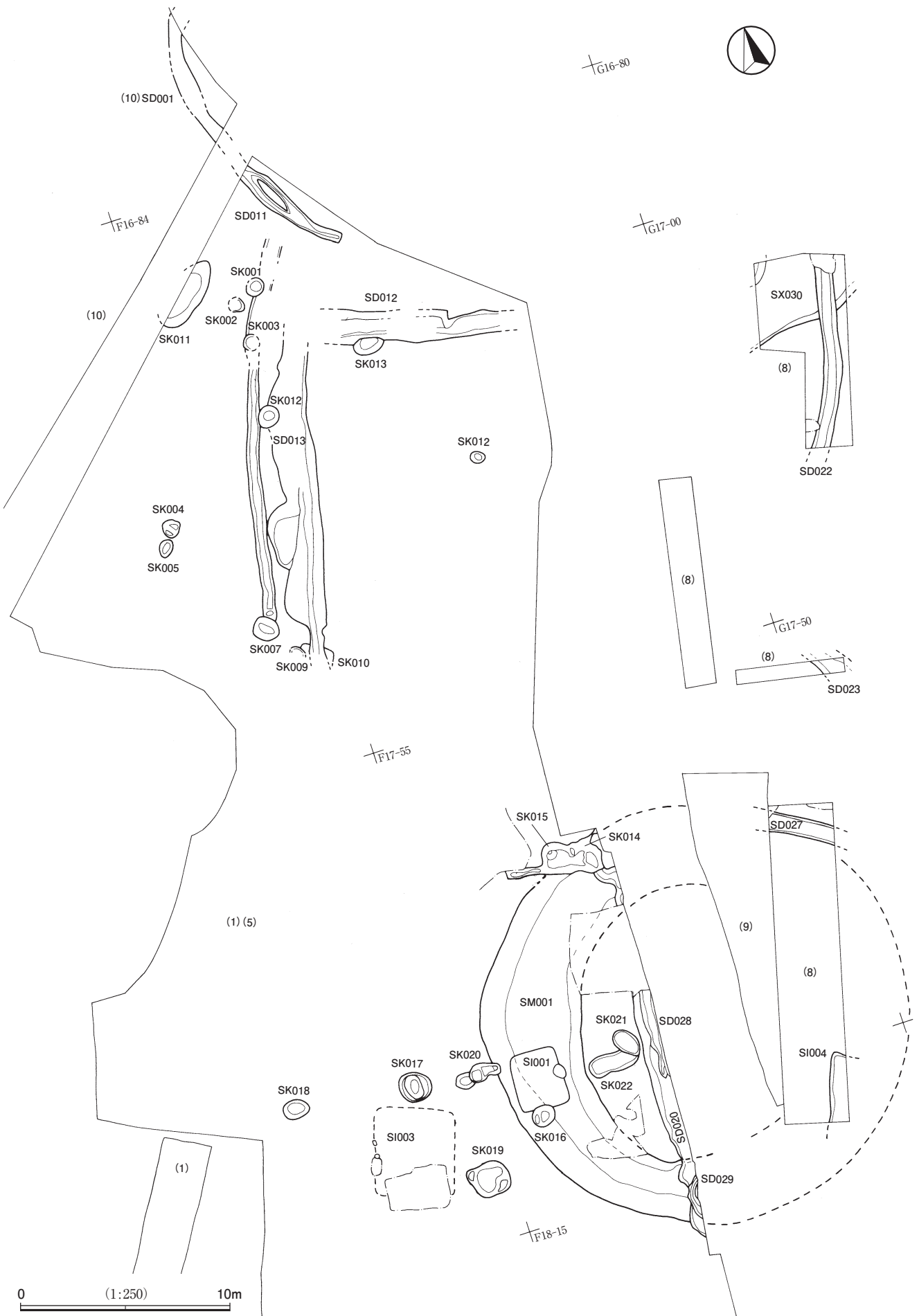
埴輪は、SM001周溝内以外からも出土した。比較的SM001に近い遺跡中央部北半区域の遺物包含層中から6点、遺跡中央部南半の平安時代の遺構分布区域から人物埴輪の腕を含む22点、遺跡南部南半（4）1トレンチ・（4）6トレンチから5点が出土した。埴輪の分布が、古墳の周溝を検出した遺跡中央部北半区域のみならず、遺跡中央部から南部にかけての広範囲に広がっていることが注目される。

平田遺跡から出土した計36点の埴輪は全て小破片であり、古墳に樹立した状況を留めるものはない。また、原形や大きさを復元できる資料もない。しかしながら、平田遺跡から出土した埴輪全体を見通したとき、タテハケ1次調整で低突帯という特徴をもつ円筒埴輪の存在を提示できることから、これらの年代について、古墳時代後期の所産であると位置づけることができる。

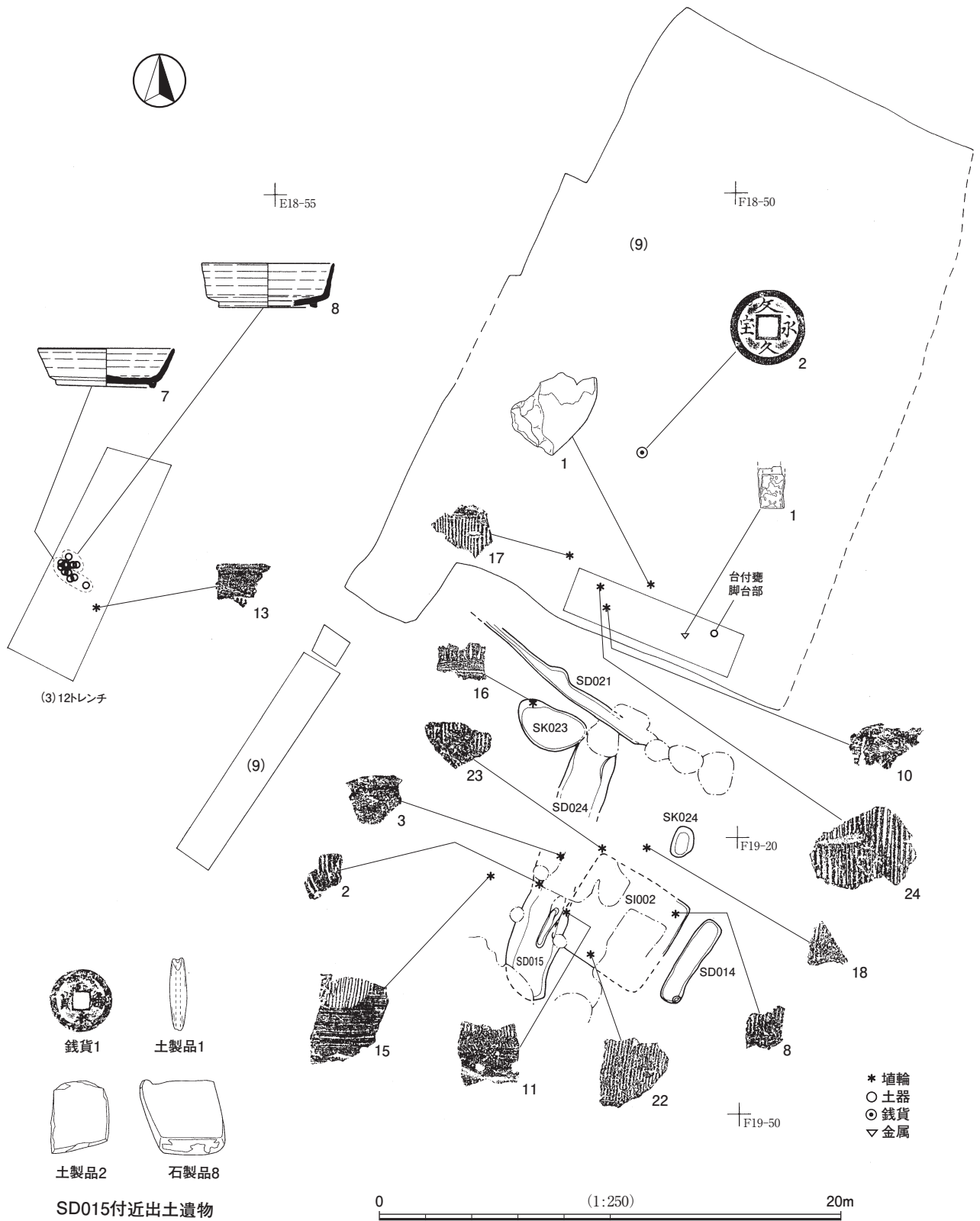
この埴輪の年代は、築造年代を明確に示す副葬品等の遺物を伴わないSM001の年代について、古墳時代後期と推定する根拠となる。なお、遺跡中央部南半の平安時代の遺構分布区域において、埴輪がややまとまって出土した様相（第35図）は、埴輪が断片化した時期を推し量る拠り所となる可能性がある。

先述したように、市川砂州上において、埴輪の出土がかねてより知られている地点が2か所ある（第1図58・60、第3図1・2）。市川砂州の西端に近い真間一丁目（旧字「小砂原」）では、朝顔形埴輪（最大径17.4cm、残存高26cm）が出土し（第4図）、砂州の東方にある東菅野一丁目（旧字「東割」）では、円墳が存在し埴輪が出土したという（山路・山崎2002）。平田遺跡のSM001および埴輪分布範囲は、東西に約1.5 km離れている真間一丁目（旧字「小砂原」）と東菅野一丁目（旧字「東割」）のちょうど中間地点に位置しており、海辺に延びる砂州上の広い範囲に、小型の後期古墳が存在していた可能性を示す資料といえよう。

市川砂州の北方、真間川流域の低地を挟んで対峙する台地上には、古墳時代後期、国府台古墳群が営ま



第34図 遺構の配置 (中央部北半)



第35図 遺構配置と遺物集中地点 (中央部南半)

れた。国府台古墳群で墳丘が現存するのは、法皇塚古墳・明戸古墳・弘法寺古墳・真間山古墳の4基のみであるが、100基以上の円墳を主体とする群集墳が存在していた可能性が示されている（松本2006、曾根ほか2008）。平田遺跡の調査事例は、砂州上にも小規模な墳墓が複数地点に営まれていて、海辺の道沿いの墓域として意識されていた状況を推測させるものである。わずか一例とはいえ、真間川流域の古墳群の広がりを示すSM001と埴輪は、台地側に営まれた墓域との関連や、相違点を具体的に検討する基礎資料として貴重である。

国府台古墳群の埴輪に関しては、山路直充氏と山崎武氏により基礎資料が整理公刊されているが（山路・山崎2002）、家形埴輪・人物埴輪を含む埴輪を樹立した法皇塚古墳（前方後円墳 全長58m）の埴輪を詳細に検討された山崎武氏は「地元下総地域だけでなく、他地域から埴輪の供給があり、それも武蔵生出塚窯だけでなく、武蔵東部から北部地域及び上野の可能性のあるものまで含まれている」と指摘している（山路・山崎2002 45頁）。古利根川や元荒川が注ぐ東京湾北岸に位置する水運の要衝の地－市川砂州－に立地する平田遺跡から出土した埴輪についても、供給元の探求が今後の課題である。

古代の竪穴住居跡は4軒みつかった。中央部北半南区域において2軒（SI001・SI003）、同東区域で1軒（SI004）、中央部南半で1軒（SI002）検出されたが、いずれも遺存状態は悪く、壁の立ち上がりは不明瞭で、明確に遺物を伴うのはSI003のみであった。SI003からは完形に近い土師器杯2点が出土したが（1点は「人」墨書）、これらは、口径/底径比1.76～1.96、比較的丁寧な作りで口縁がごくわずかに外反する点から、9世紀前半頃の年代を想定できる（松田・松本2001）。他の3軒は時期を明確に示す遺物をもたないが、周辺の包含層から出土した灰釉陶器をはじめとする古代の土器の様相、あるいは遺構の重複状況などから、いずれも平安時代の住居跡と推測できる。なお、SI001がSM001周溝埋土中に検出されたことに示されているように、古代の遺構群は、砂州上の古墳群が墓域として管理されなくなった様相を示すものと理解できる。

今日、東京湾岸の幹線交通路である千葉街道（国道14号線）や鉄道が走る市川砂州は、古代においても、下総国府と上総国府を結ぶ古代東海道の駅路に比定されているが、山路直充氏は、駅路が走る市川砂州上を、下総国府域の南端含める復元図を提示し（山路2010）、また、平田遺跡の西方1.5km、市川砂州西端部に市や「井上」駅の存在を推定している（山路2006）。平田遺跡の発掘調査で道路遺構は検出されなかったが、以上のような立地や先学の研究成果を重んじるならば、平田遺跡の古代の遺構は、駅路の管理に関わる機能をもった国府関連施設であった可能性も想定できる。

以上のように、発掘調査の結果、平田遺跡は、古墳時代後期に海辺の墓域となり、平安時代前半頃に駅路あるいは下総国府との関わりを推測しうる竪穴住居等の建造を伴う活動がなされた場となっていたことが明らかとなった。以後、近世後半までの間は遺構の存在が空白となるが、貿易陶磁を含む中世陶磁器類が出土したことは、発掘調査で遺構が検出されなかった時期においても、立地が示す海沿いの交通路としての機能が継続していたことを想起させる。砂州自体が防潮堤の機能を果たすことを考慮するならば、高潮などの自然災害時に崩壊し、海流の影響下に流失した遺構があった可能性も想定する必要がある。

参考文献

- 市川市史編纂委員会 1971『市川市史』第1巻 市川市
- 小林三郎ほか 1976『法皇塚古墳』市立市川博物館研究調査報告第3冊 市立市川博物館
- 堀越正行ほか 1981『図録法皇塚古墳』市立市川博物館
- 堀越正行 2006「市川の地形のなりたち」『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 松本太郎・松田礼子 2001『千葉県市川市下総国府跡—国府台遺跡緊急確認調査報告書—』市川市教育委員会
- 山路直充 1995『下総国分寺—いま見つめなおす下総の天平文化』市立市川考古博物館図録17 市立市川考古博物館
- 山路直充 2006「手児奈の風景」『図説市川の歴史』市川市教育委員会
- 山路直充 2010「ヤマトタケルの江戸川渡河伝説」『市史研究いちかわ』創刊号 市川市
- 山路直充・山崎 武 2002『市川市出土の埴輪』市立市川考古博物館研究調査報告第8冊 市立市川考古博物館

写 真 图 版



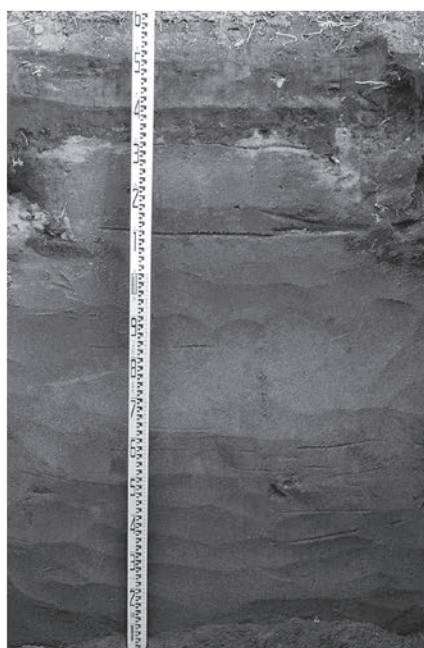
遺跡中央部 調査前風景 北から



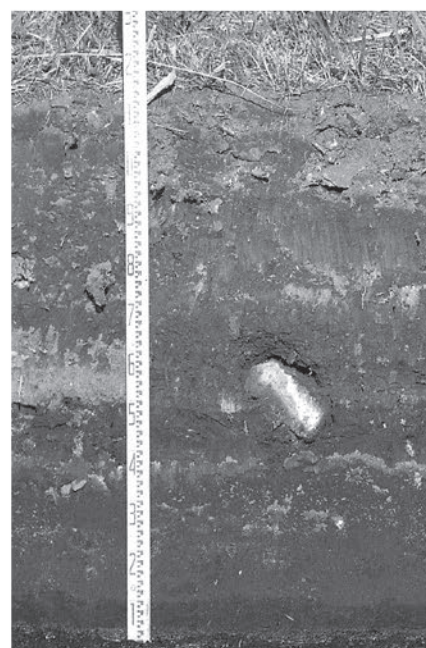
遺跡南部 調査前風景 北から



遺跡北端部の様相
(3) 3トレンチ 南から



遺跡南部の土層
(4) 10トレンチ 南から



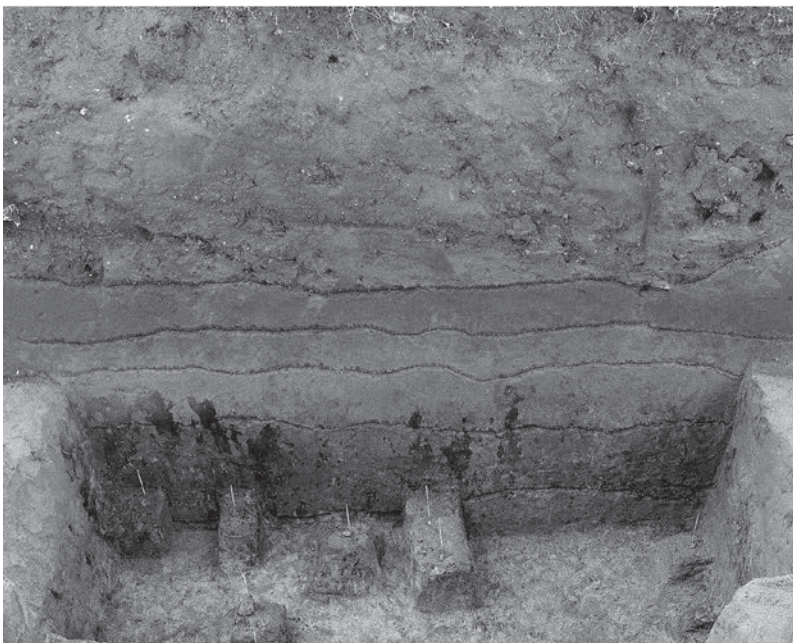
遺跡南部の土層
(4) 2トレンチ 南から



遺跡中央部北半北方区域の土層 (1) 2トレンチ 北西から



遺跡中央部南半西方区域の土層 (1) 9トレンチ 北東から



遺跡中央部南半中央区域の土層と軽石出土状況 (1) 16トレンチ 西部北東から



遺跡中央部南半東方区域の軽石出土状況 (1) 19トレンチ 北から



SM001 南西から



SM001 北西から



SD027 (8) 3トレンチ内検出状況 南から



SI004 (8) 3トレンチ内検出状況 北から



SM001周溝上SI001検出状況 北から



SM001周溝上SI001検出状況 西から



SI001全景 西から



SI003全景 東から



SI003土師器杯出土状況 東から



SI002検出状況 (1) 16トレンチ東部 南から



SI002・SD015・SD026 南西から



遺跡中央部南辺遺物出土状況 (3) 12トレンチ 北から



同左 北西から



遺跡北部の溝 (10) 次調査区 SD001 北から



遺跡北部の土坑 (1) 1トレンチ北部 南西から



遺跡北部の溝 SD013・SD014 南東から



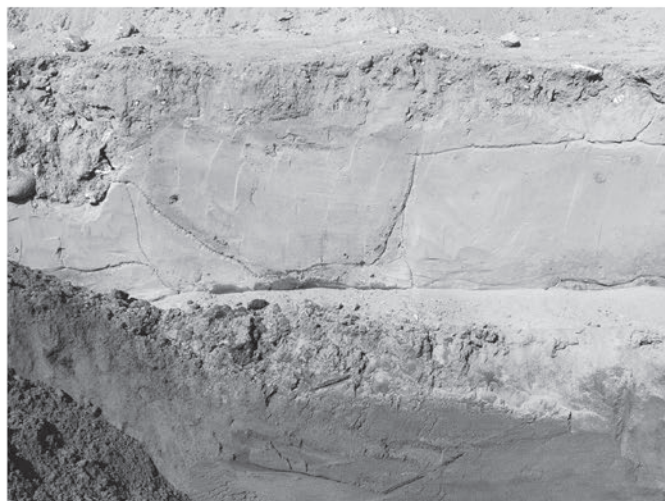
遺跡中央部の溝群 (1) 13トレンチ 北から



遺跡南部 (12) 次調査区全景 北から



遺跡南部の溝群 (12) 11トレンチ 南から



遺跡南部の土層 (12) 4トレンチ 東から



遺跡南部の土坑 (12) 6トレンチ 南から



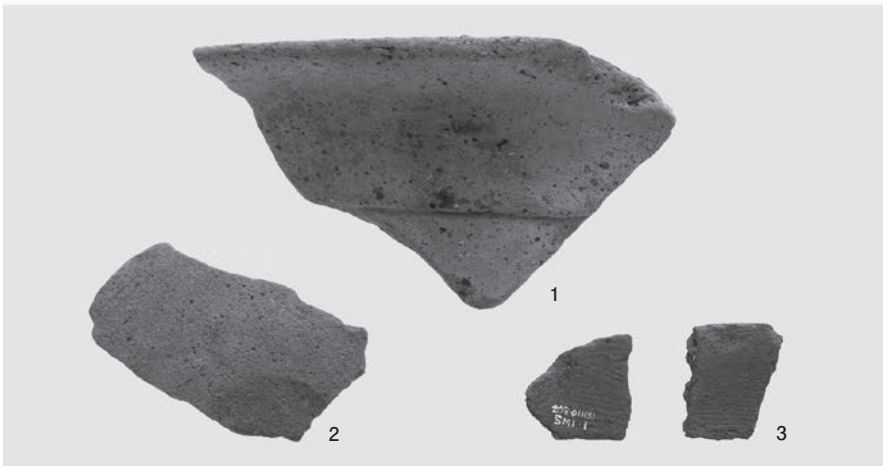
同左 東から



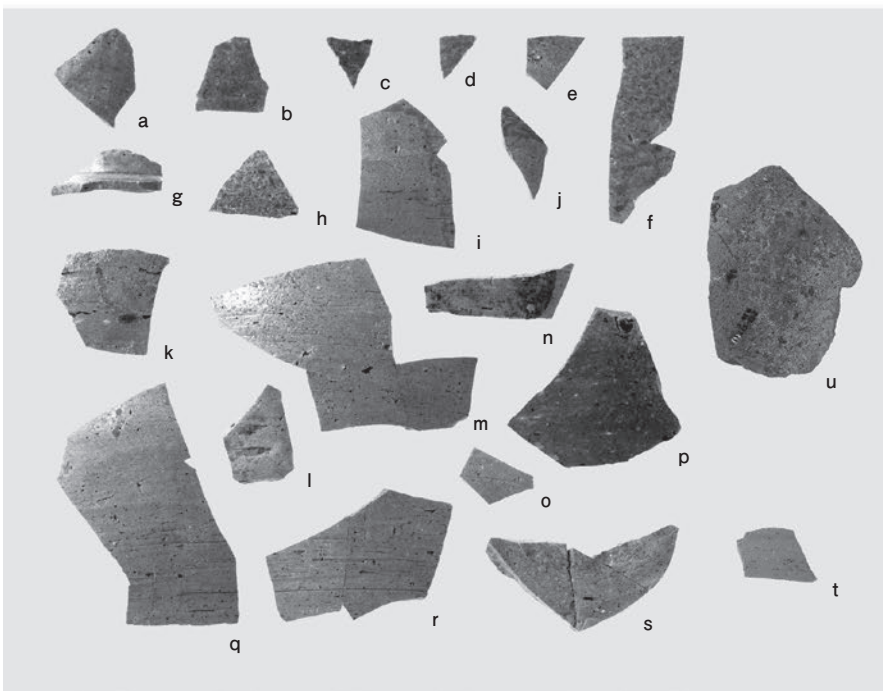
縄文土器



弥生土器

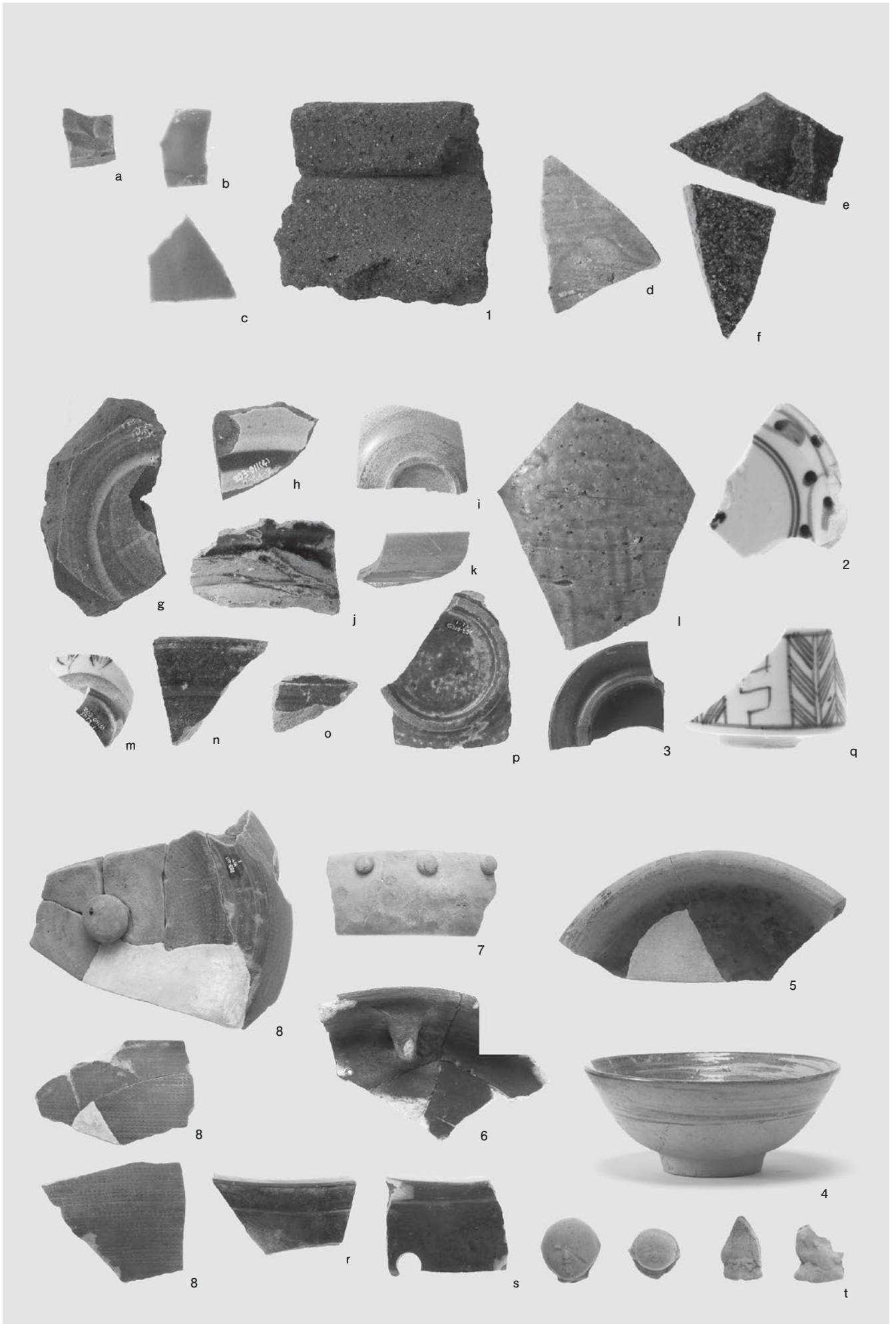


古墳時代の土師器

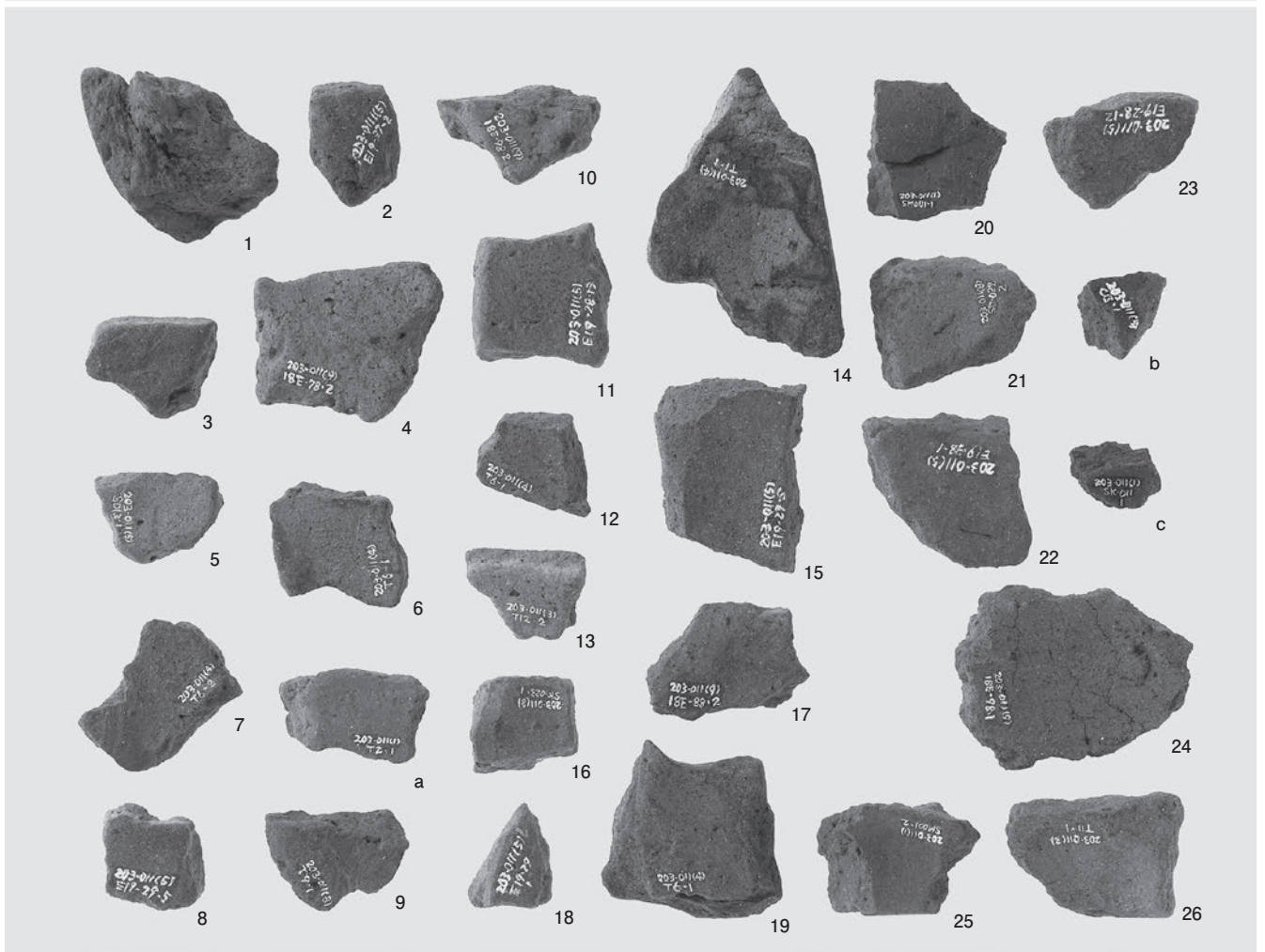
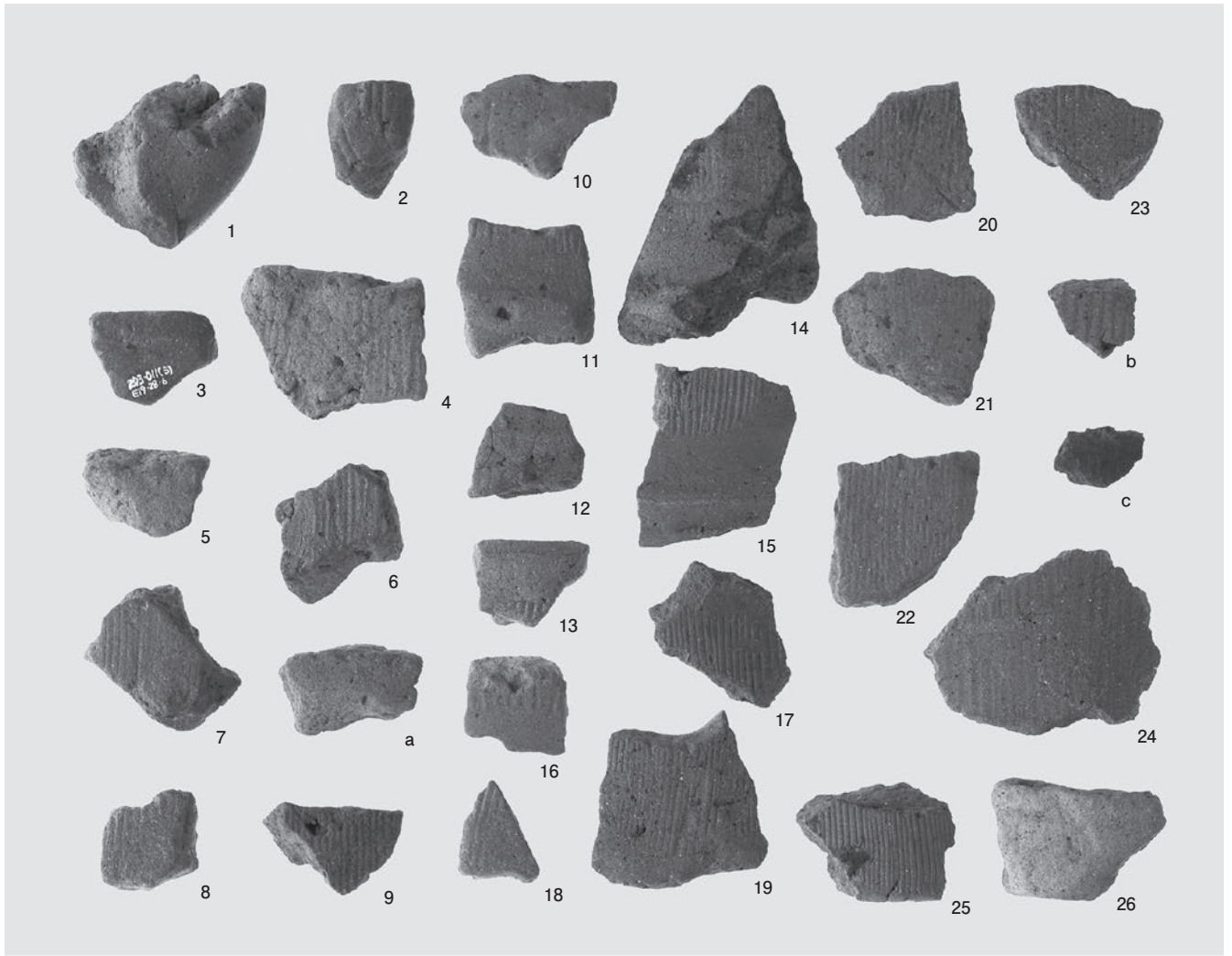


古代の土師器・須恵器・灰釉陶器

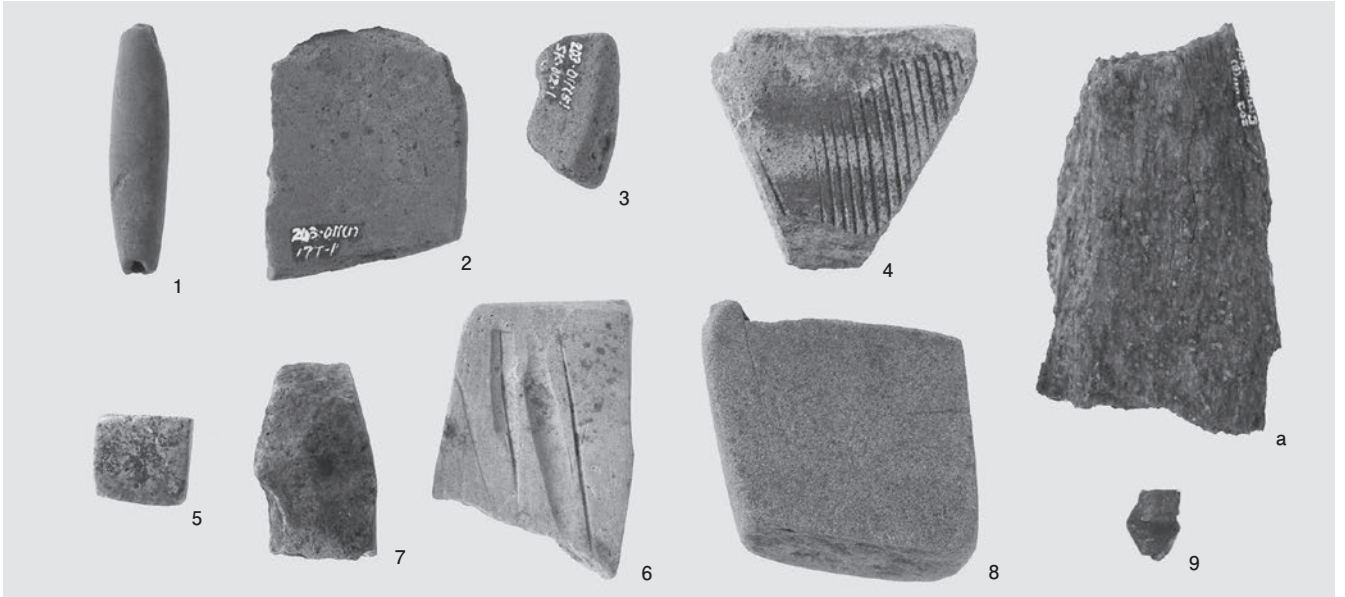




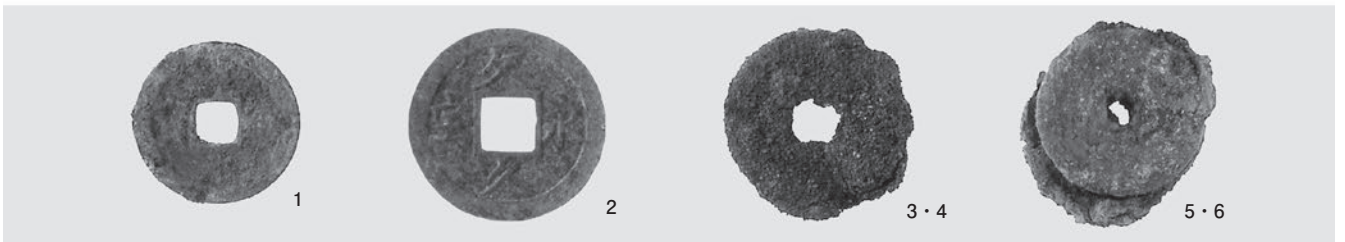
中近世陶磁器類



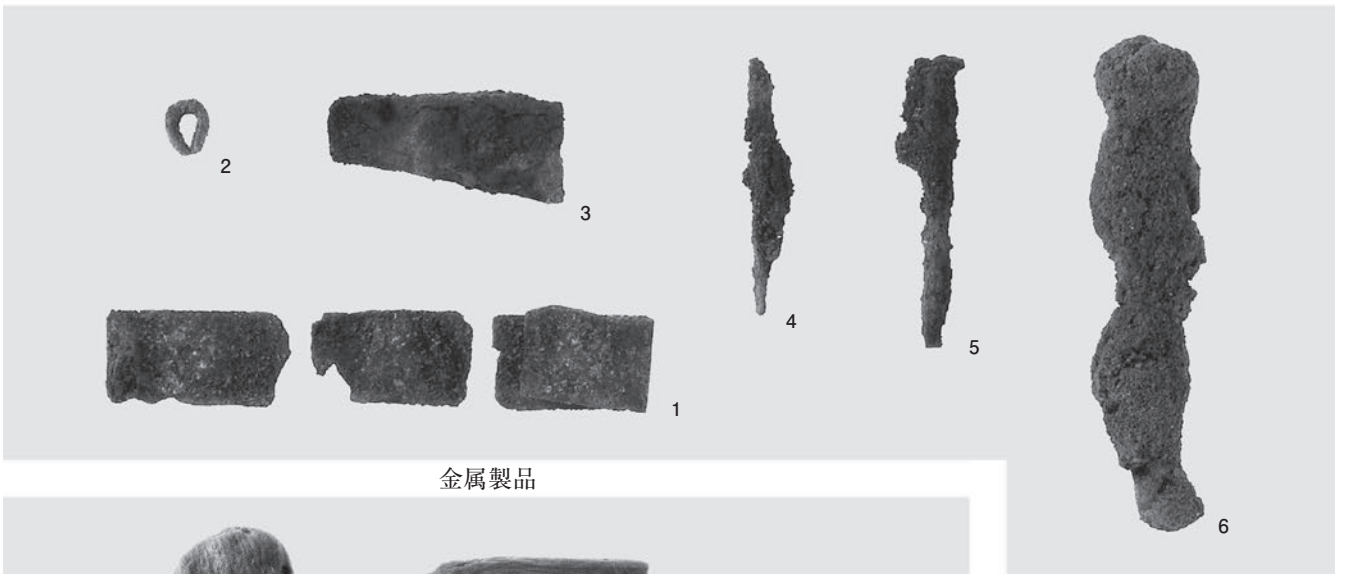
埴輪



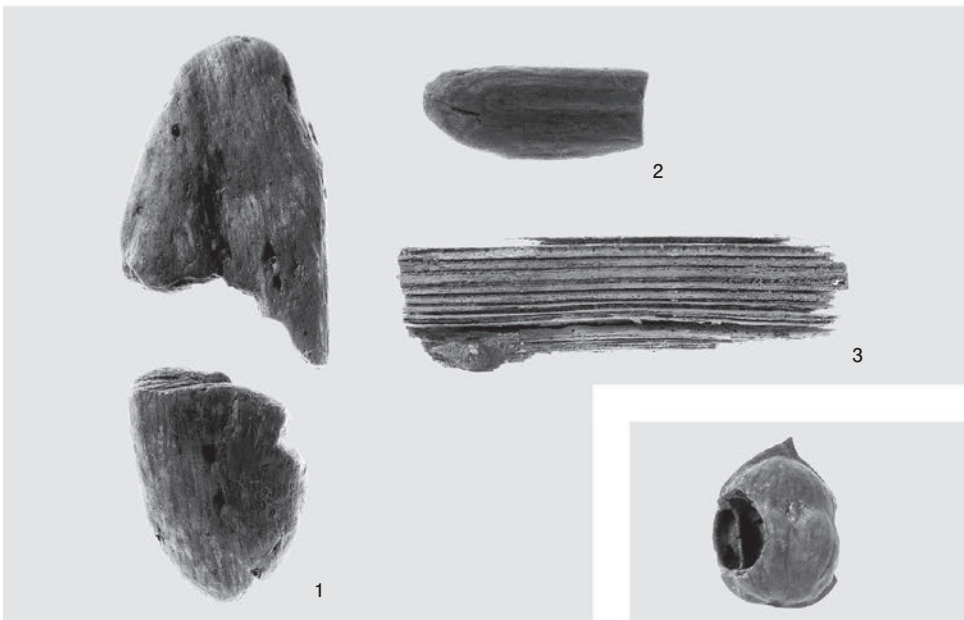
土製品・石製品



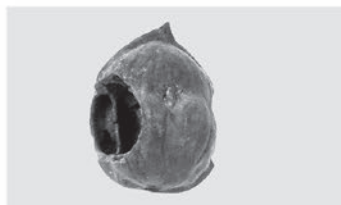
銭貨



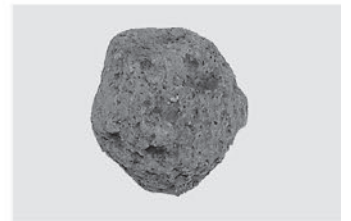
金属製品



木製品



植物遺体



軽石



土錘



貝類

報 告 書 抄 録

ふりがな	とうきょうがいかくかんじょうどうろまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしよ							
書名	東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書							
副書名	市川市平田遺跡（1）～（12）							
巻次	8							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第740集							
編著者名	大久保奈奈							
編集機関	公益財団法人千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL043-424-4848							
発行年月日	西暦2015年3月12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平田遺跡	千葉県市川市平田二丁目184-2ほか	12203	011	35度 43分 70秒	139度 55分 86秒	20040126～ 20040227 20060508～ 20060531 20061101～ 20061205 20070709～ 20070830 20071203～ 20071214 20080501～ 20080512 20110516～ 20110531 20111011～ 20111031 20120717～ 20120731 20121214 20140908～ 20140925	5,400㎡ 4,311.97㎡ 4,235.22㎡ 2,858㎡ 1,490㎡ 1,347㎡ 862㎡ 977㎡ 800㎡ 61㎡ 2,748㎡	道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
平田遺跡	包蔵地	縄文時代～古墳時代後期			縄文土器、土錘、弥生土器、土師器、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪			砂州上に造営された小型古墳の存在を確認した。
	古墳	古墳時代後期	古墳周溝	1基				
	集落跡	奈良・平安時代	堅穴住居 溝状遺構	4軒 4条以上	土師器、墨書土器（「人」）、須恵器、灰釉陶器			
	包蔵地	中近世	溝状遺構 土坑	6条 27基	中国陶磁（龍泉窯系）、陶磁器類、土製品、石製品、銭貨、金属製品、木製品			
要 約	<p>東京湾北辺に形成された市川砂州上の頂部付近において、直径12.5mの円墳と推測される古墳の周溝の一部を検出した。古墳の埋葬施設はみつからず、原位置を保って出土した古墳に伴う遺物は検出されなかったが、周辺区域から出土した埴輪の特徴から、古墳時代後期に埴輪を樹立した小型の古墳が砂州上に築かれたことが明らかとなった。</p> <p>平安時代の堅穴住居跡と溝状遺構は、これらの立地が、海辺に延伸する古代東海道の駅路沿いであり、また下総国府の南限に想定されている区域内にあることから、国府との関わりを推測させる遺構群と捉えることができる。</p> <p>遺跡の広範囲から出土した遺物の中には、弥生時代後期の装飾土器、古墳時代前期の土師器、中国陶磁を含む中世陶磁器類があった。当該時期の遺構は確認できなかったものの、砂州上が活動の場として、長期間機能していたことを推測できる。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第740集

東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書 8

— 市川市平田遺跡（1）～（12）—

平成27年3月12日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 東日本高速道路株式会社
千葉県美浜区若葉2-9-3

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉県中央区都町1-10-6
